

**土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書**

名古屋北部

5 万 分 の 1

平成 2 4 年 3 月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書 「名古屋北部」

目 次

はじめに

1	調査の概要	1
1.1	調査の目的	1
1.2	調査方法及び成果の概要	1
1.3	調査実施体制	2
2	調査地域の概要	3
2.1	地域の位置	3
2.2	地域の行政概要	3
2.3	地域の特性	6
3	地形及び土地の開発、保全及び利用との関係	9
3.1	地形概説	9
3.2	地形細説	11
3.3	地形と土地の開発、保全及び利用との関係	17
3.4	地形と災害及び保全との関係	19
4	土地利用の変遷の概要	21
4.1	過去の土地利用状況の概要	21
4.2	土地利用の変遷の概要	25
5	災害履歴概要	31
5.1	災害履歴概説	31
5.2	災害履歴詳説	31
6	調査成果図の見方・使い方	36
6.1	地形分類図	36
6.2	土地利用分類図	39
6.3	災害履歴図	39
6.4	成果図面の使い方	40
7	引用資料及び参考文献	42
7.1	引用資料	42
7.2	参考文献	44

資料 災害年表

はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、平成22年度から新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）に着手しました。

この「名古屋北部」図幅の調査成果は、中部圏地区の土地分類基本調査（土地履歴調査）の最初の成果として、平成23年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関係する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関、調査担当機関の関係の方々に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

1 調査の概要

1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺 5 万分 1 の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

(1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査成果や国土地理院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和 20 年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

(2) 本調査による調査成果

① 土地状況変遷情報

i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあっては改変前の自然地形を復元し分類している。

ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

iii. 土地利用分類図（2 時期分）

明治・大正期（現在から概ね 100 年前）と昭和 40 年代（同概ね 50 年前）の 2 時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

② 災害履歴情報

i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集し

たものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等を取りまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

1.3 調査実施体制

(1) 地区調査委員会（敬称略 順不同）

委員長

海津 正倫 奈良大学文学部 教授（名古屋大学名誉教授）

委員

藤本 潔 南山大学総合政策学部 教授

堀 和明 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授

愛知県 地域振興部 土地水資源課

岐阜県 都市建築部 都市政策課

名古屋市 緑政土木局 企画経理課

(2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省 国土政策局 国土情報課

② 受託機関

地形分類調査及び土地利用履歴分類調査

株式会社東京地図研究社

災害履歴調査

北海道地図株式会社

実施管理

株式会社パスコ

2 調査地域の概要

2.1 地域の位置

本調査の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「名古屋北部」の全域、北緯 $35^{\circ} 10' \sim 20'$ 、東経 $136^{\circ} 45' \sim 137^{\circ} 00'$ （座標は日本測地系^{*}）、愛知県北西部に位置する面積約 420km^2 の範囲である。図 2-1 に本図幅の位置図を示す。

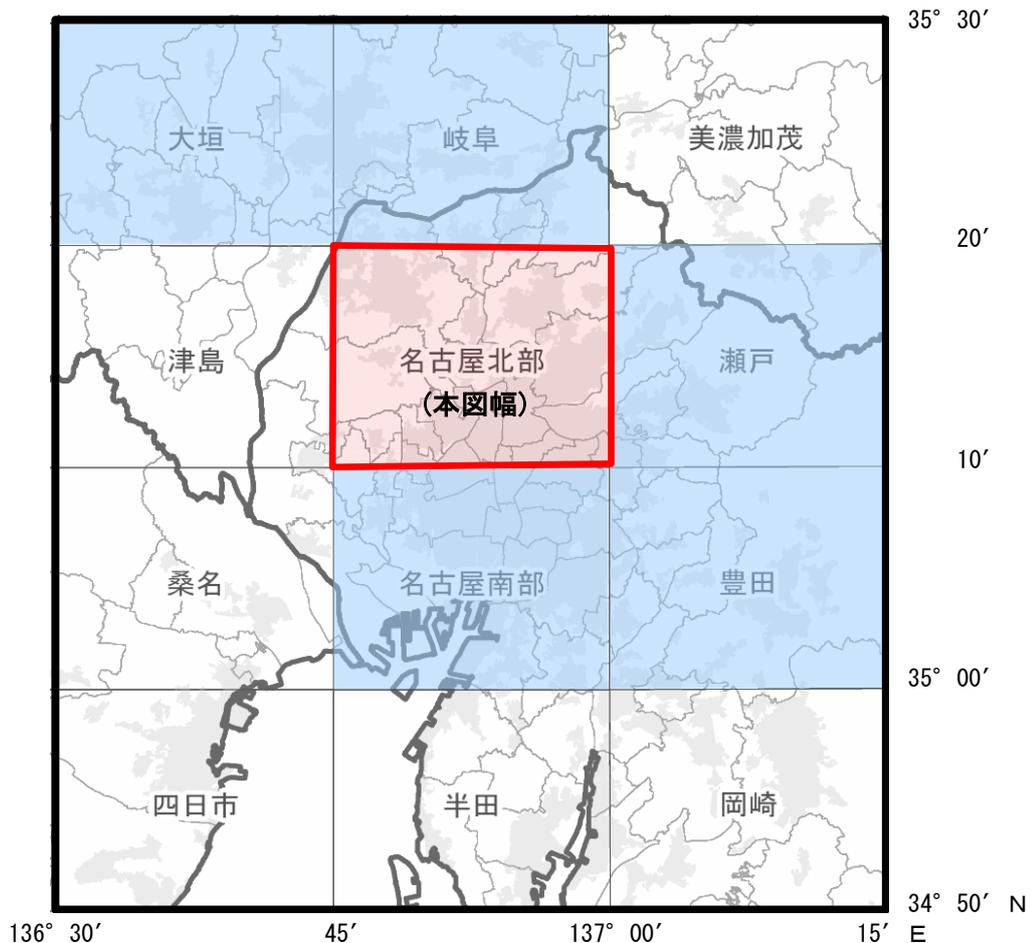


図 2-1 調査位置図

2.2 地域の行政概要

本図幅に関する市区町村は、愛知県北西部の 13 市 3 町（名古屋市、一宮市、春日井市、津島市、犬山市、江南市、小牧市、稲沢市、岩倉市、愛西市、清須市、北名古屋市、あま市、西春日井郡豊山町、丹羽郡大口町、海部郡大治町）である（図 2-2、表 2-1）。

^{*}世界測地系(日本測地系 2000)では、 $35^{\circ} 10' 11.6'' \sim 20' 11.6''$ N、 $136^{\circ} 44' 49.4'' \sim 59' 49.3''$ E の範囲。

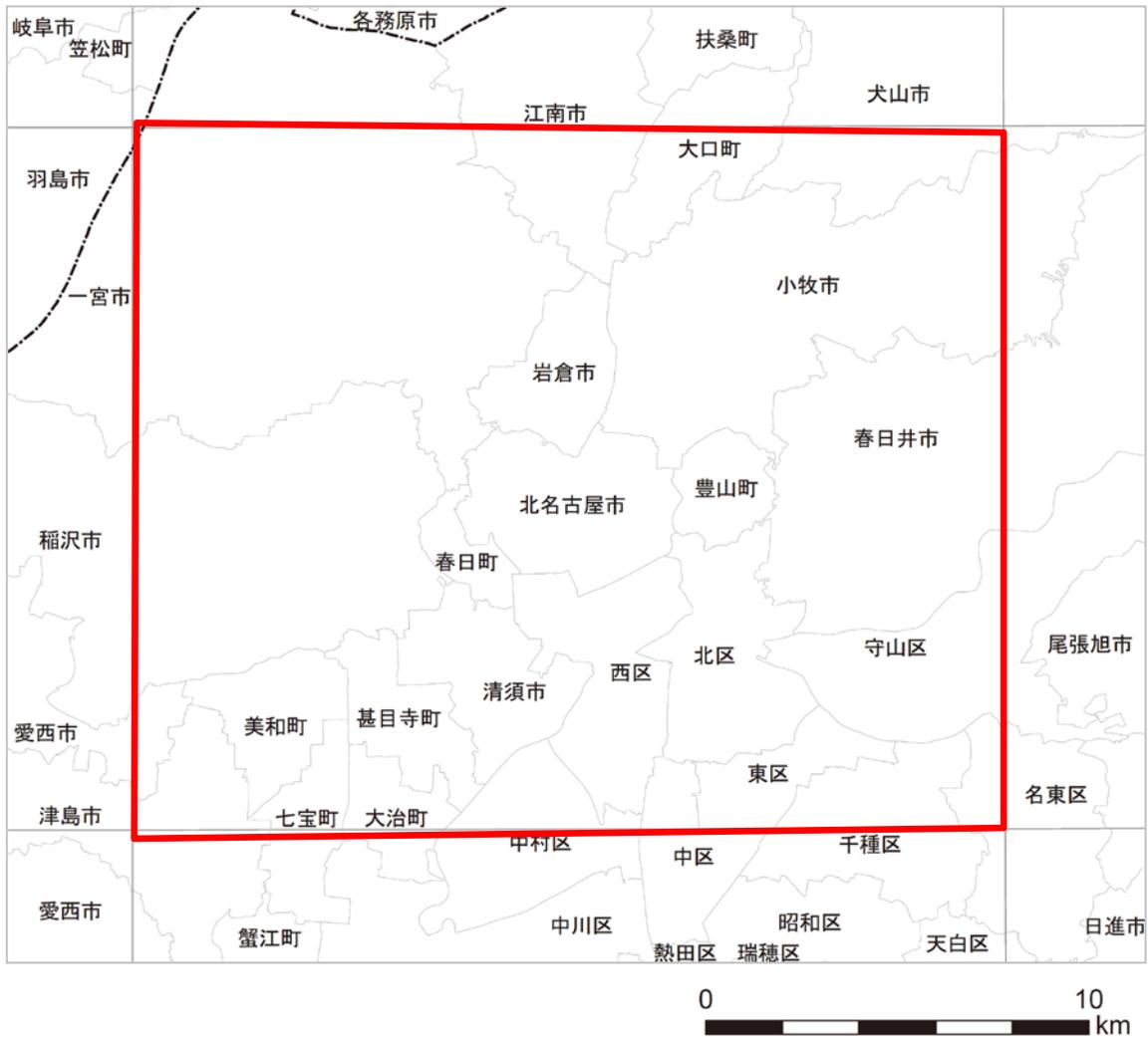


图 2-2 関係市区町村

表 2-1 関係市町村（面積、人口、世帯数）

	図幅内面積	行政面積	行政区域内世帯数	同 人口総数
	ha	ha	世帯	人
愛知県 名古屋市				
千種区	839	1,823	80,411	160,015
東区	769	770	38,562	73,272
北区	1754	1,755	74,641	165,785
西区	1790	1,789	66,133	144,995
中村区	626	1,631	68,877	136,164
中区	248	938	50,000	78,353
守山区	1713	3,399	67,087	168,551
名東区	333	*1,944	71,894	161,012
一宮市	7,860	11,391	135,837	378,566
春日井市	4,051	9,271	119,187	305,569
津島市	682	2,508	23,509	65,258
犬山市	1,011	7,497	27,359	75,198
江南市	1,076	3,017	35,768	99,730
小牧市	5,187	6,282	55,783	147,132
稲沢市	4,932	7,930	47,537	136,442
岩倉市	1,050	1,049	18,963	47,340
愛西市	211	6,663	20,747	64,978
清須市	1,733	1,732	25,344	65,757
北名古屋市	1,837	1,837	31,820	81,571
あま市	2,333	2,759	31,355	86,714
西春日井郡豊山町	619	619	5,776	14,405
丹羽郡大口町	865	1,358	7,723	22,446
海部郡大治町	443	659	11,285	29,891
計	41,965	78,621	1,115,598	2,709,144

1.図幅内面積は、本調査における図上計測値。

2.行政面積は国土地理院「平成 23 年全国都道府県市区町村面積調」（平成 23 年 10 月 1 日現在）による。

*印は、境界未定のため総務省「全国市町村要覧平成 22 年版」記載の便宜上の概算数値を参考値とした。

3.人口、世帯数は平成 22 年国勢調査人口集計結果による。

2.3 地域の特徴

(1) 沿革

本図幅の地域は、旧尾張藩と旧犬山藩に属し、明治4（1871）廃藩置県により名古屋県、犬山県が設置されたが、同年11月犬山県は愛知県に合併された。明治5年4月には名称が愛知県と改められ、同年11月には額田県（旧三河と旧尾張の知多郡）を廃止して愛知県の管轄に含め、現在の愛知県の範囲となった。

本図幅内の清須市には、戦国時代の武将織田信長の清洲城があり、信長の天下統一へ向けての足がかりとなった地域である。また、江戸時代には、徳川御三家筆頭である尾張徳川家によって治められ、特に第7代藩主徳川宗春の時代には商業都市として大きく栄えた。濃尾平野における新田開発等により農業も栄えたが、本図幅西部を占める木曾川流域には低湿地帯が広がっていたことから、たびたび氾濫による水害が発生した。明治時代に入ってから、木曾川、長良川、揖斐川の三川分流工事が行われ、水害被害は大きく軽減された。

明治以降は、東海地方の中心地域として市街地が徐々に拡大し、人口増加や町村合併などによって新市が多く誕生した。平成の大合併でも、一宮市（一宮市・尾西市・木曾川町）、稲沢市（稲沢市・祖父江町・平和町）が市域を拡大したほか、愛西市（佐屋町、立田村、八開村、佐織町）、清須市（西枇杷島町、清洲町、新川町、春日町）、北名古屋市（師勝町、西春町）、あま市（七宝町、美和町、甚目寺町）が新市として誕生した。また、一宮市と春日井市は特例市に指定されている。

本図幅の地域は、江戸時代から名古屋と中山道を結ぶ最も重要な街道として位置づけられていた美濃街道が通り、古くから交通の要衝であった。明治以降は鉄道整備が進み、明治19（1886）年には熱田駅から木曾川駅の間（現在の東海道本線）が開業したほか、明治期後半から名古屋電気鉄道株式会社（現在の名古屋鉄道株式会社）による市内路面電車、郊外線の整備が進んだ。現在では、市内路面電車は全線廃線となったが、JR東海道本線や名鉄名古屋本線、犬山線等は名古屋市都心部に向けての沿線住民の重要な交通手段となっている。

また、近年のモータリゼーションの進展により高速自動車道路網の整備が進み、東名・名神高速道路や名古屋高速道路等の結節点として重要な位置を占めている。

空路としては、本図幅内に県営名古屋空港があり、中部国際空港が開港する2005（平成17）年までは、愛知県の空の玄関口として数多くの国内線・国際線が発着していたが、現在は、コンピューター航空やビジネス機など小型機の拠点空港として、国内地方空港との間に数路線定期便が就航している。

(2) 気候

名古屋の気候を1981～2010年の名古屋地方気象台（名古屋市千種区日和町）の平年値（表2-2）からみると、年平均気温は15.8℃、最寒月（1月）の日最低気温の月平均は0.8℃、最暖月（8月）の日最高気温の月平均は32.8℃と、太平洋岸の温暖な気候となっている。

年降水量は1,535.3mmで、月降水量は3月から10月にかけて100mm/月を超え、秋霖期の9月に234.4mmで極大となる。月降水量の極小は12月の45.0mm/月で、11月～2

月の降雨は50～70mm/月前後で推移する。風向は、6月から8月は南寄りの頻度が最も高いが、それ以外は北寄りの風が卓越する。風速は3月に極大となるが、月ごとの変動は大きくない。また、年間日照時間は2,091.6時間で、梅雨期の6月に極小(149.9h/月)、夏季の8月に極大(200.4h/月)となり、6月を除き各月とも150時間/月を越える。

表 2-2 名古屋の気候表 (1981～2010 年の平年値)

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間
	(mm)	(°C)			(m/s)		(時間)
	合計	平均	最高	最低	平均	最多風向	合計
統計期間	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1990 ～2010	1981 ～2010
資料年数	30	30	30	30	30	21	30
1月	48.4	4.5	9.0	0.8	3.1	北北西	170.1
2月	65.6	5.2	10.1	1.1	3.4	北北西	170.0
3月	121.8	8.7	13.9	4.2	3.5	北北西	189.1
4月	124.8	14.4	19.9	9.6	3.3	北北西	196.6
5月	156.5	18.9	24.1	14.5	3.0	北北西	197.5
6月	201.0	22.7	27.2	19.0	2.7	南南東	149.9
7月	203.6	26.4	30.8	23.0	2.7	南南東	164.3
8月	126.3	27.8	32.8	24.3	2.9	南南東	200.4
9月	234.4	24.1	28.6	20.7	2.7	北北西	151.0
10月	128.3	18.1	22.8	14.1	2.6	北北西	169.0
11月	79.7	12.2	17.0	8.1	2.6	北北西	162.7
12月	45.0	7.0	11.6	3.1	2.8	北北西	172.2
年	1,535.3	15.8	20.7	11.9	2.9	北北西	2,091.6

「日本気候表(気象庁,2011)」による名古屋地方気象台の平年値。

統計期間は1981～2010年の30年間。但し最多風向は、1990～2010年の21年間。

(3) 地形及び地質の概要

本図幅の範囲は、愛知県の西北部に位置し、東側には台地・段丘が連なり、中央部以西には濃尾平野の低地が広がる、東高西低の地形を呈している。

地形についてみると、図幅の西端が木曾川左岸であることから、中西部には自然堤防、湿地、旧河道が細かく混在した氾濫原低地が広がっているほか、南東部の庄内川沿いにも氾濫原低地が広がっている。図幅中央北には、木曾川扇状地の末端が張り出しており、その中に旧河道等低地が幾筋かみられる。また、南西部には海拔ゼロメートル地帯である濃尾平野の北端が見られる。これらの低地部では、以前は多くが農地として利用されていたが、現在では都市化の拡大とともに人為的に改変がなされ、盛土地が増大し、住宅地や工業用地として利用されている範囲が広がっている。

図幅東部では、台地・段丘群が広く分布し、尾張丘陵へと続いている。この地域では高度経済成長期以降、大規模な宅地造成を主とする人工改変が行われている。

図幅北東端には、古生代から中生代の堆積岩類からなる尾張山地の西端がわずかにみ

られる。

地質についてみると、図幅北東端の山地部では、チャート、砂岩等の固結堆積物が分布する。また、標高 100m前後の尾張丘陵は、鮮新世の半固結堆積岩や、更新世の半固結の礫層群から構成される。

台地を構成する地層は更新世中・後期の地層で、名古屋市中心部に位置する熱田台地は海成の砂・泥からなり、それ以外の台地は礫・砂からなる河成段丘である。

低地部は礫・砂・泥等の未固結の沖積層からなり、自然堤防や扇状地では礫・砂を主とし、旧河道や氾濫原低地等では砂や泥を主とする。

(5万分の1土地分類基本調査「津島・名古屋北部」説明書による)。

3 地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

3.1 地形概説

(1) 地形分布の概要

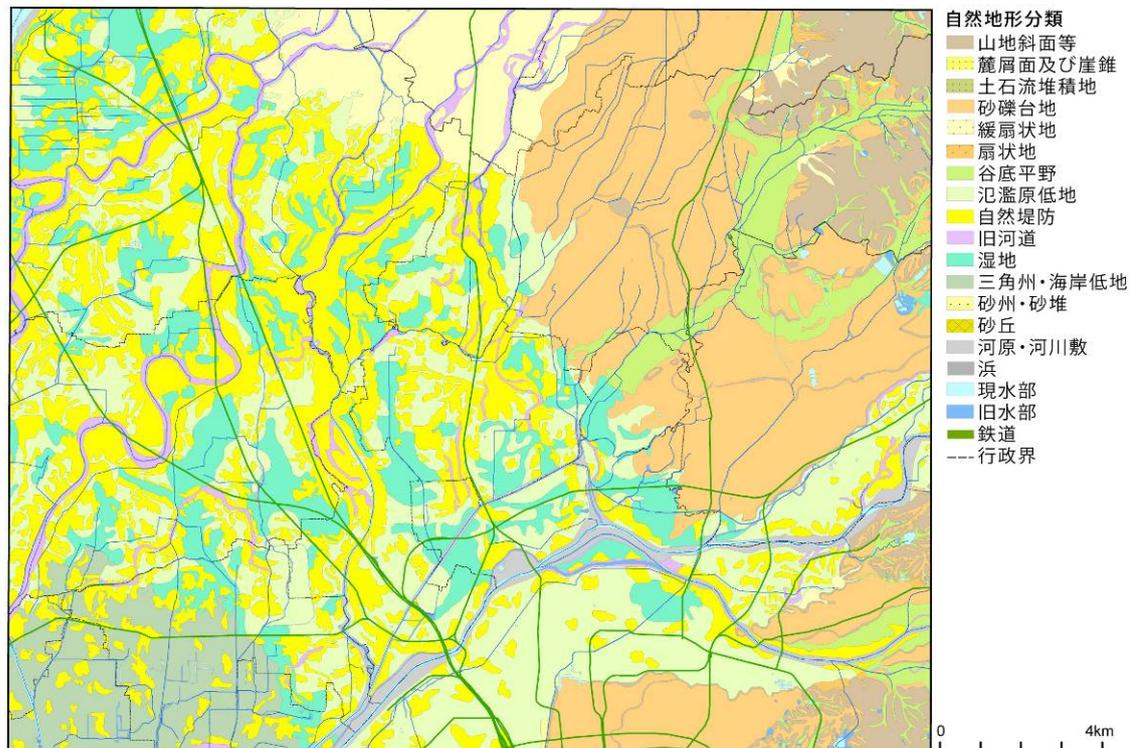


図 3-1 名古屋北部地域の自然地形分類図

自然地形分類図をみると、本図幅の自然地形は山地、丘陵地、台地および低地に分類される（図 3-1）。濃尾平野全体では東部に丘陵や台地が発達し、それらは西方へ向かって低くなり、やがて沖積面下へと埋没していく。西部には、木曾三川や庄内川をつくる低地が養老山地まで続く。地下構造も地形に対応するように、西部ほど厚く堆積することが知られている。このように濃尾平野は猿投山から養老山地の間にある地塊が西方に傾き、沈みこむような地下構造を形成していることから、それを濃尾傾動地塊（運動）と呼んでいる（桑原、1968）。詳述すると、濃尾傾動地塊は猿投山の西縁部を限る猿投-境川断層と、養老山地東縁部を限る養老断層との間の地塊運動で、須貝・杉山（1999）によると沈降速度は養老断層の活動に伴い 1m/1000 年に達すると考えられている。

山地は、犬山市を中心に広がる尾張山地の西端が本図幅の北東端にみられる。尾張山地は古生代から中生代の堆積岩類がつくる標高 200~300mほどの山地で、本図幅においては 292.8mの本宮山を最高点とし、急峻な斜面を持つ。山麓には丘陵地性の小起伏面や緩斜面がみられ、低地との間には緩扇状地や小規模な段丘が発達する。本宮山の周辺には採石による切土地があるほか、山麓の丘陵地性の小起伏面には住宅地がつけられ、斜面の改変が行われている。

本図幅における**丘陵地**は尾張丘陵と総称され、いずれも標高 100m前後で、鮮新世に

堆積した東海層群矢田川累層と、それらを不整合に覆う更新世の礫層群によって構成される（坂本ほか、1983）。各丘陵地をみていくと、春日井・小牧丘陵では小規模な谷底低地が丘陵を開析し、山麓の桃山周辺には上位面相当の段丘が広がる。庄内川の南側には瀬戸丘陵の西端がみられ、高位面相当の段丘が発達する。矢田川の南には東山丘陵が広がり、その東側の丘陵頂部は高位面相当の段丘面がみられる。いずれの丘陵地も丘陵頂部を中心に、宅地造成やゴルフ場建設による大規模な切り盛り造成が進んでいる。

台地は、海や河川による堆積または侵食作用により形成された平坦面を持つ地形である。本図幅には高位から低位までの複数の段丘があるが、台地として大きな広がりを持つのは、名古屋市街の中心部を乗せる熱田台地、名古屋市守山区を中心にする守山台地、小牧市を中心にした小牧台地と、春日井市などを乗せる庄内川右岸に発達する台地である。熱田台地は更新世後期の海進時に堆積した泥層と砂層から成る台地だが、その他の台地は木曾川や庄内川が運んだ砂礫による更新世の河成段丘である。

台地上は洪水の被害も少なく、平坦面をほとんど改変することなく利用できたことから、名古屋市街地を始めとする都市や集落、街道などが発達した。また、台地上は水利が悪いため稲作には不向きだが、本図幅においては木津用水などの用水路の掘削によって台地上でも稲作が行われている。

低地は、河川が運搬してきた砂や泥を河道や河口周辺に堆積させる場所である。本図幅は濃尾平野の中心部で、木曾川および庄内川がつくった典型的な低地地形がみられる。

木曾川扇状地（犬山扇状地）は、木曾川が尾張山地から濃尾平野へ移り変わるところに形成される大規模な扇状地である（扇頂部は本図幅北側の「犬山」図幅）。本図幅内の扇状地は、扇状地面の勾配が小さいため緩扇状地とした。扇状地は低地の地形のなかでは高燥なので、畑や集落が立地する一方で、旧河道や浅い谷などのかつての河川跡である帯状の窪地が幾筋もあり、田として利用されている。

濃尾平野（羽島・一宮氾濫原）は、一宮市以南の低地と庄内川沿いの低地からなり、氾濫原低地、自然堤防、湿地、旧河道で分類される。氾濫原低地は、木曾川や庄内川が勾配の少ない低地で蛇行を繰り返して土砂を堆積させた地形である。自然堤防は、氾濫原低地のなかで河川の氾濫後に河道に沿って比較的粗粒物質が堆積した比高数メートルの微高地で、本図幅においては著しく発達する。自然堤防の背後は、排水環境が閉ざされるため湿地（後背湿地）を形成する。かつての河川跡である旧河道は、自然堤防地帯を縫うように走る一段低い帯状の凹地である。

本図幅の南西部には、濃尾平野（海津・蟹江三角州）の北端がみられる。本調査では標高0 m以下の地域を三角州・海岸低地として分類した。三角州は河川の河口付近において砂泥を堆積させた地形で、河口の前進と共に堆積地を前方へ移動させながら発達する。濃尾平野（海津・蟹江三角州）は概ね低湿で、自然堤防は小規模で発達が悪い。

自然堤防の発達や三角州の形態は、海岸線の変化に影響される。濃尾平野における海岸線変化については多数の研究が行われ、地質構造や海岸線の変遷などが解明されてきた（井関：1962、海津：1979、小野：2004 など）。海岸線は、縄文海進時には濃尾平野北部まで入り込み、かつ、南東側に張り出すような大垣-稲沢-名古屋市西部付近であったと推定さる（海津、1979）。小野（2004）によると、その後、堆積速度は一定ではな

いが徐々に南下し、1600年頃には現在の水準に至ったとされる。沖積層の層序は、下位から沖積層基底礫層、下部砂層、中部シルト・粘土層、上部砂層、沖積陸成層に区分され、このうち中部シルト・粘土層より上位は縄文海進以降に三角州を形成していた層であることが判明している。

丘陵地や台地の間にもそれらを開析し、土砂を堆積させる狭長な平坦面があり、それらを谷底低地として分類した。

低地は明治期までは自然堤防に畑や集落をつくり、谷底低地、氾濫原低地、湿地、旧河道、三角州などの洪水時に冠水する恐れのある低湿な場所は水田やため池として利用されてきたが、名古屋市域の拡大や周辺の都市化による影響で、低地に盛土を施行して工場や住宅地がつくられている。

表3-1は、自然地形を本図幅における市区町村ごとの面積の集計結果である。

表3-1 本図幅内の市区町村別地形分類面積

区分	名古屋市																	一宮市	春日井市	津島市	大山市	江南市	小牧市	稲沢市	菊池市	愛西市	清須市	北名古屋市	あま市	豊山町	大口町	大治町	合計
	千種区	東区	北区	西区	中村区	中区	守山区	名東区	小計																								
山地	山地斜面等	2.42	0.27	0.02	0.01	0.00	0.09	2.06	1.77	6.64	0.00	1.32	0.00	4.53	0.00	9.85	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.11	0.12	0.00	22.56							
	麓斜面及び崖壁	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.11	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.11							
	土石流堆積地	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.04							
山地計	2.42	0.27	0.02	0.01	0.00	0.09	2.06	1.77	6.64	0.00	1.32	0.00	4.53	0.00	10.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.11	0.12	0.00	22.72								
台地	砂礫台地	3.81	4.38	1.31	0.00	0.00	2.31	4.64	0.36	16.81	0.00	24.58	0.00	3.53	0.01	29.69	0.00	0.00	0.00	0.10	0.00	2.83	5.73	0.00	83.28								
	緩起伏地	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.29	0.00	0.29	8.07	0.00	0.00	0.62	9.34	0.51	0.00	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.37	0.00	21.26								
	扇状地	0.24	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.30	0.00	0.00	0.00	0.30	0.00	0.28	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.88								
	谷底平野	0.64	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	1.90	1.00	3.57	0.00	4.38	0.00	1.00	0.00	8.41	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	1.18	0.00	0.00	18.54								
	氾濫原低地	0.56	2.48	7.07	10.49	4.03	0.01	3.62	0.00	28.26	16.24	5.38	0.00	0.00	0.00	1.93	13.13	3.24	0.10	6.20	5.89	4.18	0.88	0.00	0.22	85.63							
	自然堤防	0.17	0.34	2.63	2.83	1.49	0.00	2.30	0.07	9.82	34.24	1.82	1.10	0.00	0.00	0.22	21.22	4.78	0.02	6.47	7.24	5.83	0.02	0.00	1.09	93.85							
	旧河道	0.00	0.00	0.40	0.10	0.00	0.00	0.25	0.00	0.75	4.18	0.43	0.00	0.00	1.37	0.08	3.23	0.50	0.04	0.47	0.52	0.37	0.01	0.32	0.00	12.28							
	湿地	0.00	0.00	3.88	2.51	0.00	0.00	0.00	0.00	6.39	14.46	0.40	0.00	0.00	0.17	10.57	1.67	0.02	2.52	4.21	2.51	1.11	0.00	0.70	0.00	44.74							
	三角州・海岸平野	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	5.53	0.00	0.00	0.83	0.00	1.79	0.00	0.00	9.43	0.00	0.00	1.99	16.57							
	砂州・砂堤(礫洲・礫堤)	0.00	0.00	0.00	0.09	0.04	0.00	0.00	0.00	0.13	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.13							
	砂丘	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00							
	河原・河川敷	0.16	0.17	1.28	1.24	0.46	0.00	1.49	0.06	4.88	0.21	0.73	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	0.82	0.14	0.42	0.00	0.00	0.18	0.00	7.37							
	浜	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00							
低地計	1.78	2.99	15.28	17.25	6.01	0.01	9.92	1.13	54.36	77.40	13.14	6.63	1.92	10.71	11.61	48.99	10.25	1.97	16.49	17.98	22.74	3.19	2.89	4.17	304.26								
水部	現水部	0.18	0.05	0.63	0.52	0.17	0.08	0.48	0.03	2.13	0.85	1.13	0.12	0.12	0.04	0.49	0.29	0.12	0.14	0.66	0.23	0.44	0.07	0.08	0.17	7.08							
	旧水部	0.22	0.00	0.30	0.13	0.08	0.00	0.03	0.05	0.80	0.35	0.35	0.08	0.00	0.00	0.08	0.04	0.12	0.00	0.18	0.05	0.16		0.02	0.08	2.32							
	水部計	0.40	0.05	0.93	0.64	0.25	0.08	0.51	0.07	2.93	1.20	1.48	0.20	0.12	0.05	0.57	0.33	0.25	0.14	0.84	0.28	0.59	0.07	0.10	0.25	9.40							
合計	8.39	7.69	17.54	17.90	6.26	2.48	17.13	3.33	80.74	78.60	40.51	6.82	10.11	10.76	51.87	49.32	10.50	2.11	17.33	18.37	23.33	6.19	8.65	4.43	419.65								

資料：「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による。

3.2 地形細説

本図幅における地形地域区分は、20万分の1土地分類基本調査（愛知県、1974）（岐阜県、1975）、5万分の1土地分類基本調査（地形分類図）（愛知県、1972、1985、1986）（岐阜県、1983a、1983b）、その他の文献（町田・海津ほか、2006等）を参考に、濃尾平野全域で統一の区分及び呼称とした（図3-2）。

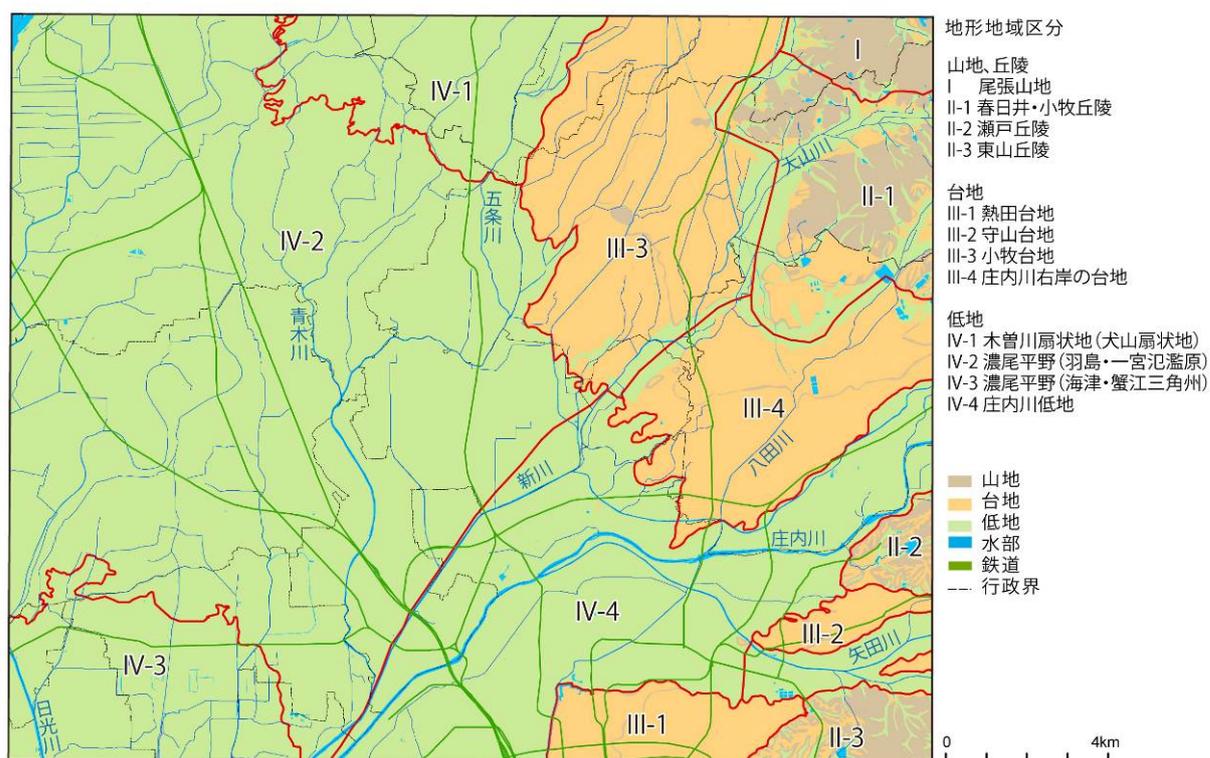


図 3-2 本図幅における地形区域区分

(1) 山地

本図幅の北西部には、犬山市を中心とする**尾張山地**（I）の南西端が含まれる。本図幅内では本宮山（標高 292.8m）を最高峰とし、地質は古生代二畳紀から中生代ジュラ紀にかけてのチャート、砂岩、泥岩の各層と、白亜紀の貫入岩類を一部に認める（坂本ほか、1984）。山地は小起伏の尾根を持つが、山腹は急斜面で開析が進んでいる。強固な岩石と密な植被により、斜面崩壊や山麓部の堆積地形は少ない（愛知県、1986）。山麓には崖錐や扇状地がみられるが、数は多くない。

本宮山周辺では、山頂西側に 2 箇所と東側に 1 箇所の採石場がみられる。主に砂岩を採掘しており、道路や建物用のコンクリート製造に利用されている。

小牧台地には、北側に岩崎山（標高 54.6m、小牧市岩崎）と小牧山（標高 85.9m）の孤立丘がある。いずれの小丘も尾張山地と同じ時代のもので、岩崎山は尾張山地にみられる貫入岩類の花崗岩からなり、小牧山はチャート層からなる。これらの小丘は戦国時代に山城が築かれたことで知られ、現在は史跡公園として整備されている。

(2) 丘陵地

春日井・小牧丘陵（II-1）は尾張山地の南西の蓮池や本庄などの丘陵地と、大山川を挟んで南側に広がる小牧市篠岡、高根、大草、桃山などがある丘陵地を指す。丘陵頂部は標高約 70～100m で定高性を持ち、北部では大草面、西部では上末面と呼ばれる（春日井団研グループ、1971）。地質は東海層群矢田川累層で、礫-砂礫層を主として砂層や泥質層をはさみ、火山灰や亜炭を伴う（坂本ほか、1984）。丘陵の周縁には上位～中位

段丘が発達し、住宅地や畑、果樹園として利用されている。

丘陵頂部では人工改変が進み、桃花台ニュータウンをはじめ、つつじが丘団地、久保山団地などの建設による大規模な人工平坦面が形成された。

瀬戸丘陵 (II-2) は竜泉寺丘陵とも呼ばれる丘陵地で、東隣の「瀬戸」図幅が中心であるが、本図には名古屋市守山区にその西端が含まれている。丘陵頂部は比較的平坦で高位段丘面に相当する。地質は矢田川累層と、それを高位礫層の唐山層や八事層が不整合に覆う(坂本ほか、1984)。本地域もゴルフ場や緑ヶ丘の住宅地、金城学院大学などで段丘面や斜面を大きく崩しているが、小幡北や翠松園の住宅地は自然地形を大きく壊すものではなく、段丘面や斜面の改変は小さい。

東山丘陵 (II-3) は名古屋市千種区から名東区にかけての地域が広がるが、主たる部分は隣接図の「名古屋南部」や「豊田」図幅にあり、本図幅においてはその北部の一部にすぎない。丘陵頂部は標高 60～80m で開析が進み、瀬戸丘陵と同様に矢田川累層が唐山層や八事層に覆われているが、名東区側ではその礫層を欠くために千種区側よりも低く、地形の逆転をおこしている。千種区側では、丘陵頂部に八事層を侵食して形成された上位面が発達する。丘陵の北縁には小規模の扇状地や台地がみられる。

この地域は、名古屋市に編入されてから住宅地開発が著しく進み、名東区側ではほぼ全域が人工平坦面になっている。一方、千種区側も斜面や段丘面上に住宅地などがみられるが、大規模な谷埋め造成ではなく小規模な改変に留まっているところもみられる。

(3) 台地・盆地

本図幅では高位～低位の各段丘が確認されているが、高位、上位面は地形名称区分において丘陵地内に含まれている。そのため、本項では台地上の中位～低位面相当の段丘を中心に解説する。

熱田台地 (III-1) は名古屋市街を乗せる標高 30～10m 前後の平坦面で、本図幅においては北部が含まれるのみだが、南隣「名古屋南部」図幅へと続く南北に長い台地である。熱田台地は中位段丘面に相当し、熱田面と呼ばれる。南下するほど低くなり、北縁と西縁は庄内川などの侵食作用により、崖を持って沖積面と隔てられている。熱田面は海成層の熱田層からなり、下部粘土層と上部砂層を中心にシルトや軽石が挟まれる層で、約 4 万年前に形成されたと考えられている。久屋大通りより東側は、熱田面よりも一段低い大曾根面である。千種駅より南側では斜面があり、熱田台地を凹地状にしている。大曾根面は、熱田面形成後に旧矢田川の流れによって 5～6 m の河成礫層を堆積させた面で、形成期は最終氷期極大期の 1.8～2 万年前とされる(坂本ほか、1984)。

熱田台地における唯一の人工改変地は、北西縁に築城された名古屋城の人工平坦面である。茶屋が坂や池下周辺の浅い谷では盛土が施されているものと考えられる。

守山台地 (III-2) は名古屋市守山区の中心地で、庄内川と矢田川の間にある台地である。標高 30～25m で西へ向かって緩く傾くが、台地上は極めて平坦で浅い谷等もほとんどみられない。台地の周縁は急崖である。台地面は熱田台地から続く熱田面である。ここでの熱田層は、東部で数 cm 大の垂円礫層で配列の方向性は見られないが、西部では河成の砂礫層を認める。

小牧台地 (III-3) は犬山市から小牧市にかけて北北東から南南西方向に広がり、小

牧山の南で下位面相当の小牧面と、低位面相当の鳥居末面の2面にわかれる。構成物質などから木曾川の旧扇状地と考えられている台地で、地表面には旧河道に由来する浅い谷が複数確認できる。北部の小牧面は標高40~20mで、南南西方向に高度を下げ、木曾川扇状地や沖積面との境界や、大山川との低地との境界は不明瞭である。構成物質は直径20cm大のチャート質の円礫を主とした河成礫層の上に、赤色のローム様土壌が1mほど堆積する(坂本ほか、1984)。鳥居末面は標高15~10m程度で、小牧市街の南側では小牧面との明瞭な差をつくるが、全体的に沖積面との比高は小さく、やがて沖積面下に没する。この面も小牧面と同様に、チャートや砂岩を主とする亜円礫層で、表層の一部には黒ボク土もみられる(愛知県、1986)。両面は最終氷期の海面低下時の前後に訪れた海水準の小変動で形成されたと考えられ、小牧面が約3万年前、鳥居末面が約3~2万年前とされる。

小牧台地は木津用水の開削により、明治期から水田がみられる台地で、多数の新田集落がつけられてきた。現在は市街化が進み、工業団地や住宅地が形成されているが、その合間には水田がみられる。名古屋空港は、鳥居末面の南端を人工平坦地にしたものである。

庄内川右岸の台地(III-4)は、名古屋空港の南側半分から春日井市にかけて広がる台地である。小牧面と同様に北側と南側で2面にわかれ、北側は標高約35~25mで西側に傾く。この面は、八田川や大山川の谷底低地によって小牧台地とは連続性を絶たれているが、小牧面からなる下位段丘で構成物質も同じである。南側は春日井市街地を乗せる鳥居末面である。標高約25~15mで西側へ低下し、勝川で沖積面下に埋没するが、小牧面や庄内川の沖積面とは急崖や斜面によって分けられる。小牧台地の鳥居末面は木曾川由来であるのに対して、本地域は庄内川の旧扇状地堆積物でつくられる。庄内川は河成段丘の発達がよく、田力ほか(2011)では中、上流部にかけて10段の段丘を認定し、隆起速度も算出されている。

その他の台地としては、丘陵地の周辺に発達する台地があげられる。春日井・小牧丘陵の周縁には高位~上位面相当の段丘面が認められているが、その詳細な位置や名称は文献によって異なる(国土地理院:1968、1975、春日井団研:1971、坂本ほか:1984、愛知県:1986)。春日井・小牧丘陵の南西部、春日井市田楽を中心した平坦面は熱田層上部層で構成される中位段丘面で、田楽層と呼ばれる。田楽面では亜円礫層が確認されることから、東方から南西流した旧庄内川水系が形成した地形面と考えられている(春日井団研、1971)。八田川や大山川沿いには沖積面との比高が数mの段丘があるが、構成層や形成年代は解明されていない(坂本ほか、1984)。

(4) 低地

木曾川扇状地(犬山扇状地)(IV-1)は、犬山市を扇頂として約12km南の江南市、一宮市に達する扇状地である。扇頂の標高は約50m、扇端では標高11m程度で、勾配は非常に小さく、緩扇状地として分類される。木曾川は木曾山脈に端を発し、美濃三河高原までの山中を急勾配で流下してくるが、この犬山において勾配の小さい濃尾平野に出るため、河道を自由に振りながら上流から運搬してきた土砂を堆積させ、扇状地を形成する。扇状地の堆積物は数センチ大の円礫を含む砂礫層と、細粒-中粒の砂層が1.5~2

m程度の層厚で表面を覆う（坂本ほか、1984）。砂礫層は扇頂で 55m、扇端では 140m に達する。層厚は傾動運動の影響を受けて南西部ほど厚く、南へ続く濃尾平野（羽島・一宮氾濫原）へ埋没する。砂礫層の堆積期時期は表層 5 m 程度までが完新世、18m 付近では熱田層に似た軽石層を挟むことからこれより上部が低位（鳥居松）面、下位（小牧）面、中位（熱田、田楽）面形成期と考えられる（建設省計画局：1965、愛知県：1986）。

扇状地面には、扇頂から扇端に向かって複数の旧河道や浅い谷が走っている。これらの旧河道は木曾川の分流であった一之枝川、二之枝川、三之枝川、黒田川だが、江戸時代に幕府の治水政策により廃川になってからは、小河川が残るのみとなった（図 3-3）。旧河道は扇状地面よりも 2~3m ほど低く、細砂やシルトが堆積する。

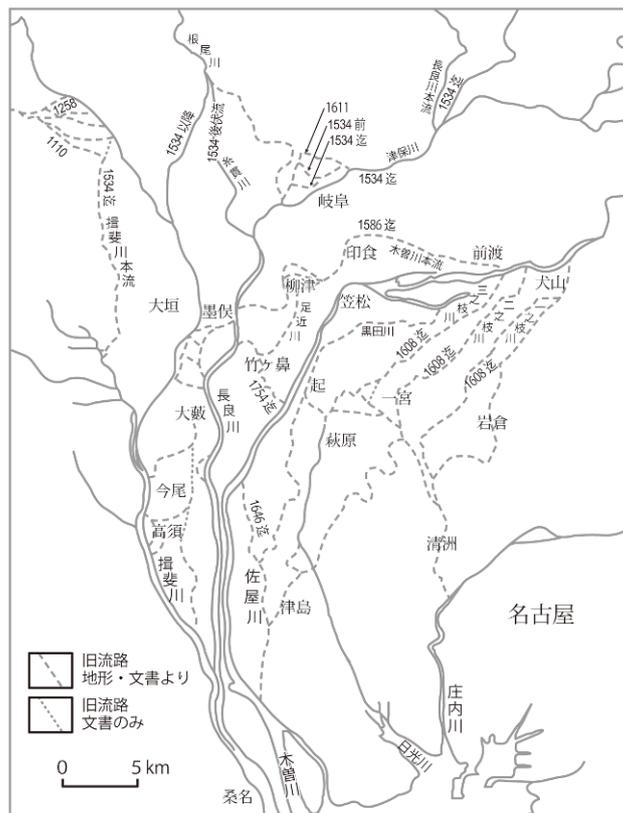


図 3-3 木曾川、長良川、揖斐川河道変遷図（大矢、1956）

濃尾平野（羽島・一宮氾濫原）（IV-2）は木曾川扇状地（犬山扇状地）の南側、小牧台地の西側に続く平野である。この地域では、木曾川の氾濫によって形成される自然堤防が、前述した木曾川の分流に沿うように南北方向へ分布している。自然堤防の構成物質は木曾川上流の花崗岩地域から運搬された細砂-中粒砂であるが、北部の扇状地との境界付近では細礫を含み、南部ではシルト質になる（坂本ほか、1984）。周囲は後背湿地性の低湿な氾濫原低地で、そのなかでもより低湿なところは湿地として分類した。旧河道は、木曾川扇状地（犬山扇状地）から続く旧木曾川の分流が、扇状地のそれよりも大きく蛇行しながら流下する。このような場所は、砂、粘土、シルトなどの泥質層である（坂本ほか、1984）。

自然堤防の形成は、海よりも河川の作用が大きくなってから始まる。有史以降も小規模な海水準変動に伴って、一旦形成された自然堤防や旧河道の埋没が確認されている（海津：1992、小野ほか：2001 など）。現在の自然堤防は、木曾川の分流に沿って発達するもので、連続性の良いものは近世初頭までに形成され、氾濫原低地にまばらに分布し、連続性が悪いものはそれよりも古い時代のものと考えられている。

濃尾平野（羽島・一宮氾濫原）では、活断層研究会（1980、1991）などに名古屋市西方から稲沢、一宮を通り岐阜市に至る約 32km の伏在活断層、岐阜—一宮断層帯が推定されていたが、その後の愛知県の調査により現時点では存在が否定されている（地震調査研究推進本部、2001）。

濃尾平野（海津・蟹江三角州）（IV-3）は、濃尾平野（羽島・一宮氾濫原）の南側、標高 0 m 以下の地帯に広がっている。本地域の三角州は、木曾川や庄内川の河口に形成された地形で、自然堤防の発達が悪く、低地には湿地状の水田や蓮田が広がる。低湿な三角州地帯では排水のためのクリークが発達し、南隣の「名古屋南部」図幅では、江戸時代以降にこの三角州の地先の干潟を排水して陸化させた干拓地が広がる。

庄内川低地（IV-4）は、本図幅の東側の庄内川をつくる低地である。庄内川は岐阜県の恵那山地に源流を持ち、山中のなかを瑞浪、土岐、多治見などの盆地を通りながら西流する河川である。庄内川は東隣「瀬戸」図幅の高蔵寺付近で山地から平野に出るが、木曾川と異なり扇状地は形成されない。自然堤防は河川沿いと、下流の氾濫原低地の一部に形成されているが、木曾川ほどの発達はみられない。春山・大矢（1966）は、庄内川では上流から花崗岩起源の砂礫が供給されるが、流路にある盆地で留まり、下流域への運搬が少ないことが扇状地や自然堤防を発達させない一因であるとしている。また、下流域では木曾川分流による堆積地形により、庄内川の氾濫原の範囲が限定されるものと考えられている。

庄内川の線形は、名古屋市と清須市の周辺で大きく南へ曲がるが、この屈曲部には洗堰緑地や庄内緑地などの遊水池が設けられている。庄内川の北側につくられた新川は洪水時の放水路の役目を持つ。また、矢田川は庄内川との流路変更を行うなどの洪水対策が行われている。

その他の低地としては、猿投山を源流として流れ、本図幅の南東部にあたる守山台地と東山丘陵の間の低地をつくる矢田川低地がある。この低地は河川沿いに自然堤防を発達させ、名古屋市北区安井周辺で庄内川に合流するが、前述のように庄内川との合流点は河川改修で移されたものである。

小牧台地と春日井・小牧丘陵を画する大山川と八田川にも谷底低地がある。両河川は小牧台地上の低い部分を流下するが、ほとんど下刻せず、台地との比高も不明瞭である。山地や丘陵地の周辺では、この面を薄く沖積層が被覆しているところも多い（愛知県、1986）。

3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

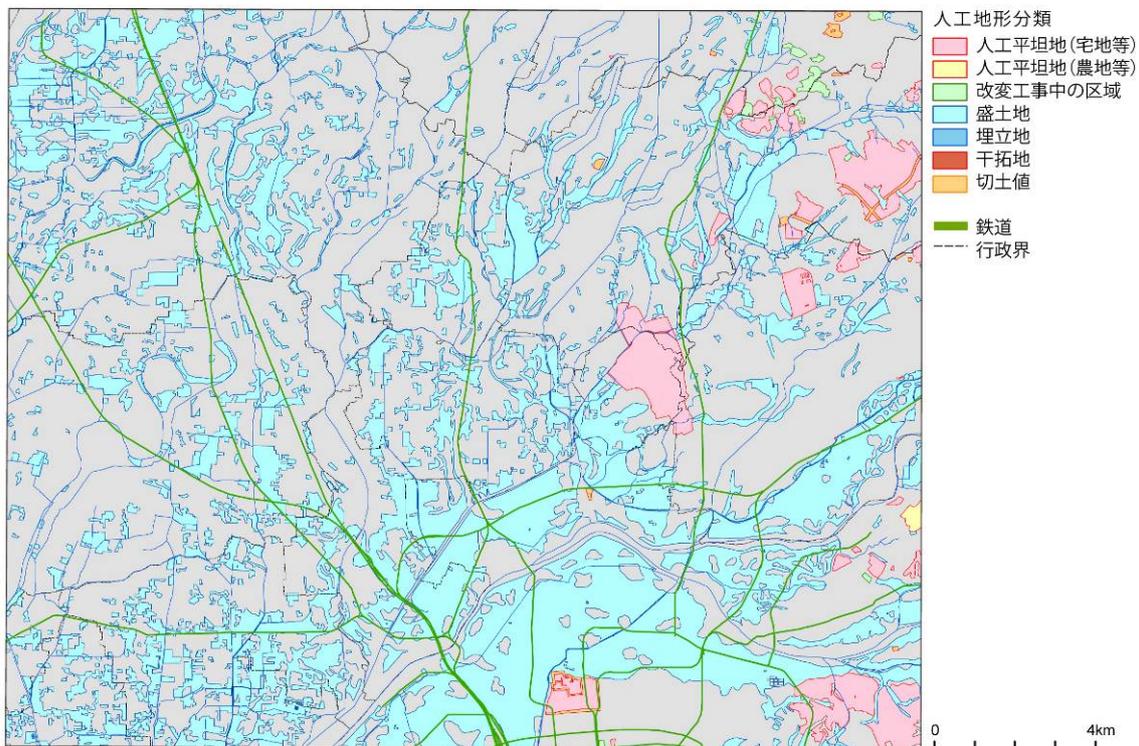


図 3-4 名古屋北部地域の人工地形分類図

本図幅では中部圏の中心都市である名古屋市域を中心に、春日井、小牧、一宮などの周辺都市の丘陵や低地に宅地等が広がる（図 3-4）。明治期には地形条件に適った土地利用が広がっていたが、都市化の影響を受けて 1970（昭和 40）年頃から丘陵地や低地の住宅地開発が始まる。

丘陵地の人工平坦地は、集合住宅や団地、あるいはゴルフ場などの開発によるものである。このような場所は尾根部を切り取り、厚く谷を埋めて傾斜の少ない平坦面や平滑な斜面を造成したところで、本来の丘陵地の景観を残さない。さらに、住宅地建設に伴って鉄道や道路が敷設され、造成地との間に大きな比高を造ることもある。例えば春日井・小牧丘陵の頂部に建設された桃花台ニュータウンでは、人工平坦面の周囲に中央自動車道と国道 155 号が平坦面を切り取るような形で建設され、住宅地と数メートルの比高をつくる。地図上で人工平坦地に示した旧谷線は、谷を埋める厚い盛土地の軸線となる。

台地では浅い谷を盛土し、住宅や工場がつけられている。台地の一部を切り取り、それを持って浅い谷を盛土し、平坦面を形成するような場所もみられる。熱田台地にある名古屋城は台地を掘削して堀を割り、本丸、二の丸、三の丸をつくっている。小牧台地にある名古屋空港は、鳥居末面の台地を切り、大山川の谷底平野を盛土している。大山川は滑走路の下で暗渠になる。

低地では旧河道や氾濫原、谷底低地、湿地などに盛土を行い、住宅や工場への転用が

目立つ。とりわけ名古屋市や春日井市にあたる庄内川の氾濫原ではほぼ全域が、一宮市でも氾濫原や旧河道に盛土地が広がる。盛土の厚さは住宅地であれば50cm程度が多く、玄関などに数段の階段やスロープがつくっている場合が多い。

大きな人工改変ではないが、名古屋地域では古くから木曾川や庄内川の水害を受けてきたこともあり、治水やかんがいなど事業が盛んである。小牧台地では明治期には木津用水、新木津用水が、低地においては矢田川、新川、木曾川の各分流路における河川改修や三角州地帯でのクリーク掘削など、多くの土木工事が行われてきた地域である。

本図幅における人工地形の種目別面積の集計を表2に示す。人工地形は延べ132.06km²となり、名古屋北部図面の約26%にあたる。自然地形の中分類別にみると、山地および低地の改変が人工地形全体の約36%ずつを占める。山地のなかでも、山地斜面を宅地に変えたところが大きな割合を持ち、春日井・小牧丘陵や東山丘陵の大規模な造成地が相当する。砂礫台地においても宅地等への改変が大きい。これも丘陵地帯にみられる高位面が改変された場合が大部分である。砂礫台地にみられる盛土値地や切土地は、台地上の浅い谷への盛土や、台地面と浅い谷の間の斜面を切土した部分を示す。名古屋空港に係る造成も、この砂礫台地の人工平坦地に含まれる。

低地の人工地形は盛土が圧倒的に多く、氾濫原低地、湿地、谷底平野、旧河道では盛土の面積も極めて大きい。前述した通り、一宮市周辺や、庄内川の氾濫原低地の盛土地の大きさは地形分類図上でも大きな広がりを持つ。丘陵地内の谷底平野が大規模な造成を受けている場合は、人工平坦地に含む。実際には、谷底に厚い盛土をしている盛土地である。旧水部の人工改変は、かつてため池だった場所や河川改修が行われた場所などを示している。一方、(緩)扇状地、自然堤防など低地にあっても微高地には、盛土を始めとする人工改変は少ない。

表 3-2 本図幅内の人工地形面積

(単位:km²)

分類	人工平坦地		盛土地	切土地	改変工事 中の区域	人工地形 計(a)	自然地形 計(b)	(a/b)%	
	宅地等	農地等							
山地	山地斜面等	6.98	0.17	0.10	0.50	0.58	8.33	22.56	36.9%
	麓斜面及び崖錐	-	-	-	-	-	-	0.11	0.0%
	土石流堆積地	-	-	-	-	-	-	0.04	0.0%
	山地 計	6.98	0.17	0.10	0.50	0.58	8.33	22.72	36.6%
台地	砂礫台地	5.17	0.09	7.46	0.28	0.05	13.04	83.28	15.7%
低地	緩扇状地	0.06	-	0.66	-	0.03	0.75	21.26	3.5%
	扇状地	-	-	0.03	-	-	0.03	0.13	26.8%
	谷底平野	1.94	0.00	8.79	0.02	0.02	10.78	18.54	58.1%
	氾濫原低地	0.01	-	58.48	0.01	-	58.50	85.63	68.3%
	自然堤防	-	-	0.10	-	-	0.10	94.69	0.1%
	旧河道湿地	-	-	5.65	0.00	-	5.65	12.37	45.6%
	湿地	-	-	25.48	-	-	25.48	44.74	57.0%
	三角州・海岸平野	-	-	8.21	-	-	8.21	19.57	42.0%
	砂州・砂堆(礫洲・礫堆)	-	-	0.03	-	-	0.03	0.13	26.8%
	砂丘	-	-	-	-	-	0.03	0.13	26.8%
	河原・河川敷	0.03	-	0.09	0.02	-	0.14	7.37	1.8%
	浜	-	-	-	-	-	-	-	0.0%
	低地 計	2.04	0.00	107.54	0.04	0.05	109.70	304.57	36.0%
水部	現水部	-	-	-	-	-	-	94.69	0.0%
	旧水部	0.05	-	0.96	-	-	0.99	2.23	44.4%
	水部 計	0.05	0.00	0.96	0.00	0.00	0.99	96.92	1.0%
合計		14.23	0.26	116.05	0.82	0.68	132.06	507.48	26.0%

資料:「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による。

3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅において地形条件と密接な関係を有する自然災害としては、地震における低地部の建物被害(軟弱地盤地での建物倒壊、液状化被害等)、及び地形の人工改変を誘因とする地盤災害(地震による造成地の崩壊、地盤変形等)、低地への宅地の拡大に伴う浸水被害の増加(従来の水田冠水が宅地浸水となるような被害対象変化)等をあげることができる。特に浸水被害に関しては、本図幅西側に広がる低地部では水がひくまで長時間を要し、被害の長期化が問題となる。

(1) 地震災害

本図幅を含む東海地方では、たびたび大規模な地震災害に見舞われ、近年では1891(明治24)年10月28日に発生した濃尾地震の被害が全国的にも甚大であった。濃尾地方では、特に、河川下流域の低地部における家屋倒壊の被害が顕著であった。

このほか、1944(昭和19)年12月7日に発生した東南海地震(M7.9)では津波による被害も発生しており、低地部においては建物倒壊だけではなく、津波被害に対する対策も講じる必要がある。

(2) 水害被害

本図幅の西側では、木曾川の氾濫による水害被害が昔からたびたび繰り返され、旧河道等の日低地が多く存在している。近年の豪雨等における水害の浸水区域はこれら微低地の範囲とよく一致しており、これら微低地より相対的に高い自然堤防等では浸水を免れた例がみられる。古くからの集落はこうした微低地に位置するものが多いが、近年では、市街地の拡大に伴い、微低地に宅地が進出している。

4 土地利用の変遷の概要

4.1 過去の土地利用状況の概要

(1) 明治 22 (1889) 年頃 (現在から概ね 120 年前) の土地利用

本図幅で最初に作られた地形図は、明治 25 (1892) 年に刊行された 5 万分の 1 地形図「名古屋」である。同地域では 2 万分の 1 の正式図は明治 26 (1893) 年 (明治 24 年測図) に、2 万 5 千分の 1 地形図は大正 12 (1923)～13 (1924) 年にかけて刊行 (大正 9 年測図) されている。

明治期の土地利用分類図 (第 1 期) は、明治 25 (1892) 年に刊行された 5 万分の 1 地形図「名古屋」と、同じく明治 22 (1889) 年測量、明治 25 年刊行の 5 万分の 1 地形図「津嶋」(明治期と現在の地形図の図郭のずれの補正のために使用*)との判読により土地利用分類を行ったものである (図 4-1)。

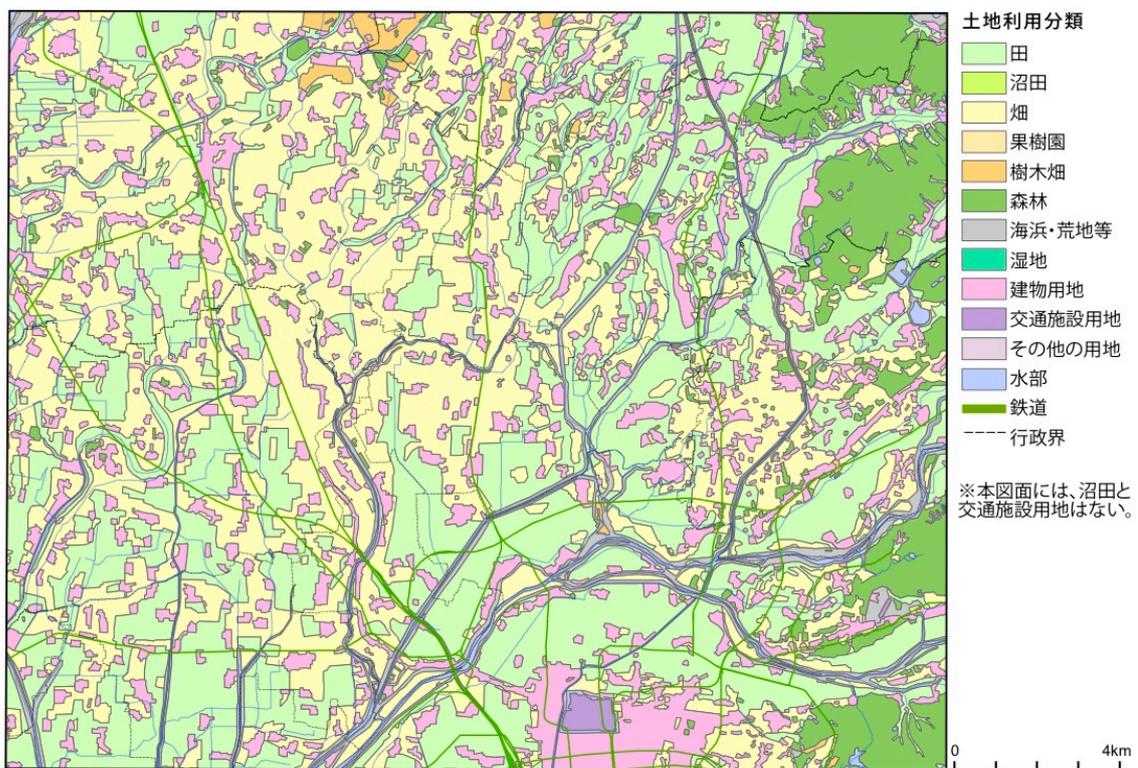


図 4-1 名古屋北部における約 120 年前 (明 22 (1892) 年頃) の土地利用

① 山地、丘陵地における土地利用

山地および丘陵地の土地利用をみると、尾張山地、春日井・小牧丘陵、瀬戸丘陵、東山丘陵のいずれの山地、丘陵地にも森林が広がり、縁辺に発達する小規模な台地には集落や畑が、山地や丘陵を解析する谷底には水田やため池がみられる。地図記号から植生を推察すると、森林は概ね松林あるいは針葉樹林であり、広葉樹林はほとんどない。

* 明治期の地形図の範囲は測量原点の違いにより、現在の地形図の範囲より全体に 10 秒 4 だけ東側にずれている。そのため明治期の地形図を現在の地形図に重ねて利用するには、このずれの補正が必要となる。

② 台地における土地利用

小牧市を中心とする**小牧台地**は、江戸時代初期に建設された入鹿池用水、木津用水、新木津用水の灌漑により、水利の悪い台地上にもかかわらず水田が広く分布する。新田開発に伴って複数の新田集落が発達し、集落の周りには畑が広がっている。小牧市街は江戸時代から犬山街道の宿場町として栄え、街村状に南北に長く伸びた市街地がみられる。森林は小牧山のほか、屋敷林や段丘崖の斜面にみられる。

春日井市の大部分を乗せる**庄内川沿いの台地**は、多くが畑でその中に集落が散在する。台地の北東から南西にかけて新木津用水が直線状に走り、春日井市勝川で八田川に合流するが、用水は上流部で尽きてしまい、春日井一帯は畑や荒地であったとされる（春日井市、1982）。明治 17（1884）年に本用水路の拡張改修工事が完了し、土地利用図でも用水沿いの一部に水田がみられることから、本図は用水改修により台地上の畑が水田へ転換しつつある時期を表していると考えられる。台地の南縁に発達する勝川から鳥居末を通り東北方向へ伸びる集落は、名古屋と中山道を結ぶ下街道に沿う古くからの集落である。

名古屋市守山区の西半分を占める**守山台地**は、台地の南縁を森林に覆われ、平坦な台地上には畑と瀬戸街道に沿って矢田、守山、小幡、大森の集落が連なっている。小幡にあるその他の用地は、旧陸軍の小幡射撃場である。

熱田台地は名古屋市街の中心部を乗せる台地であるが、本調査地域では市街地の北部が含まれるに過ぎない。その北西縁には、堀の水部とその他の用地で表現された名古屋城がある。名古屋城より南へかけては、江戸時代から栄える碁盤の目状の市街地が続く。東側には瀬戸街道に沿った住宅地が見られるものの、千種区周辺には建物は少なく、畑や水田などの農業的土地利用がなされていた。

③ 低地における土地利用

本調査地域では**木曾川扇状地（犬山扇状地）**の扇端部分の土地利用を読み取ることができる。水利の不便な扇状地にあり、東側は綿作や野菜栽培の畑と、そのなかに小規模な集落がつくられ、機業が行われていた。西側にみられる森林と樹木畑は、概ね松林と桑畑である。本地域では、江戸時代中期に発展した綿作と綿織物業が明治初期以降に桑栽培と養蚕、絹織物業に転換されていくが（川崎、1960）、本図はその様子を捉えていると考えられる。

一宮市を中心とする**羽島・一宮氾濫原**は、微高地の自然堤防には畑と集落が、氾濫原平野や後背湿地には低湿な水田が分布する。北部の畑では綿作が、南部へ向かうとダイコンなどの野菜栽培が主となる。一宮市は真清田神社の門前町で、江戸中期以降、門前にたつ定期市では尾西地域一帯の綿や野菜、織物が多く取引され、経済と流通を促進した。

海部・蟹江三角州においても自然堤防上に畑と集落が、三角州面には水田が分布する。上流に比べて自然堤防の発達が悪くなるため、畑、集落よりも水田の割合が多くなる。甚目寺周辺の畑では明治中期から促成栽培が行われ、橘田なす、尾張かぶらなどの種苗の産地でもあった。名古屋市街地周辺になると、市街地の発展により氾濫原低地にも集落が出現する。また、**羽島・一宮氾濫原**と**海部・蟹江三角州**には、自然堤防を掘削して島状に畑を残し、周囲を水田として利用する島畑がみられる。

庄内川沿いの低地および矢田川沿いの低地にも、他の低地と同様に自然堤防上には畑と集落が、氾濫原には低湿な水田が広がる。

このように調査地域における明治期の土地利用は、相対的に安定した地盤の熱田台地に乗った名古屋市街をはじめ、山地や丘陵地には森林が、台地には畑や街村集落が発達するなど、山地から低地に至るまで地形条件に見合ったものとなっていた。濃尾平野や庄内川などの水害が頻発する低湿地帯においては、集落を自然堤防の微高地に、氾濫原低地や湿地には水田を配置するなど、微地形に対応した土地利用が地域を災害から守ってきたといえる。

(2) 昭和 45 (1970) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図 (第 2 期) は、昭和 45 (1970) 年に編集、昭和 46 (1971) 年に刊行された 5 万分の 1 地形図「名古屋北部」の判読により土地利用分類を行ったものである (図 4-2)。昭和 46 (1971) 年刊行の 5 万分の 1 地形図「名古屋北部」は、昭和 45 (1970) 年に空中写真測量により作成された 2 万 5 千分の 1 地形図を編集したものである。

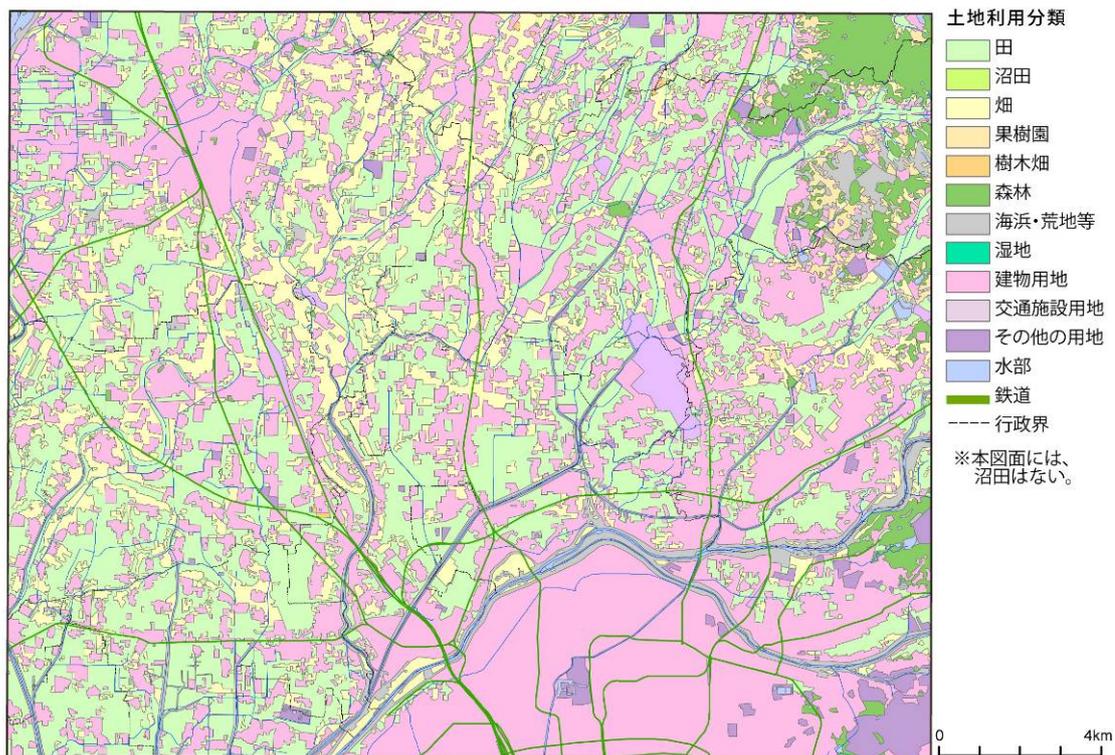


図 4-2 名古屋北部における約 40 年前 (昭和 45 (1970) 年頃) の土地利用

① 山地、丘陵地における土地利用

いずれの山地、丘陵地も住宅団地やゴルフ場開発が行われ、森林は姿を消しつつある。尾張山地は比較的森林に覆われ、モチツツジ-アカマツ群衆を主に、山麓ではクロ

マツ植林が行われている（環境庁、1981）。山麓斜面には、果樹園の利用もみられる。南西部の味岡や内久保周辺にみられる荒地やその他の用地は、久保山団地やつつじが丘団地などの住宅地の造成過程を捉えたものである。

春日井・小牧丘陵は、篠岡の桃花台ニュータウンを中心に大規模な荒地がみられる。山麓斜面は戦後の果物ブームの到来により、もも、かき、りんごなどの果樹栽培に利用されたが、伊勢湾台風後には災害による不作のリスクと果樹需要の落ち込みを受けて、サボテン温室園芸に転換した農家が増えた。南部の平坦な台地面は、多くが住宅地や工場の建物用地になった。これらの中には、戦前の軍需工場の跡地を利用した工場や大学、自衛隊などの施設もある。

東山丘陵に広がるその他の用地は、千種区から名東区にかけての大規模な住宅造成地である。千種台団地は既に完成し建物用地となっているが、千代が丘、よもぎ台、平和が丘など住宅地は区画整理された道路がみられ、造成中であることを示す。平和公園は、戦災復興事業のひとつとして、市内に散在していた寺社の墓地を集約した墓地公園である。

②台地における土地利用

いずれの台地においても、住宅や工場などの建物用地が広く分布する。**小牧台地**では畑や水田などの農業的土地利用も確認できるが、大規模な工場や住宅地もつくられて、それらのスプロール化がみられる。小牧市周辺は戦前から軍需産業が隆盛し、戦後も機械、金属、繊維などの多数の工場が進出した。昭和 40（1965）年には名神高速道路が小牧まで開通し、小牧市街の北西に小牧インターチェンジが建設されると、昭和 43（1968）年には東名高速道路がこれに接続した。小牧台地南部につくられた名古屋空港は、昭和 19（1944）年に旧陸軍が建設した小牧飛行場を前身として、戦後は自衛隊と民間が供用する国際空港として中部圏の空の玄関口であった。このように運輸流通施設が集中したことにより、トラックターミナルなどの運輸流通業や倉庫業も多く展開された。ただし、名古屋空港は平成 17（2005）年に国際線と多くの国内線の運行が本空港から中部国際空港（愛知県常滑市）へ移されている。

昭和 40 年代の**庄内川沿いの台地**では、田畑が急減し、住宅地（主）と工場（従）の混合スプロールをもたらした（井関・加藤ほか、1967）。**守山台地**においても、平坦面の住宅地化が顕著である。地形図では、道路を格子状に配置して区画整理を行っている様子もみられる。名古屋の周辺地域における急速な宅地造成は、桃花台や高蔵寺（土地履歴調査「瀬戸」図）など丘陵地の大規模住宅地開発へと繋がっていった。

熱田台地は概ね建物用地になり、名古屋城や千種区の一部にその他の用地がみられる程度である。名古屋市街は戦災で市域の約 1/4 が焦土になったが、その後の復興の過程において、幹線道路網の整備を中心に大規模な都市計画を実行した。通称 100m 通りと呼ばれる久屋大通の建設をはじめ、丸の内には官庁街が、栄や錦には銀行、商社、百貨店などのビル街が形成された。明治期までは畑が広がっていた千種区にも工場や大学、病院などの大規模な施設や、住宅地がつけられた。

③ 低地における土地利用

木曾川扇状地（犬山扇状地）では、名鉄犬山線に沿った古知野や布袋の集落が拡大

しているのをはじめ、畑や桑畑から建物用地への変化が目立つ。高速道路建設の影響で、主に繊維工場の進出がはかられた。耕地は桑畑が減少して畑に変わり、旧河道にあった水田にも建物が並ぶようになった。

羽島・一宮氾濫原は一宮市街の広がりが見られる。市街地では明治期にあった水田が消失し、郊外の自然堤防上の畑が建物へ転換されている。一宮市や尾西市では機業が隆盛し、両地域には紡績、染色、縫製、加工などの工場や問屋など、大小の繊維工場が密集する。**海部・蟹江三角州**にも、軒並み畑が建物用地へと変化している。水田に注目すると、住宅や工場に変化しているところもみられるが、他の地域に比べると良く残されている。

庄内川沿いの低地および**矢田川沿いの低地**は、ほぼ全域が建物用地になっている。この地域は大正中期以降に都市化の様相が見られ、昭和初期に名古屋市と合併した新市域で、氾濫原低地や湿地などの軟弱な地盤に基盤の目状の街区が整備され、大規模工場の立地や住宅が建設された。

昭和期の土地利用は、山地や丘陵地における大規模住宅地の造成や、台地や低地における農地の住宅地や工場への転換が特徴的である。本地域は大都市・名古屋とその郊外都市という性格上、名古屋のベッドタウンとしての住宅地開発や、交通網の発達による工業化が促され、自然地形を留めない程の造成や軟弱地盤の開発が行われてきた。一方で、**羽島・一宮氾濫原**および**海部・蟹江三角州**の低湿地帯では水田が広がり、軟弱地盤への無理な開発は抑制されている。

4.2 土地利用の変遷の概要

(1) 土地利用面積の推移

図4-3と表4-1は、現在から概ね120年前及び40年前の2時期の土地利用分類図と、土地利用細分メッシュデータ（国土数値情報、2006）から、名古屋北部地域における**田**、**畑**（畑・その他の農用地）、**森林等**（森林・荒地・水面）、**宅地等**（建物・その他の用地）の4つの主要な土地利用区分ごとの面積集計結果である。

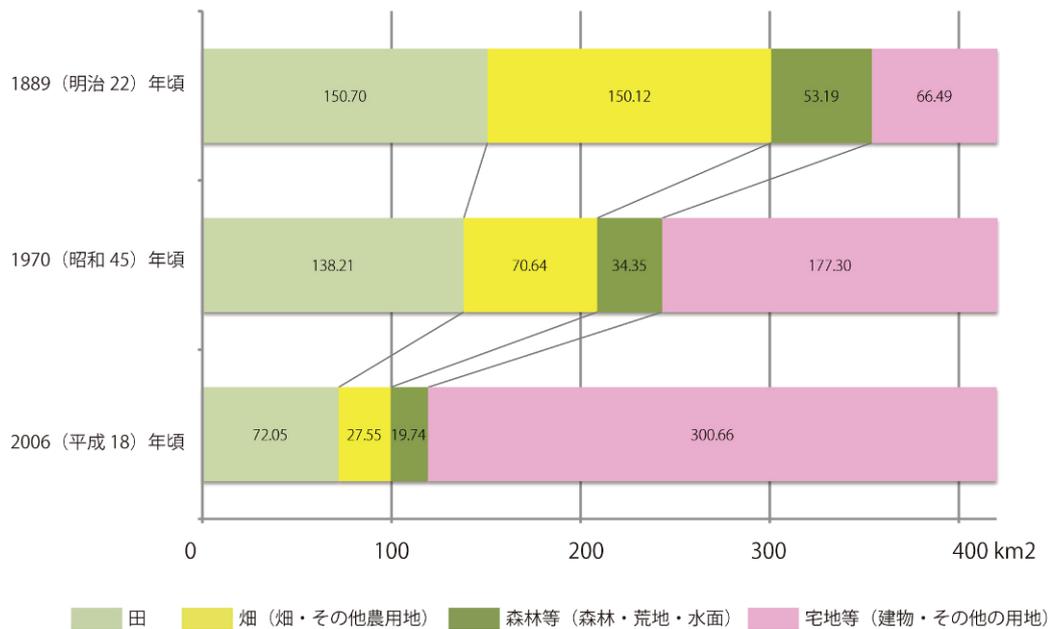


図 4-3 土地利用別面積の推移 (1889・1970・2006 年)

表 4-1 土地利用別面積の推移 (1889・1970・2006 年)

区分	名古屋市											一宮市 春日井市 津島市 犬山市 江南市 小牧市 稲沢市 岡崎市 愛西市 清洲市 北名古屋市											あま市 豊山町 大口町			大治町		合計
	千種区	東区	北区	西区	中川区	守山区	名東区	小村	一宮市	春日井市	津島市	犬山市	江南市	小牧市	稲沢市	岡崎市	愛西市	清洲市	北名古屋市	あま市	豊山町	大口町	大治町					
1889年 (明治22年)頃	2.54	1.28	2.49	2.28	1.84	0.01	2.59	0.18	13.57	47.40	13.29	1.30	0.27	0.64	8.18	23.48	4.73	0.75	0.53	8.87	7.33	1.22	2.34	1.14	150.12			
1970年 (昭和45年)頃	0.68	0.44	2.33	1.67	0.41	0.18	7.37	2.13	18.18	1.43	7.69	0.36	5.11	0.38	12.88	0.94	0.10	0.27	2.23	0.94	1.36	0.21	0.36	0.52	63.19			
2006年 (平成18年)頃	0.98	3.80	2.51	3.37	1.05	2.23	1.83	0.26	16.14	11.84	6.78	0.80	1.10	2.35	8.48	6.80	1.30	0.28	2.45	2.23	3.00	0.88	1.51	0.84	66.49			
田	0.08	0.06	2.37	3.23	0.42	0.00	2.59	0.16	9.30	25.89	11.88	4.66	2.46	1.14	18.74	22.57	3.94	1.52	5.84	6.85	13.09	2.29	3.98	2.07	138.21			
畑 (畑・その他の農用地)	0.08	0.00	0.40	1.22	0.37	0.00	0.83	0.00	2.95	21.16	3.81	0.25	1.38	4.97	7.52	11.87	2.77	0.41	2.35	3.33	2.91	0.14	2.18	0.41	70.64			
森林等 (森林・荒地・水面)	0.52	0.28	2.28	1.73	0.53	0.01	4.27	0.26	10.31	1.83	3.81	0.25	0.34	0.04	8.57	0.18	0.08	0.00	1.80	0.85	1.31	0.17	0.10	0.38	34.35			
宅地等 (建物・その他の用地)	0.98	3.80	2.51	3.37	1.05	2.23	1.83	0.26	16.14	11.84	6.78	0.80	1.10	2.35	8.48	6.80	1.30	0.28	2.45	2.23	3.00	0.88	1.51	0.84	66.49			

1. 1889年及び1970年は土地利用分類図の図上計測値。2006年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による集計値。
2. 1970年及び2006年の下段は、1889年からの増減量。
3. 行政区域は平成22年3月31日現在の区域を当てはめた。

農地をみると1889年に田も畑も約150km²ずつあり、全体の約2/3を占める土地利用であったが、1970年には田が約138km²、畑が約70km²と全体の1/2にまで減少した。その後も農地は減少を続け、2006年にはさらに半分ほどになり全体の1/4程度、明治期から比べると1/3程になっている。地域別でみると、名古屋市北区と西区では田の減少が大きく、2005年までにいずれも約12km²あった田が約10km²も減少し、約2～3km²になった。一宮市、春日井市、稲沢市、北名古屋市の各市では畑の消失が大きく、明治期から昭和期にかけては一宮市では約47km²あった畑が約21km²に、稲沢市では約23km²の畑が約11km²に減少した。さらに平成期までには一宮市で約41km²、春日井市で約12km²、稲沢市では約13km²、北名古屋市では約8km²の畑が失われている。春日井市や小牧市では、平成期にかけて田の減少が共に10km²以上になる。

森林等は 1889 年には約 60km²あり、全体に占める面積は 14%ほどであった。1970 年には約 34km²と、明治期からほぼ半減し、2006 年になると約 19km²と更に減少した。平成期の土地利用の全体に対する森林等の面積は、わずかに 4%程である。名古屋市では守山区の減少が目立ち、明治期に約 7 km²の森林が昭和期には約 4 km²になった。他の市町村では明治期は約 7 km²の森林があった春日井市と、同様に約 12km²も森林が広がっていた小牧市が、昭和期までに約 4 km²減少した。

農地と森林に替わり、時代を追うとともに大きく増加したのが**宅地等**である。1889 年には約 66km²と当時の全土地利用の約 15%に過ぎなかったが、1970 年には約 177km²と全体の半分を占めるようになり、2006 年には約 300km²にも達した。平成期では調査地域の約 70%が宅地等となり、住居、工場、交通機関などが発達している。地域別に宅地の変化をみると、昭和期、平成期とも全ての市区町村で増加に転ずる。昭和期の名古屋市では千種区、北区、西区、守山区などで、明治期に概ね 1～3 km²だったが昭和期には約 7～12km²と、約 7～9 km²の増加に至った。小牧市、稲沢市、春日井市でも明治期には約 6～8 km²だったが、昭和期にはその約 2～3 倍に膨れた。平成期では、名古屋市北区、西区、守山区において明治期からの累積量が約 12km²に達し、明治期に比べると約 5～7 倍となる。名古屋市以外の地域においても、明治期から比較すると昭和にはその約 2～3 倍に、明治期から平成期にかけての広がりには約 4～5 倍に、岩倉市や清須市では約 6～7 倍と特に多い。昭和期から平成期にかけても、いずれの市町村も約 2 倍程度の増加を示す。

(2) 地形分類別土地利用面積の推移

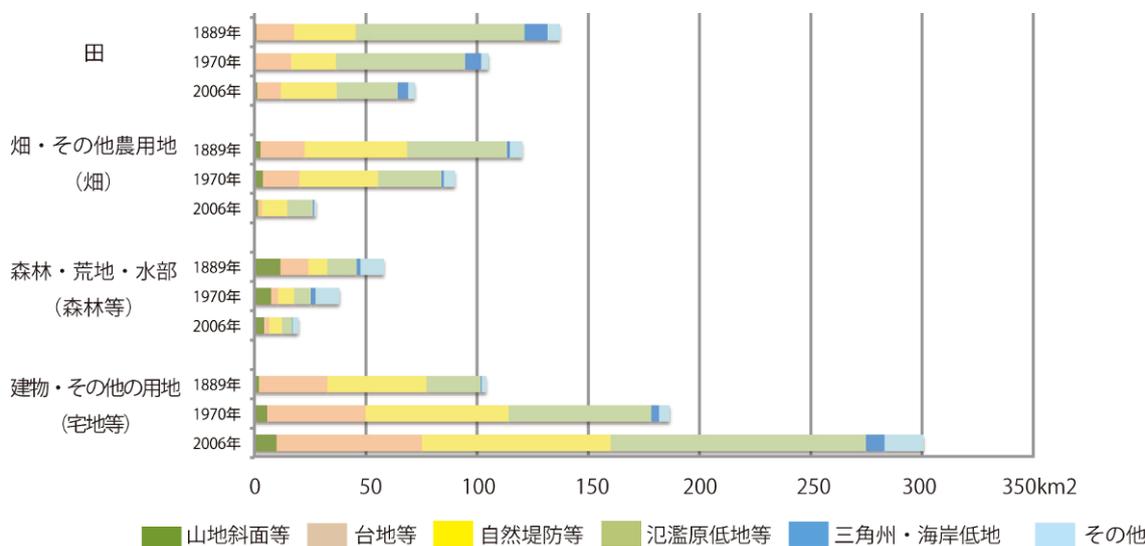
図 4-4 と表 4-2 は、明治期、昭和期、平成期の土地利用の面積を地形分類別に集計したものである。

田をみると、3 時期ともに氾濫原低地、三角州・海岸低地などの低地に多い。台地にあるのは、小牧台地などにみられる用水路掘削と新田開発によるものであろう。**畑・その他の農地**は自然堤防や台地上に多く、次いで氾濫原低地にもみられる。明治期と昭和期には山地や丘陵地にも農地がみられた。微高地である自然堤防にみられる田や、氾濫原低地あるいは三角州・海岸低地にみられる畑は、地形条件からすれば違和感があるが、調査地域においては島畑が随所にみられることから、このような特有の景観を捉えているものと考えられる（国土地理院：1968、金田：1976）。

森林等は山地斜面、台地、自然堤防、氾濫原低地などに同じ割合で分布していたことがわかる。山地斜面や台地の斜面、自然堤防などは樹木の生い茂った森林を捉えたものであるが、氾濫原低地や三角州・海岸低地では荒地や河川敷を捉えたものであろう。上述の 3 種類の土地利用は、時代を追うごとに総面積は減少するが、自然地形に対する割合は比較的变化が少ない。

建物・その他の用地は、明治期には台地と自然堤防に多く、氾濫原低地にみられるのは緩扇状地や扇状地などに限られていた。昭和期になると、農地や森林が減少した分、これらの 3 種の自然地形の宅地利用が増加している。平成期には、昭和期よりも宅地の開発が一段と加速し、特に山地斜面等、氾濫原低地等、その他の地形で急増する。山地斜面は斜面の切り盛り造成であり、氾濫原低地等では谷底低地、氾濫原低地、湿地、旧

河道などの扇状地以外の低地の開発である。また、その他の地形では旧水部の埋土が考えられる。



- 区分ごとの面積は、本調査成果図の自然地形分類図及び土地利用分類図（1889年、1970年）、国土数値情報の土地利用細分メッシュ（2006年）を100mメッシュデータに変換し、各図のメッシュごとの分類の組み合わせで積み上げ集計したもの。
- 地形分類の内訳は次の通り。
 山地斜面等：山地斜面、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地、台地等：砂礫台地、自然堤防等：自然堤防、砂州・砂堆、氾濫原低地等：緩扇状地、扇状地、谷底平野、氾濫原低地、旧河道、湿地、その他：河原・河川敷、現水部、旧水部の各合計。

図 4-4 地形分類別の土地利用面積の推移（1889、1979、2006年）

表 4-2 地形分類別の土地利用面積の推移（1889、1979、2006年）

地形分類		(単位: km ²)						
年代	土地利用区分	山地斜面等	台地等	自然堤防等	氾濫低地等	三角州・海岸低地	その他	計
1889年 (明治22)頃	田	0.90	16.84	27.75	75.86	10.29	5.68	137.33
	畑(畑・その他の農用地)	2.72	19.80	46.07	44.95	1.32	5.47	120.34
	森林等(森林・荒地・水面)	11.64	12.51	8.59	13.18	1.72	10.54	58.18
	宅地等(建物・その他の用地)	2.01	30.72	44.64	24.37	0.42	2.00	104.15
1970年 (昭和40)頃	田	0.25	16.18	20.16	58.09	7.21	3.26	105.15
		△ 0.65	△ 0.66	△ 7.59	△ 17.78	△ 3.08	△ 2.43	△ 32.18
	畑(畑・その他の農用地)	3.82	16.41	35.36	28.49	1.01	5.00	90.09
		1.10	△ 3.39	△ 10.71	△ 16.46	△ 0.32	△ 0.47	△ 30.25
	森林等(森林・荒地・水面)	7.50	3.05	7.28	7.58	2.04	10.73	38.17
		△ 4.15	△ 9.46	△ 1.31	△ 5.60	0.32	0.19	△ 20.01
2006年 (平成18)頃	田	5.70	44.24	64.25	64.21	3.50	4.70	186.60
		3.70	13.51	19.61	39.84	3.08	2.71	82.45
	田	1.27	10.63	25.11	27.36	4.71	2.97	72.05
		0.37	△ 6.22	△ 2.65	△ 48.50	△ 5.58	△ 2.71	△ 65.28
	畑(畑・その他の農用地)	1.65	1.69	11.41	11.60	0.42	0.78	27.55
		△ 1.07	△ 18.11	△ 34.66	△ 33.35	△ 0.90	△ 4.69	△ 92.79
森林等(森林・荒地・水面)	4.37	2.26	5.78	4.59	0.24	2.51	19.74	
	△ 7.28	△ 10.25	△ 2.81	△ 8.59	△ 1.48	△ 8.03	△ 38.44	
宅地等(建物・その他の用地)	9.99	65.30	84.76	114.81	8.38	17.43	300.66	
	7.98	34.58	40.12	90.44	7.96	15.44	196.51	

1. 調査結果の自然地形分類図及び2時期の土地利用分類図、国土数値情報データをそれぞれ 100m メッシュに変換し、メッシュごとに分類の組み合わせを積み上げて集計した。
2. 土地利用区分は、1907 年、1964 年は本調査の土地利用分類図、2006 年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による。
3. 地形分類の内訳は以下の通り。
 山地斜面等：山地斜面、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地、台地等：砂礫台地、自然堤防等：自然堤防、砂州・砂堆、氾濫原低地等：緩扇状地、扇状地、谷底平野、氾濫原低地、旧河道、湿地、その他：河原・河川敷、現水部、旧水部の各合計。
4. 1970 年及び 2006 年の下段は、1889 年からの増減量。

(3) 人口集中地区の変遷

国勢調査では、1960（昭和 35）年以降 5 年ごとに「人口集中地区」（DID）^{*}が設定されている。本調査では名古屋都市圏の 1960（昭和 35）年、1980（昭和 55）年、2005（平成 17）年の 3 時期分のデータを利用して、都市域の変遷を表した（図 4-5）。1960 年は名古屋市を中心にした広がり、一宮市、津島市、春日井市をそれぞれ中心にした DID が形成されていた。1980（昭和 55）年になると、名古屋市の DID が拡大し、この人口増加により 1963 年には守山区が、1975 年には名東区が誕生している。人口集中地区は市の中心から 10km 圏内の清須市、北名古屋市、豊山町や、さらには 20km 以上離れた岩倉市や小牧市と繋がるようになった。一宮市や春日井市もそれぞれに周辺へ区域を広げている。2005（平成 17）では、名古屋市の拡大よりも周辺地域の拡大が特徴である。名古屋市に隣接する春日井市、尾張旭市や長久手市は区域を名古屋からより遠方へ広げつつあるが、名古屋市の DID とは隔たれた一宮市、江南市などはより名古屋へ近づくように区域を拡大させている。一方で、稲川市や一宮市南東部、守山区北東部などは DID がみられない。

表 4-3 には調査地域にける名古屋から 20km における DID の立地条件を地形分類別に集計を示す。20km 圏内には山地がわずかに含まれるが、山地における DID は全ての時代を通じて認められない。丘陵地では、1960 年には約 2 km²だったが 1980 年には約 10 倍に拡大し、2005 年には丘陵地の半数に迫る勢いである。台地では 1960 年には約 15km²であったが、1980 年には台地の総面積の約半分が、2005 年にはさらに 6 割以上が DID に変わった。低地は約 281km²あり、1960 年に DID 地区に含まれているのは約 37km²とわずか 1 割程度であった。その後、1980 年には約 42%にあたる約 119km²が、2005 年にはほぼ半数の約 139km²が DID 地区になった。水部においても、1960 年では約 1 km²と少なかったが、1980 年および 2005 年には水部の約半数以上が DID に変わっている。

調査地域全体での DID の拡大は、1960 年までは全体の約 13%、1980 年には約 44%、2005 年までには約 52%である。つまり現在（2005 年時点）の名古屋都市圏では約半数が DID であるが、その広がり方は 1960 年から 1980 年にかけて加速し、全体の 4 割を DID 地区に変えるに至った。

^{*} 人口集中地区（DID= densely inhabited district）：1960 年国勢調査以降、新たに設定された統計表章地域。調査区（約 50 世帯）を単位として、原則として調査区の人口密度は 1km²につき 4000 人以上あり、そのような調査区が互いに隣接して、その合計が 5000 人以上に達する場合に、これを一つの人口集中地区として区画する。実質的には市街地を形成する区域を表すといえる（浜、1989）。

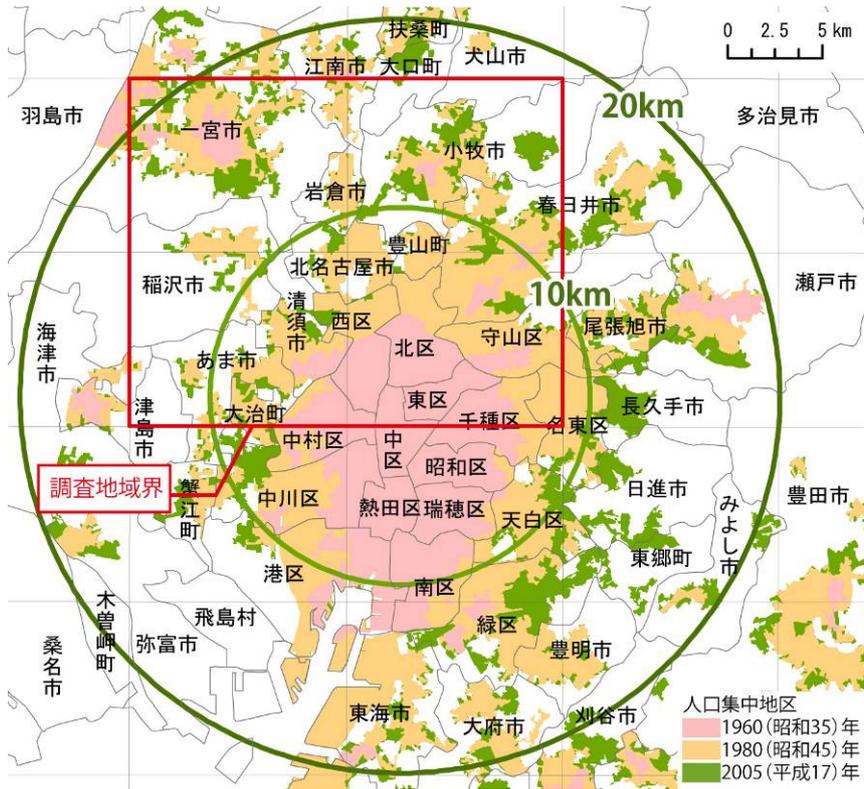


図 4-5 名古屋都市圏における人工集中地区の推移（1960年・1980年・2005年）

資料：国土数値情報（人口集中地区）

表 4-3 名古屋 20km 圏における DID 地区の地形分類別面積

区域	地形分類別面積					合計
	山地	丘陵地	台地	低地	水部	
名古屋都市圏	6.09	35.25	83.61	281.95	6.86	413.76
うち1960年DID内	-	1.93	15.49	37.35	1.07	55.83
うち1980年DID内	-	11.30	46.26	119.97	3.69	181.22
うち2005年DID内	-	16.47	56.34	139.03	3.80	215.64

5 災害履歴概要

5.1 災害履歴概説

(1) 地震

愛知県に被害を及ぼす地震には、①南海トラフ沿いで発生する海溝型巨大地震、②陸域の浅い場所で発生する地震の2タイプが存在する。

①のタイプは太平洋沖合のプレート境界で発生する地震で 1854 年の安政東海地震 (M8.4) や 1944 年の東南海地震 (M7.9) が該当し、広い範囲に揺れや津波による被害をもたらす。

②のタイプは陸域の活断層によってもたらされる地震で 1586 年の天正地震 (M7.8)、1891 年の濃尾地震 (M8.0) や 1945 年の三河地震 (M6.8) などが該当する。

1854 (嘉永 7) 年 12 月 23 日に発生した安政東海地震は、熊野灘から駿河湾にかけてを震源域としたプレート境界型地震と考えられており、駿河湾沿岸から遠州灘沿岸にかけて震度 6~7 の揺れが生じたと推定されている。名古屋市では震度 6 相当と推定されている。またこの地震の 32 時間後には紀伊半島沖から四国沖にかけての南海トラフを震源域とする安政南海地震 (M8.4) が発生している。

天正地震は 1586 (天正 13) 年 1 月 18 日に発生し、岐阜県の全域、富山県西部、滋賀県東部、名古屋市など広範囲で震度 6 相当の揺れが生じたと推定されている。この地震の際に、阿寺断層帯主部 (南部) が活動した可能性がある (地震調査研究推進本部, 2009)。

(2) 風水害

本地域の大半を占める濃尾平野は木曾三川 (木曾川、長良川、揖斐川) 及び庄内川によって形成された典型的な沖積平野で、上流部には扇状地が発達し、その下流部には氾濫原、さらに伊勢湾に接して三角州が広がる。

本図幅の西側大部分は木曾川や庄内川によって形成された三角州性の沖積低地で度々これら大河川の氾濫による風水害を生じてきた。また図幅東端には尾張山地より連なる標高 30m~100m 程度の台地・丘陵地も存在し、内水氾濫や土砂災害などの被害を生じている。

5.2 災害履歴詳説

(1) 地震

① 濃尾地震

明治 24 (1891) 年 10 月 28 日午前 6 時に発生した濃尾地震 (M8.0) は過去日本の内陸で発生した最大級の地震である。濃尾地震によって福井県南部から岐阜県根尾村を経て木曾川まで複数の地表地震断層が出現し、根尾谷地震断層帯と呼ばれている。これらの断層は水平変位を主成分とする横ずれ断層で、もっとも顕著な根尾谷断層では数mから最大 8m 横ずれしている。濃尾地震の断層モデルとしてはこれら地表に現れた横ずれ断層のみを想定するモデルと、濃尾平野の地下の伏在断層を組み合わせるモデルの二つが提示されているが、濃尾平野の地下伏在断層の認定には必ずしも決着がつかない (内閣府, 2005)。

濃尾地震の震動は北海道や南西諸島を除く全国で観測され、震源断層から濃尾平野に

かけて震度7、福井県、岐阜県、滋賀県、愛知県、三重県の広い範囲で震度6の揺れが生じたと推定されている。濃尾地震の死者は7,273名、住家全壊14万棟、半壊8万棟以上と推定されている（宇佐美，2003）。

愛知県では、震度6～7、死者2,638名、住家全壊85,511棟、半壊55,655棟で、県の地震災害史上最大の被害を受けた（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では白鷹村（現清須市）、東今宿村（現あま市）、玉ノ井村、奥村、小信中島村、三條村、黒田村、苅安賀村（現一宮市）付近で建物全壊率が80%を超えた町村が存在したほか、図幅西側の沖積低地の広い範囲で30～70%の建物が全壊被害を生じている。

② 東南海地震

昭和19（1944）年12月7日午後1時に発生した東南海地震（M7.9）は、駿河トラフと南海トラフ沿いを震源域として発生し、三重県から静岡県御前崎町までの沿岸域で震度6弱となった。また伊豆半島から三重県沿岸部にかけて津波による被害も発生している。この地震による被害は飯田（1977）の推計によると全国で死者・行方不明者1,223名、住家全壊17,611棟、半壊36,565棟を数える。特に愛知県は最も甚大な被害を受け、死者・行方不明者438名、住家全壊6,411棟、半壊19,408棟となった（地震調査研究推進本部，2009）。

本図幅範囲では図幅西側の明治村（現稲沢市）で建物半壊率20%以上に達したほか、奥町（現一宮市）、新川町（現清須市）などで5～10%程度の建物が半壊被害を生じている。

③ 三河地震

東海地方を中心として広い範囲に被害を与えた東南海地震の約1ヶ月後の昭和19（1944）年1月13日午前3時38分に愛知県東部を震源とする内陸直下型地震である三河地震（M6.8）が発生し、地表に現れた断層は10数kmにも渡った（内閣府ホームページより）。

愛知県では、大部分で震度5以上、死者2,306名、住家全壊16,408棟、半壊31,679棟の被害があった（愛知県地域防災計画）。

三河地震の被害は現在の西尾市を中心とした幡豆郡と、現在の安城市を中心とした碧海郡に集中している（飯田，1995）。

本図幅範囲では、西側の大和町（現一宮市）で0.15%ほどの建物が全壊被害を生じたのみである。

(2) 水害

① 昭和 34 (1959) 年 9 月 26 日 伊勢湾台風

9 月 21 日にマリアナ諸島の東海上で発生した台風 15 号 (伊勢湾台風) は発達しながら北西に進行し、23 日には中心気圧 895 hPa にまで到達した。その後ほとんど勢力が衰えることなく日本に接近し、26 日 18 時頃和歌山県に上陸。上陸後 6 時間で本州を縦断し、27 日に東北地方北部を横切る形で太平洋側に抜けたが、勢力が強く広い範囲に暴風と降雨による被害をもたらした (気象庁ホームページより)。

伊勢湾台風の最大の特徴は伊勢湾で発生した高潮が愛知県・三重県のゼロメートル地帯に甚大な被害をもたらした点にある。台風による伊勢湾への海水の流入とその後の湾水震動減少によって高潮が発生し、9 月 26 日 8 時には名古屋港で T. P. +3.89m の潮位を記録するなど、伊勢湾全体の海面を 1 時間近くにわたって 2m 程度上昇させた (中央防災会議, 2008)。

この高潮と強風による高波によって名古屋港では、港湾護岸の決壊、破損が生じ、膨大な海水が濃尾平野に侵入したため、三重県では死者・行方不明者が 1,281 名に達する大きな被害をもたらした。高潮によって平野部にもたらされた海水がそのまま陸域にとどまり、名古屋港臨海部では 90 日以上にわたって滞留した (中央防災会議, 2008)。

愛知県では死者 3,168 名、行方不明者 92 名、住家全壊 23,334 棟、半壊 97,046 棟、流出 3,194 棟、住家浸水床上 53,560 棟、床下 62,831 棟の被害があった (愛知県地域防災計画)。

本図幅範囲でも臨海部からの高潮による浸水被害が津島市、あま市まで達しているほか、庄内川流域で浸水被害が生じている。名古屋市では死者・行方不明者 1,851 名、住家全壊 6,166 棟、半壊 43,249 棟、流出 1,557 棟、住家浸水床上 34,883 棟、床下 32,469 棟の被害があった (名古屋市地域防災計画)。

② 昭和 49 (1974) 年 7 月 24 日 (豪雨)

7 月 24 日～28 日にかけては紀伊半島から日本海に進んだ低気圧が東海地方を中心に大雨となり、浸水害が多発した。名古屋地方気象台で総降水量 130mm を記録し (気象庁ホームページより)、愛知県では尾張、海部、知多を中心に浸水被害が多数発生した。これにより死者 1 名、住家浸水床上 7,248 棟、床下 74,035 棟の被害が発生した (愛知県地域防災計画)。

本図幅範囲では西側の沖積低地の広い範囲で浸水被害が生じ、名古屋市内で住家浸水床上 2,884 棟、床下 40,463 棟 (名古屋市地域防災計画) の被害があった。

③ 昭和 51 (1976) 年 9 月 8 日 (台風 17 号)

9 月 8 日にトラック島周辺に発生した台風 17 号は北西に進み 10 日～12 日朝にかけて九州の南西海上で停滞した。その後北上し 13 日 1 時 40 分ごろ長崎市に上陸した後、日本海を北上した。台風 17 号と前線の影響で各地に大雨をもたらし、九州から中部地方にかけて期間降水量が 500mm～1,000mm に達した。名古屋地方気象台で 9 月 12 日に日降水量 161.5mm を記録し、9 月 8 日～14 日の期間降水量は 422.5mm に達した (気象庁ホームページより)。

愛知県では尾張、海部、知多に中小河川氾濫等により死者 1 名、住家全壊 14 棟、半壊 437 棟、住家浸水床上 13,050 棟、床下 102,677 棟の被害が発生した（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では庄内川低地、一宮氾濫原などの広い範囲が浸水し、名古屋市でも西区、北区、守山区などで浸水害が生じた。名古屋市内では住家浸水床上 3,610 棟、床下 62,959 棟の被害があった（名古屋市地域防災計画）。

④ 平成 12（2000）年 9 月 11 日（台風 14 号：東海豪雨）

9 月 2 日にマリアナ近海で発生した台風 14 号は 16 日に沖縄本島を通過し、その後日本海で温帯低気圧に変わった。この台風によって本州付近に停滞していた前線が活発化し、愛知・三重・岐阜の東海地方を中心に記録的な大雨となった。愛知県では名古屋地方気象台で 9 月 11 日に観測史上最高の日降水量 428mm を記録し、9 月 8 日～17 日の期間降水量は 617mm に達し、名古屋市では 38 万人に避難勧告が出された（気象庁ホームページより、佐藤，2002）。

愛知県内の庄内川、新川・天白川では計画高水位を超える過去最高の水位を記録し、庄内川の枇杷島地点では 12 日 4 時半に計画高水位の 9.18m を上回る 9.46m を記録した。庄内川下流の一式大橋右岸で越水したが破堤には至らなかった。庄内川の支流の新川では河口から 16km の名古屋市西区芦原町付近で左岸堤防が 100m にわたって破堤し浸水面積 19 平方 km、浸水家屋約 18,000 棟の被害を生じた（国土交通省ホームページより）。愛知県では河川の破堤 20 箇所、越水 319 箇所、死者 7 名、住家全壊 18 棟、半壊 154 棟、住家浸水床上 22,078 棟、床下 39,728 棟の被害があった（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では庄内川流域、新川流域、五条川流域などを中心とした一宮氾濫原および庄内川低地、矢田川低地で浸水被害を生じ、清須市では住家浸水床上 5,429 棟、床下 2,658 棟の被害があった（清須市地域防災計画）。

⑤ 平成 20（2008）年 8 月 28 日（豪雨）

8 月 28 日に本州付近に停滞する前線に向かって南から暖かく湿った空気が入り込み、大気の状態が不安定となって東海、関東、中国、東北地方などで記録的な大雨になった。愛知県岡崎市では 29 日の 1 時間降水量が 146.5mm、一宮市では 120mm、名古屋市千種区で 84mm を記録するなど短時間に局地的な大雨となった（気象庁ホームページより）。

愛知県では、広田川で破堤、死者 2 名、住家全壊 5 棟、半壊 3 棟、住家浸水床上 2,480 棟、床下 14,106 棟の被害を生じた（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では名古屋市北区、西区、中村区、東区および、一宮氾濫原をはじめとする低地で浸水害が発生し、名古屋市全体では住家浸水床上 1,175 棟、床下 9,929 棟の被害があった（名古屋市地域防災計画）。

(3) 地盤沈下

濃尾平野の地盤沈下は昭和 34 年の伊勢湾台風による高潮被害がゼロメートル地帯に大きな被害を及ぼしたことをきっかけに注目されるようになった。濃尾平野では特に干拓地の造成・土壌改良に伴う大量の地下水のくみ上げなどによって帯水層中の水量が減少し、地盤の沈降が起こったと考えられている。昭和 40 年代後半には 10cm/年以上の沈下が広範囲にわたって認められ、その後国・自治体などによって制定された地下水汲みあげに関わる規制の効果によって、昭和 48～49 年をピークに昭和 50 年代半ば以降は沈静化傾向にある（環境省ホームページより）。

本図幅の範囲では図幅西側の沖積低地で昭和 40 年代からの累積沈下量が 10cm～30cm に達する地域が分布するが、昭和 40 年代後半から 50 年代の初頭にかけて最大沈下量を記録し現在は沈静化している（東海三県地盤沈下調査会，2012）。

6 調査成果図の見方・使い方

6.1 地形分類図

(1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、盛土される前の低地や谷地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようにしている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

	分類	定義
山地・火山地	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	麓斜面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩屑または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	砂礫台地（更新世段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
低地	緩扇状地	山麓部にあつて、主として砂や礫からなる扇状の堆積地域。（本図幅では勾配が小さいため緩扇状地と称した）
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。
	氾濫原低地	扇状地と三角州・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	三角州・海岸低地	河口における河川の堆積作用で形成された低平地。
	砂州・砂堆、礫州・礫堆	波、河流または潮流によって生じた砂または礫の堆積した微高地。
	砂丘	風によって生じた、砂からなる波状の堆積地形。
	河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。
	浜	汀線付近の砂や礫で覆われた平坦地（砂浜及び礫浜）をいい、人工改変地内の旧浜を含む。
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、現存しないもの。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

(2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛土地」等に分類した地図である(表 6-2)。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近は土地本来の自然の状況(自然地形)がわからなくなっている地域が各地で見られるようになっている。

丘陵地等で住宅団地や工業用地の開発のため、切り盛り造成等により整備が行われた「人工平坦化地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦化地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」や、海岸や池沼等を埋め立てた「埋立地」、浅い海や干潟等を締め切り排水してできた「干拓地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせることで活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

大分類	小分類	摘要
人工平坦化地 (切り盛り造成地)	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に0.5m以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
埋立地		水部等を埋め立てて造成された土地。
干拓地		水部や干潟、湿地等を堤防で締め切り、排水することによって陸化した土地。
切土地		

(3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的な可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

分類		地震に際して予想される災害	大雨・洪水に対して予想される災害		
自然地形が分布する地域	山地・火山地	山地斜面	崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。	急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上流部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。	
		麓斜面及び崖錐	背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	谷沿いや谷の出口付近では、上流部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
	台地	砂礫台地（更新世段丘）	台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性がある。	通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することもある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することもある。逆に低地との間に高さが有る台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性がある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることも有効である。	
	低地	緩扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
		扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
		谷底低地	低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。また、斜面の近くでは、斜面崩壊の危険性がある。	洪水時に冠水することもあるが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。	
		氾濫原低地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	河川洪水、内水氾濫の可能性はある。	
		自然堤防	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	異常の洪水時に浸水することもあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。	
		旧河道	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。	明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することもある。	
		湿地	地震の揺れが増幅され、地盤変異の可能性はある。	盛土の状況により違いはあるが、洪水時には排水がきわめて悪く、長時間湛水する可能性がある。	
三角州・海岸低地		低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。また、津波により浸水することもある。	洪水時に湛水したり、高潮による浸水の可能性はある。		
砂州・砂堆、礫州・礫堆	地震の揺れが増幅され、砂州と砂州の間の低地では液状化の可能性はある。また、海岸沿いでは、津波の大きさによっては浸水することもある。	比高の小さい砂州・砂堆では洪水や異常の高潮等で冠水することもあるが、排水は速やかである。			
天井川及び天井川沿いの微高地	地震の揺れで天井川の堤防が崩壊、決壊等した場合、周辺の低地部への流水の可能性はある。	河川の増水による、周辺の低地部への流水の可能性はある。			
人工地形が分布する地域	山地・台地等	人工平坦地（宅地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		人工平坦地（農地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
	低地	改変工事中の区域	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	
		盛土地	谷底低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、洪水時に浸水することもあるが、概ね排水は速やかである。
			氾濫原低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
			旧河道、湿地等の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
		埋立地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく液状化の可能性が特に高い土地である。	周囲の水面に比べ十分に盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫等により浸水する可能性がある。	
切土地	切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。	切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。			
旧谷線	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。			

6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね 100 年前（明治・大正期）及び概ね 50 年前（昭和 40 年代）の 2 時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第 1 期） 現在から概ね 100 年前の明治・大正期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第 2 期） わが国では、1960 年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在から概ね 50 年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治・大正期、昭和期の 2 時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に 2 時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

分類	定義
田	水稲、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、ひざまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ 2 m 以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が 2 m 未満であっても森林とする。高さ 2 m 以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類似の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごとに分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺 1/50,000（図上の 1cm が現地の 500m に相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定できない災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、そ

の土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、台風や異常降雨時の高潮や河川氾濫等の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊や液状化等の地震災害、津波災害が考えられる。出水・高潮・津波の危険に関する危険区域として、1959年伊勢湾台風により激甚な高潮被害を受けた名古屋市南部の臨海地域は1961年には危険区域指定と建築構造規制が行われており、各種の被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形改変をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形改変が行われた場所でどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。また、すでに人工改変が行われているような場所でも、建築物の更新や再開発等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前に知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。
- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。
- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工改変を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、麓屑面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場所では、計画場所の変更や砂防対策の施工等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分

かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政改革にともなう行政職員の減少や防災関連費用の削減等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。

7 引用資料及び参考文献

7.1 引用資料

(1) 人工地形及び自然地形分類図

①「自然地形分類図」は、2万5千分の1土地条件図（国土地理院）を基本資料とし、以下の資料を引用または利用して編集した。編集にあたっては、空中写真の補足判読により一部修正を行った。

国土地理院（1974）：1:25000 土地条件図「名古屋北部」.

愛知県（1986）：5万分の1土地分類基本調査（地形分類図）「津島・名古屋北部」.
判読に使用した空中写真は、

M438（昭22.8.27 米軍撮影）、M628（昭22.11.1 米軍撮影）、

M624（昭22.11.3 米軍撮影）.

②「人工地形分類図」は、2万5千分の1地形図「小牧」（平成13年修正）「一宮」（平成13年修正）「名古屋北部」（平成20年更新）「清洲」（平成20年更新）の読図及び空中写真（CCB-2000-1X、国土地理院撮影）の補足判読により作成したもので、おおむね平成12年時点の地形の状況を反映している。

なお、本図の作成にあたっては、海津正倫（名古屋大学名誉教授・奈良大学教授）、藤本潔（南山大学教授）、堀 和明（名古屋大学准教授）の各氏のご指導をいただいた。

(2) 土地利用分類図

「土地利用分類図」は、現在から約120年前（1889年頃）及び約40年前（1970年頃）の2時期を対象に、それぞれの年代に測量された地形図を資料として、当時の土地利用の状況を、資料とした地形図から読み取れる情報の範囲内で分類し、その結果を5万分の1の縮尺精度に編集したものである。「土地利用分類図」の作成にあたっては、以下の地形図を利用した。

【第1期（明治期、1889年頃）】

5万分1 地形図「名古屋」「津島」明治22年測図（明治25.4.28 発行）

【第2期（昭和期、1970年頃）】

5万分1 地形図「名古屋北部」昭和45年編集（昭和46.9.30 発行）

なお、本図の背景に使用した地形図は、調査時点の最新図（平成11年要部修正）である。

(3) 災害履歴図

災害履歴図の作成にあたっては、以下の資料を引用した。

【水害】

① 1959年9月水害

- ・昭和34（1959）年9月降雨（伊勢湾台風）による浸水区域を、国土地理院『洪水被害状況図』、名古屋市（1961）『伊勢湾台風災害誌（付図4 浸水区域と交通局施設の被害図）』より編集。

② 1974年7月水害

- ・昭和 49 (1974) 年 7 月降雨 (豪雨) による浸水区域を、愛知県 (1983) 『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨 日光川流域浸水実績図 (筏川・鍋田川流域を含む)』、愛知県 (2001) 『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 50 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』、愛知県 (2005) 『新川流域浸水実績図 (昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』より編集。

③ 1976 年 9 月水害

- ・昭和 51 (1976) 年 9 月降雨 (台風 17 号) による浸水区域を、愛知県・関係市町村 (1981 ~1984) 20 万分の 1 土地保全基本調査 (愛知県) の『浸水実績図』、愛知県 (1983) 『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨 日光川流域浸水実績図 (筏川・鍋田川流域を含む)』、愛知県 (2001) 『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 50 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』、愛知県 (2005) 『新川流域浸水実績図 (昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』より編集。

④ 2000 年 9 月水害

- ・平成 12 (2000) 年 9 月降雨 (台風 14 号: 東海豪雨) による浸水区域を、愛知県 (2001) 『昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 50 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨 浸水実績図 (矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』、愛知県 (2005) 『新川流域浸水実績図 (昭和 49 年 7 月豪雨、昭和 51 年 9 月豪雨、平成 3 年 9 月台風 18 号、平成 12 年 9 月豪雨)』より編集。

⑤ 2008 年 8 月水害

- ・平成 20 (2008) 年 8 月降雨 (豪雨) により浸水区域を、愛知県『新川流域浸水実績図 (平成 20 年 8 月末豪雨)』、愛知県『平成 20 年 8 月末豪雨 日光川流域浸水実績図 (筏川・鍋田川流域を含む)』、愛知県『矢作川流域浸水実績図 平成 20 年 8 月末豪雨』、名古屋市 (2010) 『(平成 22 年度) 名古屋市水防計画付図 (名古屋市浸水実績図)』より編集。

【土砂災害】

① 1976 年 9 月災害

- ・昭和 51 (1976) 年 9 月降雨 (台風 17 号) による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

② 2000 年 9 月災害

- ・平成 12 (2000) 年 9 月降雨 (台風 14 号: 東海豪雨) による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

③ 2008 年 8 月災害

- ・平成 20 (2008) 年 8 月降雨 (豪雨) による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

【地震被害】

① 1891年濃尾地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1985）『明治24年10月28日濃尾地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、若松加寿江（2011）『日本の液状化履歴マップ 745-2008（DVD-ROM付き）』より転載。

② 1944年東南海地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1985）『昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、『若松加寿江（2011） 日本の液状化履歴マップ 745-2008（DVD-ROM付き）』より転載。

③ 1945年三河地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1985）『昭和20年1月13日三河地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、若松加寿江（2011）『日本の液状化履歴マップ 745-2008（DVD-ROM付き）』より転載。

【地盤沈下】

- ・地盤沈下量は、中部地方整備局『東海三県地盤沈下調査会 地盤沈下データ』より編集。

なお、各地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、空中写真、数値地図50000(地図画像)、数値地図25000(土地条件)及び基盤地図情報を使用した。(承認番号 平24情使、第534号)

7.2 参考文献

本調査説明書の作成にあたっては、以下の資料、文献等を参考とした。

【地形・土地利用】

- 愛知県(1985) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「桑名・名古屋南部」, 愛知県企画部土地利用調整課.
- 愛知県(1986) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「津島・名古屋北部」, 愛知県企画部土地利用調整課.
- 井関弘太郎(1962) 沖積平野の基礎的問題点, 名古屋大学文学部研究論集 XXIV, 51-74.
- 井関弘太郎・加藤英生・御船 哲(1967) 大規模住宅開発の適地選定に関する地理学的研究-名古屋都市圏を事例として-. 人文地理, 19(5), 29-52.
- 海津正倫(1979) 更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程. 地理学評論 52(4), 199-208.
- 海津正倫(1992) 木曾川デルタにおける沖積層の堆積過程と地形発達. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 3, 29-36.
- 小野映介・海津正倫・川瀬久美子(2001) 濃尾平野北東部における埋積浅谷の発達と地形

- 環境の変化. 第四紀研究, 40(4), 345-352.
- 小野映介(2004) 濃尾平野における完新世後期の海岸線変化とその要因. 地理学評論 77(2), 77-98.
- 梶田久忠(1982) 新木津用水改修小史. 郷土誌かすがい, 15.
- 春日井団研グループ(1971) 春日井市付近の地形面. 竹原平一教授記念論文集, 153-161.
- 活断層研究会(1980) 日本の活断層, 東京大学出版会.
- 活断層研究会(1991) 新編日本の活断層, 東京大学出版会.
- 川崎 敏(1960) 幕末より明治初期における尾西機業の地域形成. 地理学評論, 33(6), 312-326.
- 環境庁(1981) 1/50,000 現存植生図「名古屋北部」, 第2回自然環境保全基礎調査(植生調査).
- 岐阜県(1984) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜」, 岐阜県企画部土地対策課.
- 岐阜県(1986) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「瀬戸・明智・根羽」, 岐阜県企画部土地対策課.
- 桑原 徹(1968) 濃尾盆地と傾動地塊運動. 第四紀研究, 7(4), 235-247.
- 経済企画庁(1972) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「豊田」, 経済企画庁.
- 経済企画庁(1974) 地形分類図, 20万分の1土地分類図「愛知県」, 経済企画庁.
- 建設省計画局・愛知県・一宮市(1965) 愛知県一宮地区の地盤. 都市地盤調査報告書, 大蔵省印刷局.
- 国土交通省(2011) 1/50,000 土地分類基本調査(土地履歴調査)説明書「岐阜」「瀬戸」「名古屋南部」「豊田」. 国土交通省国土政策局国土情報課.
- 国土庁(1975) 地形分類図, 20万分の1土地分類図「岐阜県」, 国土庁.
- 国土地理院(1975) 土地条件調査報告書(濃尾地区). 国土地理院技術資料D-21.
- 坂本 亨・桑原 徹・糸魚川淳二・富田康秀・脇田浩二・尾上 亨(1983) 5万分の1地域地質研究報告「名古屋北部地域の地質」, 地質調査所, 64p.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2001) 岐阜—一宮断層帯の評価.
http://www.jishin.go.jp/main/chousa/katsudansou_pdf/66_gifu_ichinomiya.pdf.
- 須貝俊彦・杉山雄一(1999) 深層ボーリング(GS-NB-1)と大深度地震探査に基づく濃尾傾動盆地の沈降・傾動速度の総合評価. 地質調査所速報 no.EQ/99/3, 77-87.
- 田力正好・安江健一・柳田 誠・古澤 明・田中義文・守田益宗・須貝俊彦(2011) 土岐川(庄内川)流域の河成段丘と更新世中期以降の地形発達. 地理学評論, 84(2), 118-130.
- 日本地誌研究所(1969) 日本地誌 12 愛知県・岐阜県. 二宮書店.
- 浜 英彦(1989) 人口集中地区, 地理学辞典改訂版. 二宮書店, 319.
- 春山成子・大矢雅彦(1986) 地形分類を基礎とした庄内川, 矢作川の河成平野の比較研究. 地理学評論, 59(9), 571-588.
- 平岡昭利・野間晴雄(2000) 地図で読む百年 中部1. 古今書院.
- 町田 洋・海津 正倫・松田 時彦・小泉 武栄(2006) 日本の地形5 中部. 東京大学出版会.
- 山口恵一郎・沢田 清・清水靖夫・佐藤 侑・中島義一(1974) 日本図誌大系中部I. 朝倉書店.
- 【災害履歴調査】**
- 愛知県(2010)「愛知県史別編自然」.
- 愛知県(2011)「愛知県地域防災計画」.
- 飯田汲事(1985) 明治24年10月28日濃尾地震の震害と震度分布. 飯田汲事1985 東海地方

- 地震・津波災害誌（飯田汲事教授論文選集）。
- 飯田汲事（1985）昭和 19 年 12 月 7 日東南海地震の震害と震度分布。飯田汲事 1985 東海地方地震・津波災害誌（飯田汲事教授論文選集）。
- 飯田汲事（1985）昭和 20 年 1 月 13 日三河地震の震害と震度分布。飯田汲事 1985 東海地方地震・津波災害誌（飯田汲事教授論文選集）。
- 井口隆（2002）2000 年 9 月東海豪雨による土砂災害の発生状況。防災科学技術研究所主要災害調査，No. 38，pp. 177-195.
- 井口隆（2009）伊勢湾台風災害の特徴。防災科学技術研究所研究報告，No. 75，pp. 1-10.
- 一宮市（2013）「地域防災計画」。
- 宇佐美龍夫（2003）最新版日本地震被害総覧 416-2001。東京大学出版会，605p.
- 環境省水・大気環境局（2011）平成 22 年度全国の地盤沈下の概況。
- 清須市（2011）「地域防災計画」。
- 佐藤照子（2002）2000 年東海豪雨災害における都市型水害被害の特徴について。防災科学技術研究所主要災害調査，No. 38，pp. 99-162.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会（2009）日本の地震活動－被害地震から見た地域別の特徴。第 2 版，496p.
- 鈴木真一（2002）2000 年 9 月に東海地方で発生した豪雨のメソ α スケールの特徴について。防災科学技術研究所主要災害調査，No. 38，pp. 5-16.
- 瀬尾佳美・佐藤照子（2002）都市型水害としての東海豪雨災害：意識調査報告。防災科学技術研究所主要災害調査，No. 38，pp. 163-176.
- 高村博・西口哲夫・木下武雄・富永雅樹・福囿輝旗・大倉博（1977）1976 年台風第 17 号による長良川地域水害調査報告。防災科学技術研究所主要災害調査，No. 12，pp. 1-92.
- 東海三県地盤沈下調査会（2012）平成 23 年における濃尾平野の地盤沈下の状況。
- 内閣府（2008）中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」第 2 期報告書【風水害】1059 伊勢湾台風。
- 内閣府（2005）中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」第 1 期報告書【地震・津波災害】1854 安政東海地震・安政南海地震。
- 内閣府（2005）中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」第 1 期報告書【地震・津波災害】1891 濃尾地震。
- 中根和郎（2002）東海豪雨における豪雨と中小河川水位の関係，防災科学技術研究所主要災害調査，No. 38，pp. 17-98.
- 名古屋市（2010）「新修名古屋市史資料編自然」。
- 名古屋市（2010）「地域防災計画」。
- 春山成子，大矢雅彦（1986）地形分類を基礎とした庄内川，矢作川の河成平野の比較研究。地理学評論 Ser. A，59(10)，pp. 571-588.
- 米谷恒春（2002）東海地方豪雨災害の概要。防災科学技術研究所主要災害調査，No. 38，pp. 1-4.
- 若松加寿江（2011）：日本の液化履歴マップ 745-2007（DVD＋解説書），東京大学出版会，90p.
- 環境省ホームページ「全国地盤環境情報ディレクトリ（平成 22 年度版）」

(http://www.env.go.jp/water/jiban/dir_h22/index.html) (平成 23 年)
気象庁ホームページ「気象統計情報」
(<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>)
気象庁ホームページ「災害をもたらした気象事例」
(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index.html>)
(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index2.html>) (平成 23 年)
国土交通省中部地方整備局庄内川河川事務所「9.12 災害の概要」
(<http://www.cbr.mlit.go.jp/shonai/tanto/kasen/suigai/shonai/2000/gaiyo.html>)

資料

災害年表（地震災害）

災害年表（水害）

災害年表(地震災害)

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事	
		北緯	東経		愛知県	出典
715年7月5日 (霊龜1年5月26日)	三河	34 4/5	137.4	M6.5~ 7.0	正倉47破潰、百姓の廬舎陥没したものあり、三河の国府(現豊川)を中央にとる。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1498年9月20日 (明応7年8月25日)	東海道全般	34	138	M8.2~ 8.4	紀伊から房総にかけての海岸と甲斐で新道大きく、熊野本宮の社殿倒れ、那智の坊舎崩れ、遠江では山崩れ地裂けた。震害に比して津波の被害が大きく、津波は紀伊から房総の海岸を襲った。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1586年1月18日 (天正13年11月29日)	畿内・東海・東山・北陸諸道 (天正地震)	36.0	136.9	M≒7.8	飛騨白川谷の保木脇で大山崩れ、掃雲山城を含めて倒家埋没300余戸で死者多数。大垣、尾張、近江長浜、阿波でも被害があり、余震は翌年まで続いた。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001 ※参照 地震名称：日本の地震活動―被害地震から見た地域別の特長―
1605年2月3日 (慶長9年12月16日)	東海・南海・西海諸道 (慶長地震)	A33.5 B33.0	138.5 134.9	M7.9	2つの地震A、Bが生じたものと考えられる。震害の記録は見当たらないが、津波は犬吠岬から九州に至る太平洋岸に押し寄せ、家屋流失や死者などの被害が大きかった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001 ※参照 地震名称：国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」
1707年10月28日 (宝永4年10月4日)	五畿七道 (宝永地震)	33 1/5	136	M8.4	わが国最大級の地震の1つ。家屋倒潰地域は、駿河中央部・甲斐西部・信濃・東海道・美濃・紀伊・近江・畿内・播磨・大聖寺・富山、および中国・四国・九州に及ぶ。津波は伊豆半島から九州に至る太平洋沿岸及び大阪湾・播磨・伊予・防長を襲った。三河・尾張で死者19人、家屋全潰8,573棟、破損・半壊5,918棟の被害があった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1854年12月23日 (安政1年11月4日)	東海・東山・南海諸道 (安政東海地震)	34	137.8	M8.4	被害区域は関東から近畿に及び、震害の最もひどかったのは沼津から伊勢湾にかけての海岸で、倒潰率は10%以上、過半に達する宿も多かった。この地震による津波が房総から土佐までの沿岸を襲い、大きな被害があった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1854年12月24日 (安政1年11月5日)	畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道 (安政南海地震)	33.0	135.0	M8.4	この地震は安政東海地震の32時間後に起き、近畿地方及びその周辺での震害や津波の様子をはっきりと2つに区別できない。被害区域は中部から九州に及ぶ。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1891年10月28日 (明治24)	愛知県・岐阜県 (濃尾地震)	35.6	136.6	M8.0	仙台以北を除き日本中で有感。激震地域は根尾川・揖斐川上流地方。三河・尾張で死者 2,339、負傷者 4,594、家屋全潰 68,899に及ぶ。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事	
		北緯	東経		愛知県	出典
1944年12月7日 (昭和19)	東海道沖 (東南海地震)	33.8	136.6	M7.9	被害は静岡・愛知・岐阜・三重に多く、滋賀・奈良・和歌山・大阪・兵庫にも小被害があった。津波が伊豆半島から紀伊半島にかけて襲い、特に三重県・和歌山県の被害が大きかった。愛知県の被害は、死者461人、負傷者1,188人、住家全壊6,968戸、住家半壊19,676戸、非住家全半壊15,129棟、浸水家屋150。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1945年1月13日 (昭和20)	愛知県南部 (三河地震)	34.7	137	M6.8	とくに渥美湾岸の幡豆郡の被害が大きかった。振動は急激だったようで、福地・吉田・一色では全壊家屋が少なく、山地の室場・豊坂・三和・幡豆では多くなっている。小津波が発生、蒲郡で約1m、千間で30cmであった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1946年12月21日 (昭和21)	南海道沖 (南海地震)	33	135.6	M8.0	被害は中部地方から九州にまで及び、津波は房総半島から九州に至る沿岸を襲った。愛知県では、死者10名、負傷者19名、住家全半壊197戸の被害があった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001

※被害実数は文献により差異があります。

災害年表(風水害) 江戸時代以前

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
和銅	2	709	7		東海道・近畿地方(長雨)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
和銅	6	713	11	27	三河・尾張では暴風のため、樹木が倒れ、農作物に被害があった。このため穀物は減収。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
神亀	3	726			この年尾張に洪水があって、ききんとなり、飢民2,242戸に達した。遠江の5都も水害によりききん。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
神護景雲	1	767			この年、尾張に洪水があり、中島・海部郡に大被害が出た。ききんとなる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
神護景雲	3	769	9	17	木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島3郡が水害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
神護景雲	3	769	10	15	木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島の3郡に水害をこうむり、家屋浸水・水田を冠水。また、国府・国分寺(2寺)が流失し、大きな被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝亀	6	775	9	21	尾張・伊勢・美濃の3か国が暴風雨により、大被害を受けた。木曾川氾濫のため、沿川の地では、死者300余人、牛馬1,000余頭、国分寺・諸寺院19、その他家屋の被害は非常に多かった。	愛知県の気象(1961) 天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について
延暦	15	796	8		大雨・洪水があり、尾張では、ききんとなる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉祥	3	850			尾張に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
仁寿	4	854	3		尾張の河川が氾濫した。この年、沿川の地では水難に苦しみ、ききんとなる。なお、この年ごろから、河川上流山地の植樹が完成期に入った。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞観	8	866	5		尾張、長雨のため水害を被る。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
仁和	3	887	9	12	伊勢湾に高潮があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
長祿	2	1458	10	26	尾張・三河に暴風雨、洪水があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛正	6	1465	9	14	尾張・三河に暴風雨、洪水があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文明	18	1486	9	10	東海道・近畿諸国暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明応	1	1492	7	2	東海道・近畿諸国大雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明応	5	1496	10	2	暴風雨・洪水があり、伊勢湾沿岸では高潮被害があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
永正	14	1517	8	10	諸国、暴風、洪水被害あり。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天文	1	1532	9	26	洪水により、矢作川の支流・青木川・伊賀川(岡崎)の堤防が破壊された。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天文	9	1540	9	21	尾張・三河、暴風雨。ところどころで大木が倒れ、高潮により豊川川口の前芝・元梅敷では大被害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天文	10	1541	9	11	尾張・三河、暴風雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天文	13	1544	8	7	三河・尾張は、暴風雨・洪水となったが、特に三河では、人や家屋の被害が甚大であった。尾張でも木曾川の氾濫により、起町に水害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
弘治	2	1556	10	4	尾張で小田井川(庄内川支流)が氾濫し、沿川の地域が浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元亀	1	1570	9	30	三河・遠江で特に家屋や農作物の被害が大きかった。尾張でも知多郡では、家屋の被害があった。	
元亀	2	1571	9	19	東海道・近畿諸国、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天正	2	1574	8	28	尾張、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天正	14	1586	8	9	木曾川が大洪水となり、尾張・美濃両国の沿川地域は大水害をこうむった。美濃国各務郡前渡村と尾張国葉栗郡草井村(現江南市内)の間から西で、河道が現在のように変わった。尾張の葉栗・中島両郡では激流が村里をつらぬいて、人や家を流し、新しい河道ができ、富田庄・三谷郷等は新河道となった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM 天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について
文祿	4	1595	6	16	尾張・美濃、洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
慶長	1	1596	9	26	東海道・近畿諸国、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	2	1597			庄内川の出水により、右岸が破堤した。また、木曾川の出水により、丹羽郡山那村(現扶桑町山那)の田畑・家屋に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	9	1604	8	28	東海道・四国諸国、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	9	1604	9	7	尾張・美濃・伊勢・近江、暴風雨。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	9	1604	9	28	尾張・伊勢・美濃、暴風雨。	愛知県の気象(1961)
慶長	10	1605	9	3	尾張・三河・美濃・伊勢・近江では、被害があったが、木曾川はあまり出水しなかった。	愛知県の気象(1961)
慶長	11	1606	6	30	東海道・関東諸国、暴風雨。三河では、ところどころで堤防が決壊したが、尾張・美濃では大して被害はなかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	12	1607	10	4	三河・尾張、(東海道諸国)、暴風雨・洪水。矢作川では、ところどころで堤防が決壊し、橋が落ちた。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	13	1608	6	3	尾張・美濃、暴風雨・洪水。(東海道諸国、暴風雨・洪水)。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	14	1609	9	7	尾張・三河・美濃、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	14	1609	9	14	三河に大雨があり、矢作川堤防が挙母村(現豊田市内)内で決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	15	1610	6	23・27	6月23日・27日・7月8日、木曾川が洪水。7月8日、西美濃で大雨。7月16日、三河に洪水。西三河(矢作川)では、慶長14年8月の出水よりも水位が約90cm低かった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	15	1610	7	31	長雨が続き、さらに大雨が降って、木曾川・庄内川、その他、尾張の各河川が出水して大氾濫した。・木曾川は、尾張側の堤防が、決壊した。犬山から、中島郡加賀野井(現一宮市)の間で数か所決壊した。・庄内川が氾濫して、流域の被害は甚だしかった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	17	1612	5		木曾川の尾張側堤防がところどころ決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	17	1612	7	20	近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨。朝、東風が強く、正午から16時ごろにかけて、暴風雨となった。特に伊勢・尾張・美濃で強く、伊勢湾では破船2・30隻、熊野灘で破船7・80隻の海難があった。津島には、立田村の堤防が破壊して、川水が浸入した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	17	1612	7	24	尾張・美濃に洪水があった。立田村の堤防が決壊して、津島まで川水が浸入した。	愛知県の気象(1961)
慶長	17	1612	8	19	尾張・三河・近江・美濃に洪水があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	17	1612	9	26	近畿・東海道諸国、暴風雨。未明から午後にかけて、近江・伊勢・美濃・尾張では風が強く、西の吹き返しの風がとくに強かった。尾張では住家に被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	19	1614	6	4	近畿・東海道、大雨・洪水。5月31日から6月4日にかけて大雨が降り、4日夜には洪水となった。尾張・海東郡・勝幡では堤防が決壊し、田畑に被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	19	1614	6	19	近畿・東海道諸国、大雨・洪水。18日に大雨が降り、19日には大洪水となった。尾張・美濃・近江・摂津・河内・和泉の6か国では、4月の水害に加えて被害が大きかった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	19	1614	7	10	近畿・東海道諸国・摂津・河内・美濃、長雨・洪水。摂津・河内・美濃では被害が大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	19	1614	10	1	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。遠江・三河では風は強くなかった。名古屋城本丸天守の北東の石垣約140mがくずれた。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	1	1624	8	12	庄内川・矢作川が氾濫した。庄内川右岸の東春日井郡上條村(現春日井市)地内で破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	3	1626	5	8	庄内川が氾濫し、生棚(現名古屋市北区内)では、数haの農地に土砂が流入した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	3	1626	9		庄内川が、東春日井郡上條村(現春日井市)地内で氾濫した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	4	1627	9	15	東海道・関東、大雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
寛永	9	1632	10	1	16日間降り続いた大雨のため、庄内川が特に大增水し、枇杷島橋が流失した。本川では、成願寺・福德(現名古屋市)右岸の味鏡・大野木堤が決壊し、支川の五条川・合瀬川では、六ツ師・熊之庄(現北名古屋市)で破堤。このため、小田井・比良・平田(現名古屋市)、沖・九之坪(現西春村)の諸村をはじめ、尾張20か村が水害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	10	1633	6	9	9日から16日まで、大雨が降り続き、木曾川の派川佐屋川(明治30年以降降川)が破堤して、尾西地方一帯に浸水した。田畑の被害は約3万石に達した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	11	1634	7		尾張では、長雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	13	1636	9	12	尾張・三河・京都・近江、暴風雨・洪水。伊勢湾・三河湾に高潮がおこった。高潮により、熱田の海岸堤防が決壊して、新田に被害があり、道路は交通途絶した。名古屋城にも被害があった。三河吉田(現豊橋市)の船町の住家の大半が流失し、死者が出た。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	14	1637	9	25	東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正保	2	1645			矢作川が出水し、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正保	3	1646	9	14	矢作川が出水氾濫した。矢作川は数日來の雨で増水し、14日午後には水勢がにわかに加わり、夕方、碧海郡六ツ美村上青野(現岡崎市)西の堤防約4・50mが決壊して、氾濫した。寺院・民家約20軒が流失し、死者14・5人、田畑は不毛の地となった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶安	3	1650	9	26	九州・近畿・東海道諸国、大雨・洪水。木曾・長良・揖斐の三川が大出水し各所で破堤した。特に美濃の沿川地方では大被害をこうむった。これをく大寅の洪水とよぶ。尾張では、木曾川堤防が加賀野井(現一宮市)で決壊した。また、佐屋川堤防が決壊して、海東・海西郡へ流入し、尾西地方一帯の住家・田畑に大被害があり、多数の人・馬が死んだ。(尾張領の田畑被害20万石)この洪水以降、尾張の御囲堤はますます強固にされた。このほか、三河でも出水があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM 天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について
慶安	4	1651	9	18	尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・海東・海西部では佐屋川の大出水により、家屋が流失し、多くの人・馬が死んだ。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
承応	2	1653	6	30	東海道、暴風雨。30日夜半から翌朝にかけて、暴風雨となった。名古屋城・犬山城に被害があり、尾張領内の民家の被害は、22,000軒におよび、人・馬の死ぬもの多数だったという。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
承応	2	1653	9	27	中国・東海道諸国、暴風雨。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明暦	1	1655	9	9	東海道諸国(三河から関東南部)、暴風雨。矢作川が拳母村(現豊田市)内で破堤した。三河吉田城(現豊橋市)も風雨と落雷で大被害。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	1	1658	8	31	近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水。おもに近畿地方に風水害。尾張・三河での被害については不明。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	3	1660	6		尾張・美濃、雷雨・洪水。諸国、長雨・洪水。連日、大雷雨があり、尾張・美濃では水害や落雷による被害が多かった。7月21日には、雷雨がはげしく、住家・田畑の浸水、破堤などの水害があり、名古屋城では、落雷による被害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	3	1660	8	12	諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、12日明方から暴風雨となり、住家の風による被害が大きかった。名古屋から江戸へ向かう途中の大船8隻が破船。また、美濃大垣付近でも水害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	3	1660	9	24	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	3	1660	10	24	四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨。名古屋では、城内および城下に建物、住家の被害があり、堀川には海水が逆流して、白鳥の材木が多く流された。尾張全般の家屋・田畑に風水害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛文	4	1664	11		三河、大雨・洪水。矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛文	6	1666	8	16・17・28・29	尾張・美濃、大雨・洪水。各河川が出水したが、特に庄内川は大出水した。尾張各所の田畑が水害を受けた。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
寛文	6	1666	8	30	尾張・美濃、暴風雨・洪水により、大水害をこうむった。死者6名、家屋流失・倒壊245軒。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
延宝	2	1674	9	15	九州・四国・中部・関東諸国、暴風雨・洪水。木曾川の洪水で美濃・尾張の沿川地方は大水害となった。人よんでく小寅の洪水>という。庄内川右岸破堤。(被害については不詳)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
延宝	4	1676	8	13	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張藩領内で農地浸水、田(442,634石相当)、畑(約2,023ha)、家屋流失2,417戸、死者18人、水死した馬30頭の風水害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
延宝	6	1678	9	19	九州・四国・東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・美濃、水害。尾張藩領内では、田畑(85,600石余相当)、堤防約4,600m、家屋68戸に被害があり、3人と馬3頭が水死した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
延宝	7	1679	8	6・21	中国・中部諸国、暴風雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天和	1	1681	9	2	伊勢・尾張・北陸諸国、暴風雨・洪水。尾張では家屋の被害があった。このあと、18日の暴風雨とあわせて、この年、田畑の被害が大きかった。(ききんとなる)。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天和	1	1681	9	18・25	18日尾張・江戸等、25日伊勢・尾張諸国、暴風雨。尾張では、8月とこの2回の暴風雨が田畑の農作物へ与えた被害は大きく、ききんとなった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞享	3	1686	3	17	尾張では、夕方雷雨がはげしく、名古屋城下で落雷により家屋1軒が焼失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞享	3	1686	8	28	尾張、雷雨。名古屋城下に落雷があり、建中寺に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞享	4	1687	10	1	庄内川が出水し、支川の矢田川で1人水死した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞享	4	1687	10	4	尾張、四国・近畿・北陸・東海道関東諸国、暴風雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	4	1691	7	8	名古屋城下で落雷により1人死亡した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	7	1694	9	6	紀伊・尾張、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	10	1697	7	27	名古屋城下に雷雨があり、落雷により家屋2軒焼失。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	10	1697	8	26	尾張に雷雨があり、落雷により、家屋2軒焼失、1軒破損した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	11	1698	12	28	尾張・三河、大雨・洪水。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	12	1699	7	27	尾張、前日夕方から、27日朝にかけて暴風雨となった。	愛知県の気象(1961)
元禄	13	1700	4	14	名古屋城下で落雷により、家屋1軒焼失。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	14	1701	6	21	名古屋城下から熱田にかけて、突風・降ひょう(梅の実大)を伴ない、各所に落雷があり、熱田では突風により、家屋や樹木の被害もあった。22日夜には庄内川が出水し、田畑に被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	14	1701	8	2	尾張、暴風雨。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	14	1701	9	11	連日の降雨で、尾張・美濃の諸川は出水氾濫し、堤防破損53か所におよんだ。庄内川水系では、五条川合流点(五条川は改修の結果、新川に合流するようになったが、天明以前は庄内川に合流)の杵(いり)、法界門(新川・甚目寺境)の堤防右岸が破堤し、甚目寺はじめ海部郡一帯が浸水した。この時勝川堤も破壊した。14日、名古屋では、昼前(09~12時ごろ)、昼過ぎ(15時ごろ)ごろと夜(19時ごろ)に雷を伴って雨が強く、天白川の堤防が鳴海の方へ決壊した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	14	1701	9	19	四国・近畿・東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、18日明方から風雨が強く、特に9時ごろから昼過ぎまで大雨となった。このため、各所で浸水し、田畑の被害も甚だしかった。また、矢田川堤防が稲生で決壊した。(庄内川・矢田川合流点の矢田川左岸、現名古屋市)。三河では大水害となり、岡崎では、矢作川堤防約900mが決壊し、田畑(2万石相当)に氾濫した。流失家屋32軒、倒壊家屋52軒、小橋3か所が落ちた。渥美郡泉村(現渥美町)では新田堤防約180m破堤。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
元禄	14	1701	10	1	尾張、暴風雨。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	15	1702	8	21	四国・中国・尾張、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	15	1702	9	20	尾張、暴風雨・洪水。佐屋川水系の海東郡津島の兼平堤が見越地内で破堤し、海部郡は大被害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	15	1702	11	20	名古屋付近に朝から昼過ぎにかけて(08時すぎ~12時すぎ)大雨が降り、名古屋の東郊は被害をこうむった。天白川堤防が破堤して、鳴海等へ氾濫した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	1	1704	7	19	三河・尾張・遠江、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東(現春日井市内)で庄内川右岸堤防が約180m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	2	1705	8	15	三河・尾張・遠江、暴風雨・洪水。岡崎藩領内では、矢作川堤防約1,800m、田(32,540石相当)、家屋倒壊270戸、流失家屋92戸、死者13人の被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	3	1706	9		三河・尾張、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東(現春日井市)で庄内川右岸堤防が約90m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	4	1707	9	14	尾張、暴風雨。明け方から夕方まで南東の風が強かった。(午後、最も強かった)	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	4	1707	10	6	尾張・四国・中国諸国、暴風雨・洪水。尾張では家屋の被害などがあつたもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	5	1708	8	17	近畿・東海道諸国、暴風雨・高潮・洪水・竜巻。こののちききんとなる。三河湾・伊勢湾に高潮があつたもよう。尾張・半田では新田の堤防が決壊した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	2	1712	9	18	近畿諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、家屋の倒壊が多かつたもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	2	1712	10		尾張・三河、暴風雨・洪水。家屋の倒壊が多かつたもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	3	1713	7	27	尾張、暴風雨・洪水。27日夜半、犬山城の天守閣が落ちた。家屋被害12,000戸。28、29日尾張西部から浸水し、家屋・人馬の被害が大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM 天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について
正徳	4	1714	9	16	近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨・高潮・洪水・ききん。名古屋では午後(16時ごろ)から夜半にかけて暴風雨となる。庄内川が大出水し、味鏡堤(現名古屋市)が破堤して、氾濫した。伊勢湾沿岸に高潮がおこり海西郡愛知郡の新田(神戸・鳥ヶ地・甚兵衛・伝馬・大宝等)堤防を破堤した。尾張・三河とも家屋の倒壊、流失、死者、田畑の被害は甚大で、天和以来の暴風雨といわれる。こののち稲はみのらず、ききんとなる。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	5	1715	6	18	尾張、暴風雨・洪水。庄内川・矢田川が出水して、氾濫した。佐屋川(木曾川派川、のちに廃川)堤防が津島町付近で破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	5	1715	7	30	尾張に雷雨があり、落雷により、死者が出た。また、愛知郡中津村では住家が焼失した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	2	1717	9	19	東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・高潮。名古屋では、前夜から雨が降っていたが、朝(08時ごろ)から正午ごろまで南東の風雨が強くなり、屋根をふき破り、小屋をふき飛ばした。昼すぎ(13時ごろ)風向は南西にかわって、また強く被害が出た。尾張・三河ともに家屋・田畑等に風水害があつたもよう。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	3	1718	10	5	東海道諸国、暴風雨・高潮。尾張・三河は暴風雨となり、渥美湾に高潮がおきた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	4	1719	5	16	尾張・津島で落雷により、大木が折れた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	6	1721	9	6	東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・三河は暴風雨になり、寛文以来の大洪水といわれ、庄内川が大出水して氾濫した。尾張藩領内の被害は田畑の損害高162,000石相当、堤防などの破損約4,000m、蛇籠(じゃかご)の破損流失約25,000m。家屋流失74軒、同倒壊659軒、杵(いり)の損失41か所。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
享保	7	1722	9	24	近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水・高潮。尾張・三河の風水害は激甚で正徳4年9月以来の暴風雨といわれた。24日は朝から雨が降り続き、夜半(24時)ごろから南東の暴風雨となり、翌朝(06時ごろ)おさまったが、風が強くこれによる家屋の被害も大きかった。三河吉田(現豊橋市)から東では風はそれほど強くはなかったようである。伊勢湾・渥美湾の沿岸は高い高潮の来襲にあい、各新田をはじめ内陸部まで大打撃を受けた。また矢作川をはじめ、各河川が出水して、氾濫し、その水害を受けた。	愛知県の気象(1961)
享保	7	1722	12	15	尾張、強風雨。熱田では小舟20余隻が破損した。	愛知県の気象(1961)
享保	11	1726			知多方面、大雨・洪水。岩滑村(現半田市)内の川の堤防が決壊し、浜新田に荒廃地が生じた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	12	1727	5	3	夜、佐屋川(木曾川派川)が出水し、堤防が決壊し、海東・海西郡に氾濫した。麦作皆無となる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	15	1730			碧海郡小川村(現安城市)では、干ばつと大雨・洪水により、農作物の収穫が減少した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	16	1731	9	10	矢作川堤防が、拳母村内(現豊田市)で破堤した。そのほかにも水害があったもよう(碧海郡木戸村(現安城市)に水害による木綿減収検見引の免状がある)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	20	1735	8	9	近畿諸国・三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水して、小川村・木戸村(現安城市)などで水害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	1	1736	9	21	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。(三河)17日、16時ごろから夜半(24時ごろ)まで、北風の暴風雨となり、矢作川が大出水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	3	1738			尾張・三河、暴風雨・洪水。佐屋川(木曾川派川)堤防が海西郡赤目村(現八開村)で破堤し、田畑は水害を受けた。尾張・半田付近は大水害となった。英比川が決壊し、下半田全部が浸水、下半田・上半田ともに水田に損害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	4	1739	10	1	尾張、大雨・洪水。2日と3日の大雨により、庄内川堤防が萬場の南の左岸で破堤し、名古屋市西部一帯の稲葉地、中村以南がドロ海となった。また、山崎川の堤防も破堤した。(名古屋では、3日は夕方から22時ごろまで雷雨)。矢作川下流右岸の伏見屋新田で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	5	1740	9	6	矢作川・豊川その他の小河川が出水して、氾濫し、三河一帯に水害をこうむった。矢作川堤防が拳母村(現豊田市)で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	5	1740	9	12	尾張・三河、暴風雨。夜20時ごろから風が強くなり、夜半(24時ごろ)にはさらに強く、13日夜明けまで吹いた。家屋の倒壊、大木の倒れたものも多く、農作物の被害は大きかった。三河横須賀では住家の倒壊145戸、付属家、土蔵、へい、社寺等の被害が多数あった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛保	1	1741			木曾川が出水して、下流の鯛浦(現弥富町)で堤防が決壊した。十四山・飛島・永和各村の海岸部分は大水害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛保	2	1742	8	28	近畿・関東・東海・北陸諸国、暴風雨・洪水。矢作川が出水して、氾濫したもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛延	1	1748	10	9	三河、大雨・洪水。夜、矢作川が出水して、三河・額田郡能見村(現岡崎市)で堤防約50mが決壊した。他にも矢作川流域で水害があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛延	3	1750	5	18	尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が大出水して、生棚(現名古屋市北区楠町内)で堤防が決壊し、土砂が数haの農地に流入した。また、八田川(庄内川支川)の堤防も一部破堤して、味鏡・如意(現名古屋市北区楠町)は浸水した。矢作川下流の伏見屋新田(現碧南市)も浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	1	1751	7	19	尾張・東春日井郡小牧村(現小牧市)から、北東の17か村に大雨が降って、山地から土石の流出が甚だしく、田畑を荒廃した。	愛知県の気象(1961)
宝暦	2	1752	6	13	矢作川右岸の中嶋・北野(現岡崎市)の堤防が破堤し、被害甚大であった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	3	1753	7	4	4日夜から5日の大雨で、5日夜佐屋川の津島神社の神領堤が約45m決壊し、付近の民家の軒まで浸水した。(水位としてはそれほど高いものではなかった)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	3	1753	9	13	夜、大雨が降り、中島郡・海東郡・海西郡の木曾川筋では洪水となる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	4	1754	9	9	矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤し、下流でも氾濫があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	6	1756	10	24	矢作川が出水し、岡崎の伊賀川堤防が、伊賀八幡宮の前で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
宝暦	7	1757	5		東海道・関東・奥羽諸国、長雨・大雨・洪水・ききん。尾張・三河では、この年、2月中ごろから、雨がしばしば降り夏作は不作となる。4月中ごろからは、ことに雨天が多く(旧暦)4月27日から、5月5日ごろまでは、連日降り続き、なかでも5月2、3、4日は大雨が降って、3日・4日は大洪水となり、全般的に大水害をこうむった。<宝暦の洪水>	
宝暦	7	1757	7	30	30日大雨が降り、31日出水して、矢作川の堤防が決壊した。死者が多数出た。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	8	1758	6	30	三河、長雨・洪水・ききん。連日雨が降り続き各地に水害が発生した。前年の水害に続いて夏作は凶作となる。矢作川の川端堤が決壊し、国江村(現豊田市)などの田畑が埋没した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	8	1758	9	28	尾張、大雨・洪水。庄内川水系で堤防の決壊した所があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	11	1761	5	20	三河、大雨・洪水。矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	13	1763	10	8	尾張・三河、暴風雨。8日夜半から9日未明にかけて暴風雨となる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	2	1765	6	3	山城・尾張・三河・江戸、大雨・洪水。連日の雨で、4日庄内川が出水し、味鏡(現名古屋市北区楠町)付近で右岸堤防が決壊して氾濫し、西春日井郡如意・豊場から丹羽郡岩倉・五条川端にいたる尾張30余か村が水害をこうむった。三河では4日矢作川の拳母堤防が決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	2	1765	8	21	三河、大雨・洪水。矢作川堤防が拳母村内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	2	1765	9	16・17・21・22	四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張では連日の大雨で17日、庄内川が氾濫して、名古屋・熱田は一面に浸水し、東は奥田町から浜街道、西は佐屋街道から津島にいたる一帯が水害をこうむった。矢作川も拳母(現豊田市)で氾濫し、家屋80軒が流失、人が多く死んだ。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	3	1766	8	2	尾張、大雨・洪水。五条川が出水して、熊之庄(現北名古屋市)で堤防約10mが決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	3	1766	8	18	三河、大雨・洪水。矢作川右岸の渡刈堤防(現豊田市)が決壊して、家屋6戸が流失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	4	1767	8	4	尾張・三河、大雨・洪水・山津波。4日から6日にかけて大雨があり、6日夜、庄内川は右岸の比良・大野木(現名古屋市)、土器野松原(現新川町)などで破堤して、氾濫し、味鏡・如意など一帯がドロ海となる(宝暦の洪水と同様)。矢作川は猪子石で破堤し、名古屋の巾下門前まで氾濫。名古屋の北東部から西部にかけて低地全部が浸水。(長母寺北で山くずれ)。名古屋城西の道路上で水深1.5m余になり、数日間船で往来したという。このため、のち大幸川の開さく工事が行われた。名古屋南部は天白川の氾濫で、鳴海あたりまで浸水し、鳴海付近では、家屋の水害が大きかった。東海道上の水深は約1.8m。藩は舟を出して救助に努め、小屋を建てて、被災民の救済にあたった。この他、中島郡奥村などで木曾川の水が尾張側へ浸水したようである。同日、瀬戸の赤津や猿投山に山津波があった。矢作川では、渡村・下矢作片町・大門・日名・青木・細川・仁木入江・阿波寺等で破堤し、拳母・岡崎付近に浸水したほか、田畑の損害、人畜の死傷も多かった。また下流の伏見屋・平七新田(現碧南市)でも氾濫した。<明和の洪水>	
明和	4	1767	8	21	矢作川堤防が、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	5	1768	6		矢作川堤防が、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	8	1771	8	6	三河、大雨・洪水。岡崎の菅生川が門前組へ氾濫して、付近の家屋が浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	8	1771	8	19	三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	9	1772	8	30	東海道・関東諸国、暴風雨。尾張・半田では英比川の堤防が大破損した。江戸など東国の被害大。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	2	1773	8	7	伊勢・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、7日0時ごろから暴風雨となる。矢作川が出水し、拳母村内(現豊田市)で破堤。岡崎・門前組破堤。橋の落ちたところもあった。矢作川流域では田畑に被害があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	2	1773	8	28	三河、大雨・洪水。矢作川出水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	3	1774	9	28	三河、大雨・洪水。矢作川堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
安永	3	1774	10	5	三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	6	1777	9	21	尾張・三河で14時ごろから暴風雨となり(雷を伴う)、家を流したという。(不詳)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	8	1779	9	3	尾張・三河、暴風雨・洪水・竜巻。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	8	1779	9	29	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。29日から4日にかけて連日大雨。4日は暴風雨となり、東海道(尾張・三河)・関東・奥羽諸国、洪水となる。尾張では庄内川・天白川が、三河では矢作川が氾濫して、大水害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	1	1781	9		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、右岸の和爾良村字北御油(現春日井市)で約270m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	2	1782	8	1	尾張、大雨・洪水・(凶作)。1日夜半(24時ごろ)、五條川左岸で、清洲村の朝日付近から下流へ8か所、また合瀬川が六ツ師村で2か所(約180m)、それぞれ破堤して、田畑に氾濫した。その後8月21日(陽暦9月27日)までに4回の出水氾濫があった。このため不作となる。この年尾張・三河をはじめ全国的に凶作となる。矢作川では、拳母村内で破堤。その後7月18日(陽暦8月26日)、7月23日(陽暦8月31日)にも出水した。	
天明	3	1783	5		津島付近に大雨が降り、天王橋が流失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	3	1783			尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。連日の大雨のため庄内川が出水し、大野木(現名古屋市区山田町)で堤防がくずれた。さらに暴風雨となり、決壊氾濫の危険が増したが、幸いに大事にいたらずにすんだ。そのほかにも尾張および三河南西部の各地に被害があったもようだが不明。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	4	1784	9	21	尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、和爾良・上條(現春日井市)で破堤氾濫した。浸水のため付近一帯に2、3日間は通行不能になった。また、鳴海から三河の知立あたりまで浸水して、東海道は海のようになり通行不能となる。各地の農作物が被害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	5	1785	7	22	22日矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	5	1785	9	15	近畿・東海道、大雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	6	1786	3	15・26	尾張、大雨・洪水。冬にしては大雨が降り、15日夜佐屋川が増水して、津島神社神領の杵(いり)と工事中の堤防が、22時ごろ決壊した。また、28日夜にも同様決壊し、津島神社の床上まで浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	6	1786	9	21	四国・中国・近畿・北陸諸国・尾張、暴風雨。尾張では、農作物の被害が大きかった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	6	1786	9	28	四国・中国・近畿・関東・奥羽諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。28日昼前から(10時ごろ)、尾張・三河では暴風雨となり、各河川は出水した。矢作川は拳母村内で破堤した。尾張・三河の農作物に大きな被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	7	1787	10	6	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	8	1788	7	20	三河、大雨・洪水。矢作川出水、碧海郡小川村(現安城市)付近でところどころ破堤して、田畑に氾濫し、被害が大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	8	1788	9	24	三河、大雨・洪水。青木川(矢作川支流)が出水した(被害不明)。なお、土用中、雨が降り続き、その後もまた、7月下旬から8月中旬(陽暦8月下旬~9月中旬)まで雨が降り続いた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛政	1	1789	8	8	美濃・三河・遠江、大雨・洪水。矢作川が大出水して、拳母村(現豊田市)内の青木堤、宗定村などで破堤して、氾濫した。また、矢作古川でも破堤し、上流から下流にわたって氾濫したため被害が大きかった。岡崎藩の米の収納は前年より15,702俵減収であった。吉田藩でも14,263俵減収だったので、被害は大きかったものと考えられる(詳細不明)。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛政	1	1789	9	26	東海道、暴風雨・洪水。庄内川が大出水して、東山畑(現名古屋市区楠町)で決壊し、また、矢作川の宗定堤(現豊田市上郷町)が2か所決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛政	2	1790	9	27	三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、青木堤・八町橋上の堤・そのほかの堤防が決壊した。岡崎付近が浸水し、家屋・田畑の被害が大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
寛政	3	1791	9	17	尾張、暴風雨・高潮・洪水。夕方前(16時ごろ)から暴風雨となり、夜半(23時ごろ)まで続いた。このため風による家屋の倒壊などの被害があったが、伊勢湾に高潮がおこり、海岸地方では死者94人、倒壊・流失家屋5,825軒におよぶ大きな被害となった。	愛知県の気象(1961)
寛政	4	1792	10	23	23日夜、尾張に暴風雨があったが、被害などは不明。	愛知県の気象(1961)
寛政	6	1794	7		矢作川が出水して、矢作右川の堤防が決壊した。被害甚大。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛政	7	1795	10	12	尾張では、樹木がたおれ、田畑に被害があった。	愛知県の気象(1961)
寛政	10	1798	5	23・29	美濃・伊勢・尾張、長雨・大雨・洪水。4月はじめからの長雨に加えて23日大雨となり、美濃では水害が甚大であった(尾張については不詳)。	愛知県の気象(1961)
寛政	10	1798	8	27	尾張、大雨・洪水。	愛知県の気象(1961)
寛政	11	1799	9	18	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享和	1	1801	9	16	尾張西部、雷雨・落雷・洪水。夜20時ごろから雷雨がおこり、中島郡起・小信(現一宮市)方面に10か所ほど落雷した。このとき、強雨を伴い、木曾川堤防がとところどころでくずれた。奥村用の井げたを越水・古川が洪水のため、中島・小原・高野島・野府では浸水が甚だしかった。菟安賀新田では全戸、大平では3、4戸を残してほとんど、また東西西城・富田・今村もそれぞれ浸水した。古川通り下流の法立・丸淵辺も11日堤防が決壊した(現一宮市内の被害)。	
享和	1	1801	9	18	三河、大雨・洪水。菅生川・青木川(矢作川支川)のところで、堤防が決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享和	2	1802	7	26	尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。熱田新田をはじめ伊勢湾沿岸では高潮により、家屋が流され死者も多かったという。岡崎城内や額田郡久後村(現岡崎市)は水害を受け、岡崎の殿橋は半壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享和	2	1802	9	2	三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、3日拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享和	3	1803	9	30	尾張・三河、大雨・洪水。30日夜大雨となり、扇川・大高川(天白川支川)が出水、堤防が6か所(約280m)が決壊し、大高で倒壊家屋2軒の被害があった。1日矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	1	1804	10	1	尾張・三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。下流の碧海郡小川村(現安城市)付近でも氾濫があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	1	1804	10	20	三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、岡崎の矢作橋東方で約90m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	4	1807	10	17	尾張、三河、暴風雨。名古屋では尾張藩主の邸宅を破損、岡崎では社寺の建物樹木など被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	5	1808	9	15	紀伊・東海道・関東諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。	
文化	6	1809	9	15	三河、暴風雨。岡崎では、土べい約120mが倒れた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	8	1811	8	12	尾張、雷雨・強雨、竜巻。数日間雷雨が続き、この日名古屋城下へ多数の落雷があり、強雨が降って浸水したところもある。また熱田の沖に、竜巻が発生した(被害はなかったもよう)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	11	1814	8	14	三河、大雨・洪水。14日夜半前(22時ごろ)から、降り出した雨は強風を伴ない、翌15日の早朝には、矢作川水系が出水した。午後には青野堤・川島の大帳堤さらに各所の堤防が相ついで決壊し、夕方には人家に浸水した。雨は16日になってもやまず、矢作川水系の堤防決壊は10か所におよんだ。この方面の人家や田畑のこうむった被害は大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	12	1815	7	31	近畿・東海道諸国、大雨・洪水。31日から8月3日まで大雨が降り続き、尾張・美濃の諸川が氾濫して被害は大きかった。三河でも矢作川が氾濫した。美濃高須・八神・竹ヶ鼻付近は最も惨害をきわめた。	愛知県の気象(1961)
文化	13	1816	9	24	四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。23日夜から風雨が強くなり、24日朝(8時ごろ)から北東の風が激しくなる。家屋の被害など出はじめる。	
文政	2	1819	8	16	尾張、雷雨・落雷。連日、名古屋とその周辺に雷雨・落雷があり、特に19日には大雷雨となり、落雷によって各地に火災が発生した。(名古屋・前津、愛知県山崎村、知多郡横須賀村(30軒焼失)など)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	4	1821	9	3	三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
文政	5	1822	9	10	三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村内で破堤して、氾濫した。倒壊家屋25戸、死者2人、負傷者35人の被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	6	1823	9	21	三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	7	1824	8	18	三河、大雨・洪水。矢作川出水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	8	1825	5	31	三河、大雨・洪水。矢作川が増水し、碧海郡上青野村(現岡崎市)地内の本光寺西方で、堤防約180mが決壊した。青野村はもちろん、安藤・福穂・高畑・三ツ木・在家の各村が浸水して被害甚大であった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	8	1825	9	25	尾張・三河、大雨・洪水。連日の大雨で農作物に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	9	1826	6	21	尾張、暴風雨。早朝から夜(20時ごろ)まで風雨が強く、夜中から暴風雨となり、一宮の近村では樹木や家屋が倒れた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	11	1828	6	20	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、岡崎の大平橋が流失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	11	1828	8	10	中部・関東・奥羽、暴風雨・洪水・凶作。矢作川は、10日の暴風雨で満水し、11日各所の堤防が決壊氾濫した。	愛知県の気象(1961)
文政	12	1829	8	17	三河、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	13	1830	9	3	京都・尾張、暴風雨・洪水。朝から大雨が降り、庄内川が出水して、名古屋側の左岸で、辻村の堤防が決壊し、名古屋北西部の中下・柳町付近・名古屋城下が浸水した。なお、辻村には、城内用水源としての大杣(いり)があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	6	1835	8	29	尾張、暴風雨。高潮により、伊勢湾沿岸の新田堤防が9か所決壊して、家屋を流失し、海岸地方はドロ海となった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	7	1836	9	23	近畿・中部諸国・江戸、暴風雨・洪水。三河、暴風雨・洪水・凶作。尾張南部および尾張知多郡方面と三河全般に暴風雨の被害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	10	1839	9		尾張・三河、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、大留村杖の口(現春日井市)で約90m破堤して、氾濫した。また渥美郡泉村(現渥美町)地内で田に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	13	1842	6	26	尾張・三河、大雨・洪水。26日、矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。起日は不明だが、この年、木曾川の氾濫で、葉栗郡草井村(現江南市)の家屋40軒、耕宅地25haが、流失あるいは被害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	14	1843	9	27	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。26日九州諸国・伊勢・江戸・暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	14	1843	10	3	東海道(美濃・尾張)・関東諸国、暴風雨・洪水。	愛知県の気象(1961)
天保	15	1844	5	25	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	15	1844	9		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、東春日井郡和爾良村字北御油(現春日井市)で約140m破堤し、上条村(現春日井市)地方が被害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
弘化	2	1845	9	13	尾張、暴風雨。半田の英比川堤防が決壊して氾濫し、耕地の被害が大きく、家屋の倒壊も多かった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
弘化	3	1846	8	28	大雨で庄内川が出水して、東春日井郡下津尾村安丸野(現春日井市)で、右岸堤防が約180m決壊して氾濫した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
弘化	4	1847	5	24	美濃・尾張、暴風雨。美濃・尾張では、暴風で大木が倒され、美濃では大垣などで家屋の被害も多かった。尾張でも民家の海中へふき倒されたものがあった。知多郡大高村では、全壊家屋4戸、半壊家屋1戸の被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	1	1848	6	24	三河・遠江、大雨・洪水。長雨ののち雷を伴った大雨が降り各河川が出水した。矢作川が出水して、岡崎の矢作橋が破損した。	愛知県の気象(1961)
嘉永	1	1848	9	5	伊勢・尾張、暴風雨・洪水。尾張の各河川が出水し、ところどころで破堤して氾濫し、家屋の被害もあった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	2	1849	9	17	尾張、長雨・大雨・洪水。8月から大雨が続く、田畑の浸水が甚だしく、作物はほとんど腐った。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	2	1849	9	24	三河、大雨・洪水。朝(6時ごろ)から矢作川の堤防が決壊し、民家の床下に浸水し、29日になっても水が引かなかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	3	1850	8	28	尾張・三河に風水害があった。伊勢・美濃・尾張・三河・遠江・駿河6か国の農地被害概算は約100万石といわれる。	愛知県の気象(1961)

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
嘉永	3	1850	9	8	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。8日から13日までの間大雨が降り(12日夜から13日朝にかけては暴風雨)、その後も17日まで雨はやまなかった。このため、尾張・三河の各河川は全般に出水し、大きな水害となった。	愛知県の気象(1961)
嘉永	3	1850	10	7	尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。伊勢湾には高潮がおり、海西郡の八穂新田の堤防が決壊して、海水が一带に浸入した。矢作川・豊川も出水しているが、水害をおこすほど、水位は高くなかったようである。	愛知県の気象(1961)
嘉永	5	1852	9	4・25	三河、暴風雨。岡崎では、9月4日夜半から5日正午ごろまで(南東の風)、9月25日10時ごろから、10月5日夜それぞれ暴風雨となった。矢作大橋は約50m破損した(どの暴風雨によるものか不明)。9月4日、四国・近畿・関東、9月25日、紀伊・安芸、10月5日、中国・近畿・江戸、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	5	1852	9	21	三河、大雨・洪水。矢作川が出水し(夜20時ごろ)、額田郡天白村大曲(現岡崎市)で約220m破堤した。このため、在家・三ツ木(現岡崎市)および近隣の各村は床上1m位も浸水したが、中之郷・上青野・赤湊・高橋の各村は、やや高地のため早く水が引いた。<天白切れ>	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	6	1853	9		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、右岸の東春日井郡神領村字海東(現春日井市)で約270m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	7	1854	6		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡松河戸村(現春日井市)一ツ橋で約390m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	7	1854	9		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡神領村字海東(現春日井市)で約360m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安政	2	1855	9	7	尾張・三河、暴風雨(大雨)・洪水。7日朝から大雨が降り、夜に入っても降り続き、8・9日はやんだ。しかし、9日夜には再び豪雨になり、10日まで続いた。(7日と10日は暴風雨)。このため各所の堤防が決壊したが、前年の大地震後の復旧が完了していなかったため被害が大きくなった。	愛知県の気象(1961)
安政	2	1855	9	30	四国・近畿・東海諸国、暴風雨。尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。名古屋、30日午後から暴風雨となり、夜になって最も強くなった。夜22時ごろ伊勢湾・渥美湾に高潮がおり、伊勢湾沿岸の新田堤防や海岸堤防91か所が決壊した(知多半島から海部郡まで)。流失家屋130軒、死者20人の被害があり、とくに甚だしかったのは堀川・庄内川の間の築地前・熱田前・稲富・永徳・神宮寺の新田であった。	愛知県の気象(1961)
安政	3	1856	8	29	尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡勝川村字松ノ内(現春日井市)で約50m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安政	4	1857	6	8	美濃・尾張、大雨・洪水。各河川が氾濫した。	愛知県の気象(1961)
安政	4	1857	9	2	尾張、大雨・洪水。尾張横須賀代官管内28か村、鳴海代官管内29か村が水害をこうむった。	愛知県の気象(1961)
安政	4	1857	9	18	尾張、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、東春日井郡勝川村(現春日井市)の東切野と西切野で約130m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安政	6	1859	7		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、松川戸村(現春日井市)で約370m破堤した。木曾川・佐屋川破堤のため、この二川にはさまれた輪中に大被害があった(水深3m余になる)。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万延	1	1860	6	29	美濃・尾張、暴風雨・洪水。伊勢湾に高潮がおり、新田に被害があったが、あまり著しいものではなかった。中島郡起村(現一宮市)では、全壊家屋2戸、半壊家屋6戸の被害があり、そのほか尾張地方に建物や人の被害があったもようだが詳細は不明。尾張藩領内の被災村数は115か村、農作物被害高は12万石。三河では、矢作川水系が出水し、大平橋(現岡崎市)をはじめ橋の流失があった。また乙川の大平橋下流で浸水した。また上流の拳母村(現豊田市)内でも破堤している。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万延	1	1860	7	29	尾張・三河、暴風雨・凶作・ききん。稲など農作物に強風が被害を与えたらしい。この年は余り強くはなかったが何度も暴風がふき農作物の収穫に影響した。	
文久	1	1861	9	24	三河、暴風雨・洪水。24日夜から暴風雨になり、25日夕方雨はあがる。矢作川支川の大平川(乙川)が出水し、大平橋が流失した。岡崎は一部住家が浸水したもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文久	1	1861	11	7	三河、大雨・洪水。7日夜大雨、8日未明(3時ごろ)矢作川は満水となり、大平川(乙川)の大平橋(仮橋)は7時ごろ流失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
文久	2	1862	8	19	三河・駿河、暴風雨・洪水。岡崎では、24日から雨が降り、夕方から南東の風が強くなって、終夜続く。25日朝、一部に住家の浸水がはじまり、次第に甚だしくなる。風向は南東から北、そして西にかわり、西の吹きかえしが甚だしく強かった。矢作川の水位は低かったが、菅生川の水位は格段に高かった。	
文久	3	1863	10	7	尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡勝川村字松ノ内(現春日井市)で約50m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元治	1	1864	8	12	三河、雷雨・落雷・竜巻。岡崎およびその周辺に多数の落雷があり(10か所余)、4人もの死者が出た。碧海郡隣勝寺村(現豊田市)付近に、竜巻が発生し、家屋を倒し、死者数人が出た。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	1	1865	7	10	美濃・尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、左岸の瀬古村(現名古屋守山区)・中切村(現名古屋市西区)、右岸の味鏡村(現名古屋北区)・勝川村(現春日井市)で破堤して氾濫、一帯に大水害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	2	1866	6	26	尾張・三河、強風雨。田植期の26日夜から27日にかけて風雨が強く、竹・木が折れる。夏作は不作となる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	2	1866	7	18	三河、暴風雨・洪水。刈谷の高須新田(猿渡川下流)が冠水し、三河の海岸地方では農作物に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	2	1866	8	10	三河、暴風雨・洪水。岡崎では、10日は雨だったが、夕方(18時ごろ)から風雨が強くなり、夜半(22時ごろ)には、川が氾濫して、一部住家に浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	2	1866	9	14	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。尾張・三河では、13日夜から15日まで大雨が降り続き、15日は夜(20時ごろ)から翌朝(7時ごろ)まで暴風雨であった。尾張では、家屋・樹木・農作物の被害が大きかった。岡崎では河川の出水により、家屋の浸水もあり、三河の農作物も大きな被害を受けた。	愛知県災害誌(1970)
慶応	3	1867	9	27	尾張、暴風雨・洪水。庄内川が出水し、松河戸村(現春日井市)八反田で破堤した。	愛知県災害誌(1970)
慶応	4	1868	5		近畿・東海道・関東地方、長雨(大雨)・洪水・凶作。尾張・三河とも、閏4月中旬から連日雨が降り続き、5月に入ってさらに甚だしくなった。このため、低地の浸水や諸川の氾濫がおこったが、ことに丹羽郡入鹿池堤防の決壊による被害は甚大であった<入鹿切れ>。この雨で、この年は凶作となる。これは、多雨型の梅雨とその末期の大雨によるものである。	愛知県災害誌(1970)
慶応	4	1868	9	16	尾張、大雨・洪水。庄内川水系が出水し、庄内川の上・中・下志段味村、ほかの各所で堤防が決壊した。矢田川でも瀬戸村・瀬古村・成願寺村・中切村・福徳寺村等で破堤して、家屋流失や死者も出た。名古屋も巾下付近で家屋の浸水が甚だしく、本町・広小路・赤塚(当時は小川や溝が多かった)も床下浸水した。また、一宮等尾張西部地方でも低地が浸水した。	愛知県災害誌(1970)

※被害実数は文献により差異があります。

災害年表(風水害) 明治時代以降

開始日				終了日				気象概要	気象値			事象	出典
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日		降水量		風速等		
									指標	観測局			
明治	10	1877	10									愛知県下全般に暴風雨。死者13人、負傷者9人、家屋全壊1,058戸、家屋半壊233戸の被害があった。	愛知県の気象(1961)
明治	22	1889	9	11								紀伊半島から名古屋付近を通過した台風により、三河湾・伊勢湾に高潮が起きた。熱田では11日19時頃に高潮が来襲し、豊田・柴田・笠寺・笠寺・伝馬・星崎の名新田一帯が浸水した。県一般での暴風雨と沿岸での水害により、死者876人、負傷者79人、家屋全壊・倒壊7191戸、流失家屋7,132戸、浸水家屋31,730戸という被害を出した。	愛知県史別編自然_付録00-ROM
明治	25	1892	9	4						最大風速 10.1m (20分間 平均)		愛知県下全般に暴風雨。三河の渥美・宝飯・八名・額田郡で甚大な被害があった。	愛知県の気象(1961)
明治	27	1894	8	23								尾張西部に落雷があり、中島郡で死傷者2人、気絶者7人があった。	愛知県の気象(1961)
明治	28	1895	8	13								強い雷雨が続き、合計234ヶ所へ落雷し、死傷者4人、気絶者6人などの被害があった。	愛知県の気象(1961)
明治	29	1896	8	30	8	31				最大風速 18.8m (20分間 平均)		紀伊半島西部から若狭湾に進んだ台風により、尾張地方を中心に死者33人、負傷者63人、全壊住家2,104戸の被害が出た。海岸地方では高潮により新田に大きな被害。	災害記録日比川
明治	29	1896	9	4	9	11		総雨量 名古屋 762mm				長雨と集中豪雨により、矢作川以西の河川が破堤・氾濫した。愛知・東春日井・西春日井・中島・海東5郡の被害が甚大であった。	愛知県災害誌(1970)
明治	30	1897	6	16	6	17		総雨量 名古屋 129mm 熱田 139mm				強い雷雨で、住家の全壊3棟、建物破損7棟。また大雨で名古屋市内の約1,500戸が浸水した。	愛知県災害誌(1970)
明治	30	1897	9	29								四国北部から名古屋の南を通った台風に伴い、大雨が降った。海西郡開治村(現愛西市)で佐屋川の堤防が決壊し、死傷者4人、床上浸水10,604棟の被害を出した。	災害記録日比川
明治	31	1898	8	1								集中豪雨により名古屋市内で1,658戸が浸水。	愛知県の気象(1961)

愛知県													
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典	
	年	西暦	月	日	月	日		指 標	降水量				風速等
									観測局	値			
明治 35	1902	9	28				暴風雨			最大風速 13.8m (20分間 平均)	尾張西部と関東地方を相次いで北上した2つの台風により、尾張地方で強い暴風雨となった。		
明治 36	1903	7	7	9	7	9	大雨・暴風・洪水			最大風速 22.0m (20分間 平均)	土佐沖から若狭湾に進んだ台風に伴う大雨と暴風雨で、死者・行方不明者8人、負傷者39人、などの被害が出た。東春日井郡神坂村の内津川や西加茂郡拳母町・根川村の矢作川が破壊した。		
明治 37	1904	7	9	7	11	11	暴風雨・長雨			最大風速 14.8m (20分間 平均)	10日、和歌山の東方から彦根付近に進んだ台風に伴う暴風雨で、豊川・矢作川等に氾濫被害が出た。台風の通過後も雨が続き、11日には東春日井郡篠木村と高間村で庄内川が破壊し、名古屋市内の住家1,082戸、非住家110棟が浸水した。被害が大きかったのは三河地方で、死者39人はすべて東三河でのものである。		
明治 39	1906	7	10	7	16	16	大雨				大雨により庄内川・矢作川流域で、堤防決壊の被害が出た。	愛知県の気象(1961)	
明治 41	1908	8	7				暴風雨・洪水	総雨量 名古屋	168mm	最大風速 10.6m (20分間 平均)	伊勢湾に入った台風の影響により、名古屋市内で床上浸水179戸、床下浸水6,379戸の住家被害が出た。	愛知県史別編自然-付録CD-ROM	
明治 44	1911	6	19				暴風雨			最大風速 23.1m (20分間 平均)	神戸付近から新潟に進んだ台風の暴風雨により、県下で死者65人、負傷者43人、全壊住家373戸などの被害が出た。	愛知県史別編自然-付録CD-ROM	
明治 44	1911	8	4				暴風雨・洪水			最大風速 14.5m (20分間 平均)	三河湾に上陸した台風の暴風雨により、東春日郡高蔵寺町ほか、西春日井郡川中村で庄内川・矢作川が破壊した。また天白川・山崎川が氾濫し右岸の愛知郡笠寺村・熱田町等で浸水した。床下浸水は、名古屋警察管内で3,671戸、熱田警察所管内で2518戸に及んだ。		
明治 45	1912	4	19				降雹・突風				丹羽郡・中島郡・海東郡を中心に激しい降雹があり、農作物に被害を与えた。降雹と同時に強い突風が起り、丹羽郡大口村から古知野村にかけて死者1人、全壊住家11棟の被害となった。	愛知県の気象(1961)	
大正 1	1912	8	13				落雷				尾張地方で落雷30箇所、即死2人、家屋全焼1戸。	愛知県史別編自然-付録CD-ROM	

愛知県													
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典	
	年	西暦	月	日	月	日		指 標	降水量				風速等
									観測局	値			
大正 1	1912	9	22	9	23	暴風雨・高潮	総雨量 名古屋	103mm	最大風速 28.2m (20分間 平均)	大阪湾から若狭湾へ進んだ台風に伴う暴風雨と高潮で被害が出た。「大正元年の台風」と呼ばれる。日光川が1,500mにわたって決壊破損し、海東郡南陽町、神守村、蟹江町の住宅は屋根だけを残して濁流におおわれた。	愛知県地域防災計画 木曾川町史		
大正 2	1913	10	3			暴風雨	総雨量 名古屋	78mm	最大風速 12.1m (20分間 平均)	熱田警察署管内で床上浸水912戸、床下浸水761戸、一宮警察署管内で床上浸水40戸、床下浸水1,815戸。			
大正 6	1917	7	16			落雷				東加茂郡、八名郡で落雷によって2人が死亡、住家1棟が全焼した。			
大正 6	1917	7	26			落雷・洪水				尾張で落雷、死者3人、家屋消失20戸の被害を出した。また大雨も降り、57戸で床下浸水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM		
大正 8	1919	7	18			強雨・落雷				名古屋付近で短時間の集中豪雨で名古屋市およびその周辺で広範囲にわたって浸水被害が発生した。	愛知県の気象(1961)		
大正 9	1920	7	27			落雷				落雷により東春日郡内で3人が死亡、家屋2戸が焼失した。			
大正 10	1921	6	30	7	1	暴風雨			最大風速 18m (20分間 平均)	梅雨前線と低気圧の影響で、県下で死者5人、負傷者10人、全壊家屋362戸、半壊家屋132戸、浸水家屋199戸の被害が出た。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM		
大正 10	1921	7	14			大雨				雷を伴う大雨が降り、名古屋市と鳴海町を中心に2,625戸の浸水被害が出た。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM		
大正 10	1921	7	18			大雨	総雨量 名古屋	107mm		雷を伴う大雨が降り、江川と菟瀬川が氾濫した。名古屋市街を中心に9,116戸の浸水被害が出た。			
大正 10	1921	7	26	7	28	大雨・洪水				雷を伴う激しい雨で瀬戸川が増水氾濫し、瀬戸町で約700戸が浸水した。鳴海町・天白村では天白川・扇川の堤防が決壊し、床上浸水200戸、床下浸水1500戸の被害となった。	愛知県の気象(1961)		
大正 10	1921	9	25	9	26	暴風雨・高潮	総雨量 名古屋	39mm	最大風速 18.5m (20分間 平均)	紀伊半島を北上した台風の影響で暴風雨となり、伊勢湾北部に高潮が起った。海部郡から名古屋南部にかけて、高潮と日光側の氾濫による被害が甚大で、3,050haにわたり、10日～2ヶ月間も浸水した。			
大正 14	1925	8	14	8	15	大雨・洪水	総雨量 名古屋	181mm		低気圧の影響で住内川・矢作川流域に激しい雨が降った。西加茂郡拳母町などで河川が破堤氾濫し、付近一帯が浸水した。東春日郡瀬戸町でも、堤防の決壊で57戸が倒壊する被害が出た。	愛知県災害誌(1970)		

開始日					終了日					愛知県						
和暦	年	西暦	月	日	和暦	年	月	日	気象概要	気象値			事象	出典		
										指標	降水量				風速等	
											観測局	値				値
大正	14	1925	8	16	8	17										
									強風雨・竜巻						和歌山から舞鶴付近に進んだ台風の影響で、名古屋市で床上浸水50戸、床上浸水1,159戸などの被害が出た。また海部郡佐織村では竜巻も発生し、負傷者も出た。	愛知県災害書誌(1970)
大正	14	1925	9	11					暴風雨・洪水	総雨量 名古屋 187mm	最大風速 22.8m (20分間 平均)				伊勢湾を北上し名古屋付近を通った台風により、沿岸部と平野部を中心に暴風雨となり、死者7人、行方不明5人、負傷者3人、家屋の全壊52戸、半壊16戸、浸水約2万戸の被害が出た。	愛知県災害書誌(1970)
昭和	4	1929	8	14	8	15			暴風雨	総雨量 名古屋 118mm	最大風速 17.5m (20分間 平均)				大阪湾から若狭湾へ進んだ台風で、矢作川上流部に豪雨が降った。西尾町の付近で矢作川古川の堤防が大きく決壊し、1,500余戸の浸水家屋を出した。	
昭和	4	1929	9	10					大雨	総雨量 名古屋 195mm	最大風速 7.8m (20分間 平均)				南海上を進んだ台風の影響で大雨が降り、江川警察署管内だけでも1,399戸の浸水家屋を出した	
昭和	5	1930	7	19					大雨・洪水						台風から変わった日本海を東進した温帯低気圧の影響で、庄内川の中流や上流域の高地に短時間に激しい雨が降った。東春日井郡高蔵寺町で内津用水が氾濫し、死者7人、重傷者2人を出した。このほか東春日井郡を中心に、西春日井郡、丹羽郡方面で大きな水害となった。	
昭和	5	1930	7	23					落雷・洪水						飛騨川、長良川ぞいに南下した雷雲が名古屋市北部に達し、尾張北部の落雷は100余件に上った。雷鳴とともに豪雨となり、名古屋市内だけでも数千戸が浸水した。	愛知県の気象(1961)
昭和	6	1931	10	13					大雨・洪水						室戸岬から名古屋付近を通過した台風に伴う大雨で、東春日井郡味岡村の入居用水から出る葉師川が氾濫するなどして、尾張西部と北部を中心に、多数の浸水家屋を出した。	
昭和	7	1932	7	8					大雨						低気圧と前線の影響で、庄内川や日光川流域で激しい雨が降り、名古屋をはじめ各所で多くの浸水被害が出た。庄内川流域では堤防、橋などが破壊決壊する大きな被害が生じた。	
昭和	7	1932	9	13	9	16			長雨						9月初旬からの長雨に驟雨性の豪雨が重なり、名古屋市内だけでも約2,000戸の浸水家屋を出した。	
昭和	8	1933	8	24					落雷・洪水						尾張平野とその周辺一帯に激しい雷雨があり、一宮市で浸水家屋2,000余戸を出した。東春日井郡では住家の全壊と半壊の被害が各1件発生した。	

愛知県												
和暦	開始日			終了日			気象概要			事象	出典	
	年	西暦	月	日	月	日	気象値					
							指標	観測局	値			風速等
昭和8	1933	9	14								名古屋地方で大雷雨となり、床上浸水80戸、床下浸水6,380戸の被害が出た。	
昭和9	1934	9	8	9	9		総雨量	名古屋	31mm	最大風速 15.8m (20分間 平均)	台風から変わって日本海を北上した温帯低気圧に伴う強風で、風に飛ばされたり、飛来物にあたるなどして、死者2人、負傷者1人を出した。	
昭和9	1934	9	21				総雨量	名古屋	24mm	最大風速 32.9m (20分平 均)	室戸岬から雷山湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋署管内だけでも死者4人、負傷者51人の被害が出た。河川の出水による被害は少なかったが、海岸地方では高潮の被害が出た。	
昭和9	1934	11	1								猛烈な雨で、江川署管内116戸、笹島署管内697戸、熱田署管内280戸の浸水被害が出た。	
昭和10	1935	10	27								低気圧の影響で豪雨となり、名古屋市全体で1万戸以上が浸水した。天白村では天白川への転落行方不明者1人を出した。	
昭和11	1936	10	2	10	3		総雨量	名古屋	198mm	最大風速 18.6m	南海上を進んだ台風の影響で大雨が降り、名古屋市内だけでも12,686戸の浸水家屋を出した。	
昭和12	1936	7	13	7	15						梅雨前線が活発化した豪雨の影響で、一宮市で5,000戸の浸水家屋を出したのをはじめ、多くの浸水被害が発生した。	木曾川町史
昭和12	1937	9	11							最大風速 26.7m	足摺岬から鳥取沖へ進んだ台風の影響で風雨が強まり、名古屋市内で飛散物による死者2名が出た。	
昭和13	1938	7	3	7	5						低気圧が通るたびに梅雨前線が活発になって豪雨が続き、名古屋市内で3,409戸の浸水家屋を出した。	
昭和14	1939	8	7								名古屋付近で大雷雨があり、市内で4,561戸が浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
昭和15	1940	6	16	6	17		総雨量	名古屋	192mm		千天の大雨で庄内川が大増水し、名古屋市内で1,600余戸の家屋が浸水した。	
昭和16	1941	6	27	6	29						梅雨前線の長雨が激しい雨となり、山間部でがけ崩れ、平野部で河川の氾濫、堤防の決壊などの大きな被害が出た。名古屋市内で床下浸水家屋2,000余戸、西加茂郡で重要道路通行不能。	
昭和16	1941	7	10	7	12						太平洋洋面に発生した前線が活発化し、庄内川上中流域に激しい雨が降った。名古屋市内で死者3人、浸水家屋1,100棟の被害が出た。	
昭和19	1944	10	7	10	8		総雨量	名古屋	80mm	最大風速 21.7m	伊勢湾から名古屋付近に上陸した台風の影響で、濃尾平野はかなりの被害を受けた模様であるが、資料不足のため詳細不明。	

愛知県												
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典
	年	西暦	月	日	月	日		降水量		風速等		
								指標	観測局			
昭和20	1945	9	18				台風第16号 (枕崎台風)	総雨量 名古屋	40mm	最大風速 29.7m	猛烈な台風の影響で20m以上の暴風となり、急造のパラックが多数倒壊し、死者も4人あった。	
昭和20	1945	10	5				台風第19号	総雨量 名古屋	217mm	最大風速 14.7m	紀伊半島をかすめて東海道沖を東進した台風の雨雲の影響で、広範囲に水害が発生した。	
昭和20	1945	10	11				台風第20号 (阿久根台風)	総雨量 名古屋	229mm	最大風速 18.3m	台風に刺激された前線の影響で大雨が降り、水害が発生した。	
昭和23	1948	11	19				台風第34号	総雨量 名古屋	21mm	最大風速 15.4m	東海道沖を海岸沿いに進んだ台風により、風水害を生じた。	
昭和24	1949	8	31	9	1		台風第10号				八丈島方面から小田原の西に上陸した台風の大雨で、名古屋市内と中島郡方面を中心に浸水の被害を出した。	
昭和25	1950	7	28	7	30		台風第9号・ 熱帯低気圧				九州の南海上で停滞した台風と熱帯低気圧に伴う大雨の影響で、1,600余戸の浸水被害が出た。	愛知県災害誌(1970)
昭和25	1950	9	3				台風第28号 (シエーン台風)	総雨量 名古屋	47mm	最大風速 26.7m/s (10分平均) 最大瞬間風速 36.0m	室戸岬から若狭湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋市、一宮市、西加茂郡で計6人の死者を出した。	愛知県災害誌(1970)
昭和27	1952	6	23	6	24		台風第2号	総雨量 名古屋	177mm	最大風速 15.6m	紀伊半島南端に上陸し渥美半島に進んだ台風と、それに刺激された梅雨前線の影響で、東海道地方全域に大雨が降り、長良川下流域で堤防が決壊して大災害となった。	
昭和27	1952	7	10	7	11		豪雨・洪水				前線の活動が活発になり、庄内川中流域から名古屋にかけて大雨が降った。名古屋近郊の天白川、山崎川が増水氾濫し、名古屋市で床上浸水2,353戸、床下浸水38,757戸の被害となった。	
昭和28	1953	7	17	7	20		大雨				日本海から延びた前線の通過に伴い局地的に豪雨が降り、名古屋市で1,500余戸の浸水被害が出た。	愛知県災害誌(1970)

開始日					終了日			愛知県					
和暦	年	西暦	月	日	日	月	日	気象概要		事象	出典		
								指標	観測局				
昭和	28	1953	9	25				総雨量	名古屋	178mm	最大風速 22.6m/s (10分平均) 最大瞬間 風速 30.4m 最高潮位 2.27m	熊野灘から知多半島に進んだ台風により県下全体で暴風となった。大潮の時期に高潮が重なり、暴風による波浪とともに海岸堤防を破壊し被害が大きくなった。名古屋市をはじめとして6市26町76村に災害救助法が適用された。	愛知県災害誌(1970)
昭和	29	1954	7	30								飛騨川下流域から南下した雷雲が名古屋市北西部に達し、移動経路上で短時間の豪雨を降らせた。名古屋市の北部、西部の限られた狭い地域で5,000戸を超える家屋が浸水した。	
昭和	29	1954	8	31	1							数多くの雷が発生し、入鹿池周辺や中島郡、海部郡、名古屋市などに大雨を降らせた。尾張西部を中心に床上浸水289戸、床下浸水11,730戸の被害が出た。	
昭和	29	1954	9	18	9	19		総雨量	名古屋	91mm	最大風速 18.7m	紀伊半島南端をかすめ御前崎に上陸した台風に伴う暴風雨で死者4人の被害が出た。	
昭和	29	1954	9	25	9	26		総雨量	名古屋	115mm	最大風速 31.8m	台風が刺激された本州南岸の前線が、名古屋付近から知多半島にかけて激しい雨を降らせ、名古屋市で5人の負傷者、3,448戸の浸水家屋が出た。	
昭和	30	1955	10	20				総雨量	名古屋	34mm	最大風速 32.0m	田辺付近に上陸し、強い勢力を保ったまま名古屋と岐阜の間に進んだ台風の暴風で、74戸の家屋が全半壊した。これに伴う死者3人、負傷者18人という被害が、名古屋市を中心に出了た。	
昭和	31	1956	7	7								寒冷前線の通過に伴う強い雨で、名古屋市を中心に浸水被害が発生した。	
昭和	31	1956	9	26	9	27		総雨量	名古屋	136mm	最大風速 20.0m	潮岬から東海道沖を通過して御前崎に上陸した台風により、名古屋市で全半壊家屋4戸、浸水家屋3,559戸の被害が出た。	
昭和	32	1957	8	7	8	8						名古屋から多治見の狭い地域に短時間の集中豪雨があり、庄内川が増水、付近の小河川や池が氾濫した。瀬戸市、高蔵寺町を中心に死者33人、負傷者44人、全壊家屋76戸、床下浸水23,961戸という被害となった。	愛知県災害誌(1970)
昭和	33	1958	8	25	8	26		総雨量	名古屋	140mm	最大風速 24.1m	和歌山県白浜付近から琵琶湖西岸を通過した台風により、各地で浸水被害が起きた。	下山村史資料編I

愛知県											
和暦	年	西暦	開始日			終了日			気象概要	出典	
			日	月	日	月	日	日			
											指標
			気象値			事象					
			降水量			風速等					
昭和	34	1959	8	12	8	14	大雨	総雨量 名古屋	岐阜県養 老町 牧田川決 壊 最大風速 17.7m	太平洋岸の前線と北上する台風第7号の影響で大雨が降り、 負傷者1人、家屋全半壊25戸、床上浸水14戸、床下浸水8、826 戸の被害が出た。	
昭和	34	1959	9	26			台風第15号 (伊勢湾台 風)		鳴海、小 牧付近 で最大風 速60m	潮岬から高山湾に進んだ台風によって猛烈な暴風雨となっ た。また高潮による異常潮位が伊勢湾奥で基準面上4mに達し た。急激な洪水波と高潮で、木曾川、庄内川、矢作川などが 破堤し、死者3、280人、負傷者59、045人、住家全壊23、334 戸、住家半壊97、049戸、流失家屋3、194戸、浸水家屋10万戸 以上という未曾有の被害を出した。	愛知県災害誌(1970)
昭和	35	1960	8	11	8	13	台風第11号 、第12号	総雨量 名古屋	最大風速 18.3m	相次いで室戸岬から日本海へ進んだ台風の影響で、海部郡立 田村で長良川が氾濫し1戸が流失した。また名古屋市北区で 突風が吹き1戸が倒壊した。	
昭和	36	1961	6	24	6	27	大雨・洪水			梅雨前線が北上し、熱帯低気圧の影響もあって激しい雨が降 り、伊勢湾台風以来の大きな水害となった。尾張西部ではほ とんどの小河川が氾濫し、名古屋でも約3、000戸が床上浸 水した。	災害記録目比川
昭和	36	1961	9	15	9	16	台風第18号 (第2室戸台 風)	最大風速 42m		室戸岬に上陸し若狭湾に進んだ台風の暴風雨で、飛散物や倒 壊物による多数の負傷者が出た。知多郡大府町内に竜巻が発 生し、愛知郡豊明方面で消滅した。この竜巻で8工場が倒 壊、14人が重軽傷を負い、家屋120戸が破損した。また尾張 平野の北部や西部で小河川が溢水、破堤して浸水被害が発生 した。	
昭和	37	1962	7	2	7	5	大雨・洪水			北上し活発化した梅雨前線の影響で名古屋方面で大雨とな り、千種区の松野池の堤防が決壊するなどした。尾張地方で 全壊1戸、半壊1戸、床上浸水892戸、床下浸水13、182戸の被 害が出た。	
昭和	37	1962	7	27	7	28	台風第7号	総雨量 名古屋	最大風速 23.8m	潮岬西方に上陸し衰弱しながら伊吹山方面に進んだ台風の影 響で大雨が降り、名古屋南部に浸水被害が発生した。	
昭和	37	1962	8	26	8	27	台風第14号	総雨量 名古屋	最大風速 38.8m	尾鷲付近に上陸し北上した台風の暴風で、家屋が倒壊し負傷 者も発生した。また名古屋方面で浸水家屋が発生した。	

愛知県														
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典		
	年	西暦	月	日	月	日		指標	降水量				風速等	
									観測局	値				
昭和39	1964	8	3				落雷・洪水・突風					炎天と上空の寒気の影響で猛烈な雷雨が発生した。名古屋市中区では、中心部で地下街へ浸水したのをはじめ、床上浸水265戸、床下浸水9,814戸の被害が出た。また中区や千種区での落雷により、全焼家屋3棟、半焼家屋2棟の被害、海部郡蟹江町では突風により家屋が倒れて負傷者1名が出た。		
昭和40	1965	5	27				台風第6号					東海道沖を込んだ台風が前線の活動を強め、強い雨が降って名古屋市中および周辺地域に浸水被害が発生した。		
昭和40	1965	9	17				台風第24号	総雨量	名古屋	最大風速 27.0m	189mm		志摩半島尖端に上陸し伊良湖岬に進んだ台風と前線による大雨で、名古屋市などで多くの浸水家屋が発生した。	
昭和41	1966	9	19				大雨						台風第21号から変わった低気圧が停滯前線上を進んだ影響で、名古屋近郊から矢作川流域にかけて強い雨が降り、名古屋市内で家屋浸水約1,600戸の被害があった。	
昭和42	1967	7	2	7	3		大雨	総雨量	名古屋		83mm		梅雨前線上を東進した低気圧の影響で雨が強くなり、小牧市の台瀬川右岸堤防が約1m崩壊し決壊寸前となった。名古屋市と庭郡で床上浸水3戸、床下浸水1,200戸の被害が出た。	
昭和42	1967	7	9	7	10		大雨						台風第7号から変わった温帯低気圧が前線を活発化させ、雷を伴った強雨となった。小河川の氾濫や排水不良のため、主に尾張地方で16,000棟を超える住家浸水があった。また中央線高蔵寺一定光寺間で山側のコンクリート壁が崩れて線路を埋めたところにも普通電車が衝突し19名が負傷した。	
昭和42	1967	10	28				台風第34号	総雨量	名古屋	最大風速 20.8m	146mm		志摩半島の先端をかすめて渥美湾に上陸した台風に伴う大雨で、名古屋市では南区を中心に18,000戸の住家浸水があった。	
昭和43	1968	8	29				台風第10号			最大風速 18.2m			台風の接近で前線が活発になり長雨が降った。台風本体の雨は主に三河地方北東部に降ったが、名古屋周辺でも約2,000戸の住家浸水があった。	
昭和45	1970	6	14	6	16		大雨	総雨量	名古屋	最大風速 11.3m	179mm		九州の西で発達した低気圧が梅雨前線を活発化させて大雨を降らせ、名古屋市中およびその周辺市町村での住家浸水を主とする災害となった。	
昭和45	1970	7	29	7	30		集中豪雨	総雨量	名古屋	最大風速 11.3m	124mm		九州の南海上で台風6号となった熱帯低気圧の影響で、名古屋市東南部での集中的な大雨となった。天白川水系が氾濫するなどして、約4万棟の浸水家屋が生じ、昭和区、緑区内ではがけ崩れのため2人が死亡した。	

開始日					終了日			気象概要	気象値			事象	出典
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日		降水量		風速等		
									指標	観測局			
昭和	46	1971	7	18								日本海と太平洋の2つの前線の影響で強い雷雨となった。春日井市内で落雷による死者2人、名古屋市内で2,318棟の浸水被害が出た。	
昭和	46	1971	8	30	8	31		総雨量 名古屋 322mm 大沼 464mm	最大風速 19.5m		速度が遅く、強雨域の広い台風の影響で記録的な大雨となった。土砂崩れにより豊田市で死者2人、名古屋市内で3万戸を超える浸水被害となった。		
昭和	46	1971	9	7								台風が秋雨前線を刺激して大雨となった。	
昭和	46	1971	9	26								時速70kmの速さで北上し紀伊半島から名古屋市の南海上を通り抜けた台風が、短時間に強い雨を降らせ、名古屋市内およびその周辺市町村での住家浸水が発生させた。	
昭和	47	1972	7	10	7	15		総雨量 猿投 458mm				東海地方に停滞した梅雨前線の活動が活発で強い雨が長く続いた。とくに西三河の山間部において記録的な集中豪雨となり、各地で山崩れや河川の氾濫が発生し、埋没・倒壊・流出する家屋が続出した。西加茂郡小原村、藤岡村、豊田市などで死者68人の被害を出した。前線の活動が一服した後の台風通過に伴う大雨被害とあわせて、住家の全壊271棟、半壊287棟、床上浸水2,075棟、床下浸水12,077棟という被害となった。	愛知県災害誌(1980)
昭和	47	1972	9	16	9	17			最高潮位 2.7m			紀伊半島を縦断して米原付近に進んだ台風の前線の影響も加わって、風雨が強まり高潮も発生した。名古屋市内などで飛来物による死者2人、負傷者106人、住家の半壊795棟にのぼった。	
昭和	48	1973	8	4	8	5		小牧(名古屋航空測候所) 総雨量 194mm				飛騨川流域から南下した雷雲が小牧付近で発達し名古屋市から北東へ進んだ。激しい雷雨により名古屋市内の地下鉄がマヒしたほか、名古屋市内およびその周辺市町村に5万戸以上の住家浸水が発生した。	
昭和	49	1974	7	24	7	25		総雨量 名古屋 140mm				動きの遅い低気圧に伴う大雨の影響で、名古屋市内およびその周辺市町村に約5万戸の住家浸水が発生した。	愛知県災害誌(1980)
昭和	50	1975	7	3	7	4		総雨量 春日井 142mm				四国南岸から東海道へ前線を進んだ低気圧の影響で強い雨が降り、瀬戸市内で崖崩れが多発して、負傷者4人を出した。濃尾平野南部でも多数の浸水被害が発生した。	
昭和	51	1976	7	28				総雨量 坂下 78mm				寒冷前線の雷雨で、落雷による住家の全壊1世帯、名古屋市内と東海市で床上浸水95世帯、床下浸水4,400世帯の被害が発生した。	

開始日				終了日			気象概要	気象値			事象	出典
和暦	年	西暦	月	日	月	日		降水量		風速等		
								指標	観測局			
							総雨量	名古屋	58mm			
							総雨量	一宮	682mm			
昭和	51	1976	9	8	9	13	総雨量	蟹江	642mm			
							総雨量	小牧	523mm			
							総雨量	名古屋	423mm			
昭和	52	1977	8	16	8	18	総雨量	一宮	140mm			
昭和	53	1978	9	16			総雨量	一宮	91mm			
昭和	54	1979	9	24	9	25						
昭和	55	1980	7	7	7	10	総雨量	東海	137mm			
昭和	55	1980	8	26	8	27	総雨量	中(名古屋市)	174mm			
昭和	57	1982	8	7	8	8						
昭和	58	1983	7	8								
昭和	58	1983	9	27	9	29	総雨量	名古屋	234mm			
昭和	62	1987	9	25								
昭和	62	1987	10	16	10	17						

停滯前線と東シナ海をゆっくりと北上し、北上市上した台風から延びた雨雲の影響で、西濃山地や鈴鹿山脈の東側が強い集中豪雨域となり、1週間に年間雨量の約1/3の雨が降った。県西部で中小河川が氾濫し、日光川支流の目比川右岸が破堤するなどして、10万戸以上の浸水被害が出た。海部郡佐織町では1週間近くも浸水状態が続いた。また名古屋市中川区・海部郡大治町では突風による家屋倒壊の被害もあった。

前線と弱い熱帯低気圧の影響で大雨が降り、県西部地域で家屋の半壊1棟、床上浸水、床下浸水などの住家被害が発生させた。

台風第18号から変わった弱い熱帯低気圧の影響で強い雨が降り、名古屋のほか県西部域の22市町で家屋の床上および床下浸水が発生した。

南岸沿いの前線と台風16号の影響で、局地的に短時間の強い雨が降り、名古屋、東海市、豊明市などで床上・床下浸水の被害が発生した。

活発化した前線を通して低気圧の影響で強い雷雨となり、名古屋市北区、中区、昭和区、東区を中心に約1,000世帯の床上、床下浸水被害が出た。

日本海の低気圧から延びた前線の通過に伴い、名古屋で局地的集中豪雨となった。名古屋では、中川区、熱田区、港区を中心に、床上浸水413戸、床下浸水13,028戸の被害となった。

上空の寒気の影響で激しい雷雨となり、名古屋を中心とした尾張地方各地で、床上浸水、床下浸水が多発した。

日本海と南岸を東進した低気圧の上空に流れ込んだ寒気の影響で、名古屋市東部と春日井市を中心に大雨となり、床上浸水41棟、床下浸水1,053棟が発生した。

台風10号から変わった熱帯低気圧が四国南岸から本州の南を東進した影響で、名古屋を中心とする県西部で集中的な豪雨となり、死者5人をはじめ大きな被害が出た。

九州の南から本州南岸を東進した低気圧の影響で、名古屋を中心に雷を伴った激しい雨となり、名古屋で床上浸水127棟、床下浸水2,380棟の住家被害があった。

台風19号では死者1人、負傷者1人、いずれも東三河。

愛知県

愛知県災害誌(1980)

愛知県													
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典	
	年	西暦	月	日	月	日		指 標	降水量				風速等
									観測局	値			
昭和63	1988	8	24				大雨				気圧の谷の通過に伴う寒気の影響で、県内のほぼ全域で雷雨となり、県西部を中心に住家の浸水被害が多く出た。		
昭和63	1988	9	20				大雨				本州上を東進した低気圧に湿った空気が流れ込んだ影響で、県西部を中心に短時間に激しい雨が降り、多くの住家の浸水被害を出した。		
平成2	1990	9	17	9	18		大雨	総雨量	東海	276mm	台風19号からの暖気の流入で秋雨前線が活発化しながら近づき、県下全域で大雨が降り、とくに尾張、知多地方で強い雨に伴う浸水被害が多く発生した。		
平成2	1990	9	19	9	20		台風19号				大型で強い勢力の台風が和歌山県白浜から愛知県内を進み、暴風雨となった。県西部では負傷者5人、住家の半壊2棟などの被害が出た。		
平成2	1990	11	30	12	1		台風第28号				和歌山県白浜町に上陸し岐阜県北部へ進んだ台風で県内は暴風雨となり、県西部で床上浸水30棟、床下浸水1,033棟の被害となった。人的被害はなかった。		
平成3	1991	9	18	9	19		台風第18号	日雨量	名古屋	218mm	沖繩の東から隼子沖に高進した台風に伴い、南岸の秋雨前線が活発化した。太平洋側各地で記録的な大雨となり、名古屋市や春日井市で床上浸水1,846棟、床下浸水7,351棟などの被害が出た。		
平成6	1994	7	8	8			干害				死者・行方不明者8人。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM	
平成6	1994	9	17	9	18		大雨				上空に寒気を伴った低気圧が停滞した影響で、激しい雷雨となり、名古屋市はじめ36市町で床上浸水、床下浸水計6,048棟が発生した。		
平成10	1998	9	21	9	23		台風第7・8号				和歌山県西部に上陸した台風8号により激しい雨となり、続いて上陸した台風7号が愛知県西方を通ったことから暴風雨となった。名古屋市と一宮市で死者3人、県西部地方を中心に重軽傷者151人などの被害が出た。	愛知県地域防災計画	
平成12	2000	9	11	9	12		大雨	総雨量	東海	589mm	秋雨前線に台風第14号の影響が加わって、非常に激しい雨が降り、死者7人、重軽傷者107人の被害を出した。	愛知県地域防災計画	
平成16	2004	9	4	9	5		東海豪雨	総雨量	名古屋	567mm			
平成16	2004	9	4	9	5		大雨	日雨量	名古屋	136mm	日本海の停滞前線に暖湿気流が流れ込んだ影響で、名古屋市付近で短時間に局地的な大雨が降り、床上浸水250棟、床下浸水1,584棟の被害を出した。		
平成20	2008	8	28	8	30		8月末豪雨	総雨量	名古屋	237mm	名古屋市で住家の損壊8棟、床上浸水1,175棟、床下浸水9,929棟の被害が出た。一宮市では軽傷者1人もあった。	愛知県の災害の記録平成20年(2009)	

開始日				終了日			愛知県					
和暦	年	西暦	月	日	月	日	気象値			事象	出典	
							気象概要	降水量	風速等			
							指標	観測局	値			
平成	21	2009	10	8			総雨量	東海	206mm		強い勢力を維持したまま多半島に上陸した台風の影響で、非常に強い風が吹いた。重軽傷者19人、住家の全半壊47棟、一部破損2,092棟、床上浸水246棟、床下浸水1,235棟の被害となった。	愛知県地域防災計画

※被害実数は文献により差異があります。

土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書

名古屋北部

5万分の1

平成24年3月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省
ホームページからご利用いただけます。